

成人女性のアイデンティティ発達過程と
危機様態に関する研究

——ケア役割を担うことによるアイデンティティの危機と発達——

課題番号 07610132

平成7,8,9年度文部省科学研究補助金

(基盤研究(C)(2))

研究成果報告書

平成10年3月

研究代表者 岡本祐子

(広島大学 教育学部 助教授)

成人女性のアイデンティティ発達過程と
危機様態に関する研究

—— ケア役割を担うことによるアイデンティティの危機と発達 ——

課題番号 07610132

平成7,8,9年度文部省科学研究補助金（基盤研究C）

研究成果報告書

平成10年3月

研究代表者 岡本祐子

(広島大学 教育学部 助教授)

研究組織

・研究代表者

岡本 祐子 (広島大学 教育学部 助教授)

・研究協力者

宇都宮 博 (広島大学大学院教育学研究科博士課程後期) 平成7・8・9年度
蜂屋 陽子 (広島大学教育学部教科教育学科) 平成7年度
三崎いずみ (広島大学教育学部教科教育学科) 平成7年度
岡田 恵子 (ノートルダム清心女子大学大学院
人間生活学研究科博士課程前期) 平成8・9年度

研究経費

平成7年度	1,100,000 円
平成8年度	400,000 円
平成9年度	400,000 円
合計	1,900,000 円

研究発表

学術論文

1. 岡本祐子 1995 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について:理論的展望と生活レベルに見られる2,3の問題. 広島大学教育学部紀要 第Ⅱ部, 44, 145-154.
2. 岡本祐子 1995 ライフサイクルとアイデンティティに関する研究.
鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編)『アイデンティティ研究の展望Ⅱ-1982~1986年』ナカニシヤ出版, Pp. 206-235.
3. 岡本祐子 1996 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究.
日本家政学会誌, 47, 849-860.
4. 岡本祐子 1997 ケアすることによるアイデンティティ発達に関する研究Ⅰ:高齢者介護体験による成長・発達感とその関連要因の分析. 広島大学教育学部紀要 第Ⅱ部, 46. (印刷中).
5. 岡本祐子 1997 ライフサイクルとアイデンティティに関する研究.
鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編)『アイデンティティ研究の展望Ⅳ-1987~1991年』ナカニシヤ出版, Pp. 337-367.

口頭発表

1. 岡本祐子 1995 少子化社会における女性の発達とメンタルヘルス: アイデンティティ論の立場から. 日本精神衛生学会第11回大会シンポジウム「少子化とメンタルヘルス」話題提供, 抄録集, Pp. 10.
2. 岡本祐子 1996 アイデンティティ発達における「関係性」と世話の意味について
日本教育心理学会第38回大会シンポジウム「もうひとつの心理学をめざして:心理学とフェミニズムの視点」話題提供, 論文集, Pp. S98-99.
3. 岡本祐子 1997 高齢者介護体験による成長・発達感に関する研究Ⅰ
日本発達心理学会第8回大会論文集,
4. 岡本祐子・三崎いずみ 1997 高齢期における介護-被介護関係に関する研究Ⅰ:介護による成長感と, 老いと死の受容プロセスの検討. 日本家政学会第 回大会論文集,
5. 岡本祐子 1997 女性の生涯発達とアイデンティティ. 日本教育心理学会第39回大会シンポジウム「女性の生涯発達とアイデンティティ」企画および司会, 論文集, Pp. S40-41.

本研究の成果を含む出版物

単著書

1. 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学. ナカニシヤ出版.

編著書

1. 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1995a アイデンティティ研究の展望Ⅱ.
ナカニシヤ出版.
2. 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1995b アイデンティティ研究の展望Ⅲ.
ナカニシヤ出版.
3. 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1997 アイデンティティ研究の展望Ⅳ.
ナカニシヤ出版.
4. 岡本祐子・平田道憲・岩重博文(編) 1998 人間生活学: 生活における共生の理念と実践.
北大路書房.
5. 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1998a アイデンティティ研究の展望Ⅴ-1.
ナカニシヤ出版.
6. 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1998b アイデンティティ研究の展望Ⅴ-2.
ナカニシヤ出版.

共著書

1. 岡本祐子 1995 人生半ばを越える心理. 南 博文・やまだようこ(編)『講座 生涯発達心理学 第5巻 老いることの意味』金子書房, Pp. 41-80.
2. 岡本祐子 1995 青年の意思決定. 落合良行・楠見 孝(編)『講座 生涯発達心理学 第4巻, 自己への問い直し』金子書房, Pp. 185-220.
3. 岡本祐子 1996 ライフサイクルから見たアイデンティティ形成力と自己評価.
若き認知心理学者の会(編)『認知心理学者 教育評価を語る』北大路書房,
Pp. 216-225.
4. 岡本祐子 1997 生涯発達から見た高齢期. 山野井敦徳(編)『高齢者教育論』東信堂,
Pp. 29-44.
5. 岡本祐子 1998 人生最盛期の課題と技法. 鎌幹八郎(監修)『精神分析的な心理療法の手引き』誠信書房. (印刷中).
6. 岡本祐子 1998 中年期の性格の諸問題. 詫摩武俊(編)『性格心理学ハンドブック』
福村出版. Pp. 480-486.
7. 岡本祐子 1998 成人期の発達 下山晴彦(編)『教育心理学: 発達と臨床援助の心理学』
東京大学出版会. (印刷中).
8. 岡本祐子 1998 家族, その理解と援助. 三沢昭文(監修)『介護における人間 --その理
解と援助』中央法規出版. (印刷中).

論文

1. 岡本祐子 1996 私のなかの「もう一人の私」 発達, 65, 21-25.
2. 岡本祐子 1996 中年期女性の危機と発達: アイデンティティの揺らぎと再確立.
教育と医学, 44, 29-35.
3. 岡本祐子 1997 中年期のアイデンティティの危機と発達: 中年の危機をキャリア発達に
どう生かすか. 現代経営学研究学会誌 ビジネス・インサイト, 17, 20-33.

はじめに

本報告書は、平成7・8・9年度 文部省科学研究補助金(基盤研究C)「成人女性のアイデンティティ発達過程と危機様態に関する研究」の成果をまとめたものである。

ライフサイクル全体を展望した心の発達は、今日、我が国においても、学問的にも社会的にも注目されるようになった。しかしながら、第1章において述べたように、成人期の発達の研究の多くは男性を対象としたものであり、女性の発達の特徴は明確な理論化には至っていない。また社会的に見ると、今日、女性の生き方、社会とのかかわり方、家族のあり方は、大きく変わってきている。このことは必然的に我々一人一人に、本当の自分とは何か、自分らしい生き方とは何か、というアイデンティティの模索を促すことになっている。本研究は、このような学問的、社会的な背景をもとに、成人女性のアイデンティティの危機様態の特徴を分析し、その発達の方向性を検討することを目的としたものである。

本研究はまず、成人女性のアイデンティティ発達に関する諸外国と我が国の研究を総覧し、展望する作業から始められた。その概要は、本報告書の第1章にまとめている。これらの研究文献の総覧と展望から得られた仮説的ビジョンは、成人期のアイデンティティを、個としての発達と関係性にもとづく発達という2つの軸、およびそれらの相互のかかわりあいの中でとらえていくというものである。第2章では、この「関係性」についてさらに理論的な考察を深めるとともに、現実の生活場面でそれらがどのように現れ、また葛藤を引き起こしているかについて論考した。

第3～5章は、この理論仮説を実証的に検討することを目的とした。つまり、成人期の女性にとって、「関係性」の中核的要素であるケア役割を担うことによるアイデンティティの発達について、実証的データにもとづいて検討した。

以上の本研究の成果は、数編の学術論文として発表するとともに、いくつかの著書の中でもとりあげ、論考を加えた。それらの本研究の成果をまとめた論文や本研究の結果を紹介した出版物の一覧は、本報告書のはじめに掲載したとおりである。中でも、本研究の3年次に出版した拙著『中年からのアイデンティティ発達の心理学』は、筆者の20代からの研究テーマである成人期における個としてのアイデンティティの発達と、本研究のテーマである「関係性にもとづくアイデンティティの発達」が、成人期にどのように展開していくのかという問題について論じたものである。また、平田道憲・岩重博文との共編である『人間生活学 --- 生活における共生の理念と実践』において、このケアすることによる発達を、人

間生活学の基本理念である「共生」の実践という視点から論じた。さらに、本研究と並行して、鑓幹八郎・宮下一博との共編の『アイデンティティ研究の展望』第Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ巻を編集し出版できたことは、成人女性のアイデンティティの発達という本研究のテーマを、アイデンティティ研究全体の枠組みの中からとらえる上で有意義であった。

また、本研究3年次の平成9年度 日本教育心理学会準備委員会企画シンポジウムとして「女性の生涯発達とアイデンティティ」を企画・開催したところ、学会参加者の関心も高く、盛会であった。このシンポジウムは、本研究をまとめる上で非常によい刺激となった。その内容は、『女性の生涯発達とアイデンティティ』(岡本祐子編, 北大路書房)として、近い将来、出版の予定である。

最後に本研究が、研究組織の欄に掲げた多くの若く有能な研究協力者に恵まれて行われたことを感謝したい。蜂屋陽子さんと三崎いづみさんは、本研究のデータ収集に多大なる援助をいただいた。また、宇都宮博君と岡田恵子さんは、それぞれ独自の視点で研究を分担し、成人女性の発達をとらえる上で、関係性の重要性を示す貴重な論文をまとめていただいた。

本研究では、当初、面接調査を中心に進めて行くことを計画していたが、3カ年という限られた時間の中では、面接調査はごく一部しか実施できなかった。しかし、アイデンティティの生涯発達というテーマは、綿密な面接調査によるデータ収集と分析が不可欠である。本研究の仮説をさらに検証していくために、近い将来、ぜひこれを実施したいと願っている。本研究は、「女性の生涯発達とアイデンティティ」という研究課題の出発点にすぎないが、諸学兄、学姉のご批評をいただければ幸いである。

1998年3月1日

研究代表者

岡本祐子

目 次

第1章 成人女性のアイデンティティ発達に関する研究の動向と展望 …………… 1	
	岡本祐子
第2章 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」に側面について ……23	
---理論的展望と生活レベルにおける2, 3の問題---	
	岡本祐子
第3章 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に 関する研究 ……………39	
	岡本祐子・蜂屋陽子
第4章 ケアすることによるアイデンティティ発達に関する研究Ⅰ ……………53	
---高齢者介護による成長・発達感とその関連要因の分析---	
	岡本祐子
第5章 ケアすることによるアイデンティティ発達に関する研究Ⅱ ……………62	
---介護体験を通じて見られる老いと死の受容プロセスの分析---	
	三崎いづみ・岡本祐子
第6章 成人前期から老年期における自律達成的価値と愛着関係性価値の 発達、統合について ……………73	
	岡田恵子
第7章 高齢女性の配偶者との関係性と死別への準備性 ……………84	
	宇都宮 博

第 1 章

成人女性のアイデンティティ発達に 関する研究の動向と展望

1. はじめに

ライフサイクル全体を展望した心の発達は、最近、我が国においてもさまざまな領域から注目されるようになってきている。1970年代に、Levinson(1978)、Gould(1978)、Vaillant(1977)をはじめとして、いくつかの実証的研究にもとづいた成人発達論が提唱され、1980年代以降、アイデンティティ論の枠組みから行われた中年期・老年期研究も漸増している。しかしながら、これらの理論や研究の多くは、男性を対象にしたものであり、女性の成人期に見られる発達的特質は、しばしば指摘されながらも、明確な理論化には至っていない。それはおそらく、女性の発達のとらえにくさ、つまり個の確立や分離-個体化という視点ではとらえきれない面があることと、女性のライフサイクルの多様性によると考えられる。

本章では、女性のアイデンティティ発達に関する実証的研究を展望し、特に成人期の女性の発達にかかわる問題を整理し、分析した。Erikson(1950)が、アイデンティティ理論を提唱して以来、この半世紀に間に、アイデンティティ研究はさまざまな領域に進展し、「アイデンティティ」という用語を論文題目に含む研究数は、有に4000編を越えている。鏝・宮下・岡本(1984, 1995a, 1995b, 1997, 1998a, 1998b)は、これら諸外国と我が国で発表されたアイデンティティ研究を総覧し、領域別に展望した。それらは、『アイデンティティ研究の展望』第I～V巻として刊行されている。本章ではそのうち、成人期の女性のアイデンティティ発達にかかわる問題領域のみをとりあげて論評し、今後の研究課題を明らかにしていきたい。アイデンティティ研究全体の動向と展望は、『アイデンティティ研究の展望』シリーズを参照していただきたい。

Eriksonやアイデンティティ・ステータス論を提唱したMarciaをはじめとして、アイデンティティ研究の初期の成果の多くは、青年期の男性を対象として導き出されたものである。その後、1970年代に至って、青年期の女性のアイデンティティ形成の特徴が検討されるようになった。図1.に示したように、その後さらに、問題とされる領域も、個体内的次元から家族や職業とのかかわりを含めた社会的次元へ、対象とされるライフステージも青年期にとどまらず、成人初期・中年期へと、次第に拡大してきている。ここでは、それらの研究の動向を、

1. 成人女性のアイデンティティ発達の特徴そのものを検討した研究.
 2. 女性の職業アイデンティティ発達に関する研究.
 3. 妊娠・出産、子供の巣立ちなど、女性特有のライフイベントにともなうアイデンティティ発達に関する研究.
 4. 職業と家庭役割のアイデンティティ葛藤に関する研究.
- に分けて、概観し論考した。

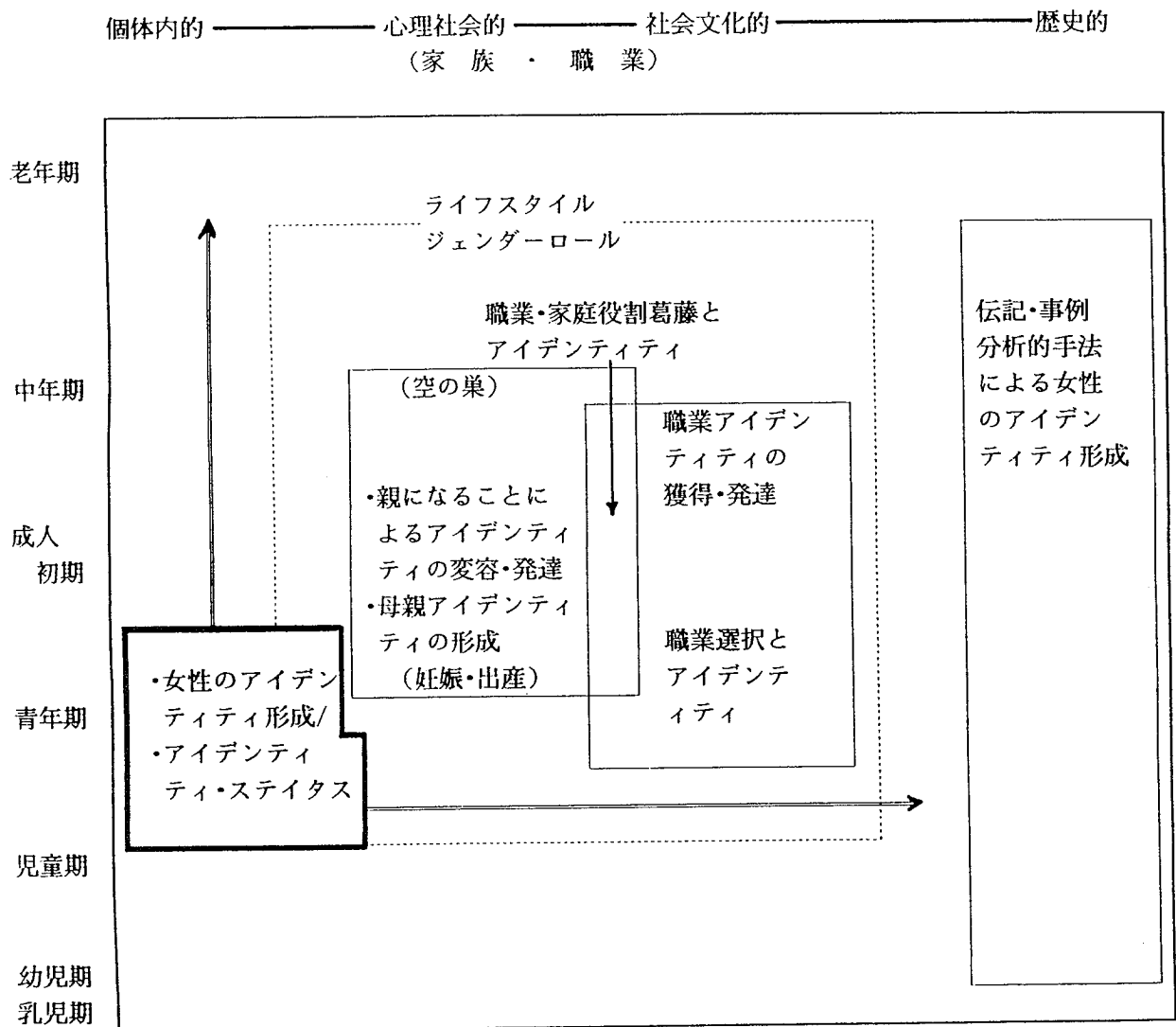


図1. 女性のアイデンティティ発達に関する研究の広がり

2. 成人女性のアイデンティティ発達の特徴そのものを検討した研究

(1)成人女性のアイデンティティ発達の特質に対する問題提起

----Eriksonの「内的空間」説とその後の展開----

成人女性のアイデンティティについて言及した論文は、Erikson(1964)の「女性と内的空間」が最初のものであろう。Eriksonは、1964年に発表したこの論文の中で、女性の身体的構造の特異性、つまり「子宮」に注目し、「内的空間」(inner space)説を展開している。彼は、「統合的なアイデンティティの出現にとって、重大な意味をもつ人生の一段階は、青年期から成熟期への移行が行われる段階」であり、それは、「若き女性が、その労働経歴にかかわりなく、両親から配慮されることを放棄し、それまでは見知らぬ人だった恋人の愛に自分をコミットさせ、やがて自分の子供の世話をするようになっていく過程」であるとした。そしてEriksonは、「女性の肉体構造には選びし男性の子を宿すべき『内的空間』と次代の子供を育くみ世話をするという生物的、心理的、倫理的なコミットが隠されているという事実」に着目した。彼はこの「内的空間」が、女性のアイデンティティ形成において中核的な役割を果たすことを強調している。そして女性のアイデンティティのうちいくらかは、後に配偶者となる男性や子供にコミットするために開かれており、「自分の魅力や体験によって内的空間が心から歓迎するものを選ぶことができるようになったときに」女子青年のモラトリアムは終結すると考えたのである。

1970年以降、この説を検討しようとする研究が次々と発表されている。Josselson(1973)は、女性のアイデンティティ形成過程においては、Eriksonの個体発達分化の図式の第V段階「アイデンティティ獲得」の段階と第VI段階「親密性獲得」の段階は、並行して進むことを明らかにしている。つまり女性は、異性との親密な関係をもつことでアイデンティティがより確かなものとなり、配偶者を選択するまでは自己を完全には定義しきれないでいると述べている。このアイデンティティ確立と親密性の獲得が同時に進行していくという事実は、Eriksonの内的空間説を支持する結果である。

O'Connell(1976)は、中流階級、大学卒の女性をライフスタイルによって、伝統的タイプ(結婚あるいは第1子出産後、専業主婦となる群)、新伝統的タイプ(子育て後、職業に復帰する群)、非伝統的タイプ(結婚・子育てと同時に職業にもついている群)の3群に分類し、アイデンティティ感覚の相違を検討している。その結果、伝統的女性群および新伝統的女性群は、結婚する男性と出会い、子供を産み育てるまで、「自分とは何者か」を定義できないでいたのに対して、非伝統的女性群は、人生の全段階ではっきりとした自己定義と強いアイデンティティ感覚を

持っていた。そして、職業選択がこの自己定義を促進している点では、男性のアイデンティティ形成とよく類似していた。

この結果は、①Erikson(1964)の「内的空間」の概念を必要としない女性群があること、②しかも、伝統的女性群と新伝統的女性群においても、母親であることと子育ては、その役割の反映としての自己定義を生み出すだけで、モラトリアムの終結がアイデンティティ感覚の強さを増大させていないことを示している。この結果から、O'Connellは、「内的空間」説は、男性と結婚し、子供を産むというライフスタイルを前提にしており、ライフスタイルの選択が多様化し、職業を持つ女性も増加した現代では修正が必要であると指摘している。

また、Hopkins(1980)は、女性の自我発達において、「内的空間」とともに、社会的・経済的活動によって家庭を維持するといった「外的空間」についても検討すべきだとしてMarcia(1964)のアイデンティティ・ステータス面接(以下、Marcia法と記す)を用いた調査を行った。その結果、女子青年において、「内的空間」よりも「外的空間」の方が、アイデンティティ形成にとって中心的な役割を果たしていた。すなわち、女性の場合も、これまでは男らしさとされてきた領域においてアイデンティティが形成されていた。Hopkinsは、この結果にもとづき、女性のアイデンティティ発達において、「内的空間」が中心的な問題となってくるのは、子供を産むかどうかの最終的な決定を迫られる30-35歳頃ではないかという仮説を提出している。

3.～5.において後述するように、その後、このライフスタイルや価値志向とアイデンティティ形成の相違に関する問題は、重要なテーマとなっている。

(2) 青年期から中年期までのアイデンティティ発達の個人差

—アイデンティティ・ステータス・パラダイムを用いた研究—

1980年代後半から1990年代にかけて行われた重要な研究の一つは、青年期から中年期までのアイデンティティ発達プロセスと、その個人差について実証的に検討したものである。Hart(1990), Kroger & Haslett(1991)によるこれらの研究は、いずれもアイデンティティ・ステータス論をもとに、青年期以降のアイデンティティ・ステータスの発達過程を分析したものである。

Hart(1990)は、Q技法を用いて、女性の大学生時代と中年期におけるアイデンティティ・ステータスの変化を縦断的に検討している。その結果、大学4年生時にアイデンティティ達成型であった女性は、43歳の中年期に最もよく成長し、肯定的な人生評価をしていた。大学時代に予定アイデンティティ型であった者は、伝統的な女性のライフスタイルを疑問なしに受け入れていた。モラトリアム型であった者は、早期に労働組合に入り、43歳の時点では最も非伝統的な生活を送っ

ていた。またこのタイプの人々は、不満のレベルが最も高かった。約半数の女性は、21歳の大学時代と43歳の中年期に、同じステイタスに分類された。なお、拡散型の女性は対象者が少なかったため、分析できなかったということである。

この研究は、青年期から中年期にわたる長期の縦断的研究として、非常に興味深いものである。Hartの研究結果によると、大学卒業後の20年間の生き方の特徴は、大学時代のアイデンティティ・ステイタスのもつ特徴を非常によく反映したものであった。

Josselson(1987)もまた、青年期から中年期までの女性のアイデンティティ・ステイタスの発達プロセスという問題について検討している。彼女の研究は、『自分自身の発見』("Finding Herself")という単行本として1987年に出版されているが、この研究においても非常に興味深い知見が得られているため、ここにその概要を紹介してHartの研究の結果と合わせて検討してみたい。

Josselson(1987)は、20～22歳の女子大生60名にMarcia法を試み、10～12年後に同窓会名簿を頼りにフォローアップ面接を行うという精力的な縦断研究を行っている。その結果、女性の場合には、予定アイデンティティ型と達成型が多かったが、前者の場合には、「心理的に家を出る」ことをほとんどせずに、親への強い愛着がそのまま保持される形で人間関係様式の中に身を置き、そこで安定を得るという特徴が見られた。達成型には、もう少し自分独自の選択をしたり、変化に向けて開かれているところが見られたが、両者とも不安が少なく、可能性に向けての探求を制限する保護的環境のもとで、むしろ快適に適応した生活を送っていた。拡散型は、親密な人間関係を作りにくく不安が高く、心理的な問題を多く抱えていたが、10年の間に幸運な外的な力によってよい方向に転じている者も見られた。モラトリアム型は、最もリスクの大きい不安定さをかかえてドラマチックな様相を呈し、葛藤や苦勞を多く背負っていたりして、他のステイタスとは異なった特徴を示していた。Josselsonの結果も、大学生時代のアイデンティティ・ステイタスと後の成人期の生き方の間に深い関連性が見られること、特に女性のモラトリアム型は、後の人生行路の困難さ、生きにくさを示唆しているという点で、Hartの結果とよく類似している。

また、Kroger & Haslett(1991)は、40-63歳の男女100名に、Marcia法に性役割領域を加えたアイデンティティ・ステイタス面接を実施し、青年期から中年期までのアイデンティティ・ステイタスの発達プロセスについて検討している。学歴およびライフスタイルによって8つのサブグループを設定した結果、それぞれのステイタスの変化経路には著しい相違が見られた。全体的には、アイデンティティ・ステイタスの変化経路は、「アイデンティティ拡散⇒モラトリアム⇒アイデンティティ達成」のプロセスが最も多かった。また、パーソナリティとライ

フスタイルは、アイデンティティ・ステイタスの変化に大きく関わる要因であることが示唆された。

我が国においても、岡本(1986)が青年期から中年期までのアイデンティティ・ステイタスの発達経路の分析を行い、Waterman(1982)の「アイデンティティ発達の連続的パターンのモデル」をほぼ実証する結果を得ている。Krogerらの研究は、岡本(1986)による青年期から中年期までのアイデンティティ・ステイタスの発達経路の分析結果を、おおむね支持するものである。これらの結果は、最近急速に進展しつつある成人発達研究の知見から見ても、非常に妥当で示唆的なものである。成人期をも発達期としてとらえる成人発達観は、今日、広く認められるようになった。さらに今日では、成人期の心の発達を、人生の岐路に遭遇する毎に、これまでの自己のあり方や生活構造の破綻や破れに直面し、一時的な混乱を経て、再び安定した自己のあり方が形成されていくという「危機⇒再体制化⇒再生」の繰り返しのプロセスとしてとらえる見方が注目されている(岡本, 1994, 1997; 南, 1995)。Krogerら(1991)の研究は、回想法によって、中年期までのアイデンティティ発達過程を分析したものであるが、成人期の発達に対する上記の理解を裏付ける重要な研究であると思われる。

また、園田・中釜による一連の縦断的研究(園田・中釜, 1989a, 1989b; 中釜・園田, 1989a, 1989b, 1990)によっても、青年期に獲得されたアイデンティティはかなり流動的なものであることが示唆されている。

これらの研究は、アイデンティティ・ステイタス論が成人期の発達の研究的理論的枠組として有効であることを示唆するものであろう。ここに紹介したHartやKrogerなどによる青年期のアイデンティティ・ステイタスと中年期のステイタスの関連性を検討した研究と、Kroger(1990)による青年期の各アイデンティティ・ステイタスに見られる早期記憶の特徴を検討した研究は、ライフサイクルにおけるアイデンティティ発達プロセスを考察するための重要な問題提起をしていると思われる。

Kroger(1990)は、大学生の早期記憶の分析によって、青年期の各アイデンティティ・ステイタスのもつ自己と対象との関係に見られる特徴が、早期記憶のテーマに強く反映されていることを見出し、青年期の各ステイタスの発達レベルの相違を、幼児期の分離-個体化期の自我の構造と関連させて説明している。また、Hart(1990)の研究によって見出されたように、約半数の人々は青年期のステイタスが中年期にも維持されており、青年期から中年期に至るまでの生き方もそれぞれのステイタスの特質をよく反映したものであった。Hartの研究の対象者の半数はステイタスの変化が見られたとはいえ、これらの研究は、発達早期の乳幼児期の自我の発達や対象関係の発達によって、後のアイデンティティ発達の

レベルは、ほぼ規定されることを示唆していると考えられる。成人発達研究の進展にともなって、成人期の心の発達の様態が明らかにされつつあるが、それは自我構造にまで至る本質的な発達変化ではなく、より表層的、社会的なレベルのものなのであろうか。この、成人期の発達は、生物学的次元から心理的、社会・文化的次元までのどのレベルでとらえられるのかという問題は、アイデンティティの生涯発達にとって、今後の重要な課題であろう。

さらにまた、Hart(1990)や岡本(1986)など、成人期のアイデンティティ・ステータスの発達経路に関する研究によると、中年期には青年期のアイデンティティ・ステータスの半数は他のステータスに変化している。これらの変化プロセスや、そこにかかわっている要因の分析も、成人期にアイデンティティが発達・成熟して行くための要因や条件を考察する上で、今後の重要な課題であろう。

(3)成人女性のアイデンティティ発達に関するアイデンティティ・ステータス・パラダイムを用いない実証的研究

アイデンティティ・ステータス・パラダイムを用いない研究として、以下に紹介するFranklin(1987)やCooper(1987)の研究は、成人期のアイデンティティ発達における女性の特質を検討した研究として、重要なものである。

Franklin(1987)は、40代の女性9名に青年期から現在に至るまでの回想法による面接調査を行い、女性のボディ・イメージとアイデンティティの確立との関連性を検討している。その結果、Franklinは、女性は17歳から40代後半までの間に、アイデンティティの葛藤・混乱を経て、安定したアイデンティティ統合へのプロセスをたどることを見出している。つまり、成人初期には、女性は自分の体と自分自身に不快感をもっており、アンビバレントな時期である。30代になると、自律性やアイデンティティへの関心が高まり、40代後半には、自立した自己志向的なアイデンティティ意識が強まってくるという。

Cooper(1987)は、43～51歳の女性を対象にTATを用いて、「空の巣」期の前と後とで女性のアイデンティティや自我統制様式(Ego Mastery Style)がどのように変化するかを検討している。TAT分析の結果、プレ空の巣期の女性は、対人関係の維持や自己主張への葛藤を表す物語をよく作るのに対して、ポスト空の巣期の女性は、より自立や自己主張を強調した物語を作ることが見出された。同時に、プレ空の巣期の女性は、自分を従順で攻撃的でなく、男性的特性を有していないと認知しているのに対して、ポスト空の巣期の女性は、自分に自信があり、自立的、自己主張的、創造的であると認知していた。Cooperは、これらの結果より、積極的、主体的な子育て期の終わりには、女性はより能動的な自我統制様式と男性的な心理特性を獲得すると述べている。

Cooperの結果は、Jung, C. G. (1951)が、人間は本来、両性具有的な存在であり、中年期以降はそれまで潜在していた方の性の特性が顕在化する。つまり、男性はより女性的な側面が現れ、女性はより男性的側面が表面化するという考えを裏づけるものである。また、Neugarten(1964)を中心としたカンサス市研究によっても、女性は加齢にともなって男性性が増大することが示唆されており、Cooperの結果はそれを支持するものである。Cooperの研究結果は非常に興味深いものであるが、子育て期の終了前後に見られる上記のような変化が、はたして子育ての結果であるといえるのかどうかは、検討の余地を残している。確かに、まだ子育て期にある女性が、対人関係の維持を大切にし、自己主張を抑えることや、女性性を強調することは、母親役割の遂行と関連性が深いと考えられる。しかし、ポスト子育て期の女性が示す自立や自己主張といった男性性、もしくは個としての自己の表現は、子育てからの解放の結果なのか、それとも子育て体験によって培われた特質なのか、あるいはより単純に加齢によるものなのかは、この研究からは結論することはできない。しかしながら、この問題は、子育てという女性がより重要な役割を担う経験が、女性のアイデンティティ発達にとってどういう意味をもつのかという点から見ると、きわめて重要な問題である。今後の研究が期待されるところである。

また、Franz(1988)は、イギリスの著述家 Vera Brittain の20～30歳までの日記や手紙を分析して、Eriksonのアイデンティティ発達論が、女性の発達へも応用できるかどうかを検討している。その結果、20歳の時点でも30歳の時点においても、最もよく記述されたテーマはアイデンティティに関するものであり、次に親密性と世代性が続いていた。30歳の時点では、親密性と世代性のテーマが増加しており、Brittainのアイデンティティは30歳までには達成されたと思われる。このように、性別にかかわらず、心理社会的テーマは、アイデンティティ、親密性、世代性の順に現れており、Eriksonの理論はほぼ支持されたと考えられる。

さらに、Allder(1991)は、結婚カウンセリングを受けている夫婦と一般の夫婦、48組の中年夫婦を対象に、アイデンティティ、親密性と結婚満足度の関連性を検討している。結果は仮説に反して、アイデンティティと親密性は、中年夫婦の結婚満足度に影響を及ぼす最も重要な要因ではなかった。しかし、結婚カウンセリングを受けている夫婦は、アイデンティティの問題に取り組んでいる途上にあることが見出され、しかもその取り組み方は、夫婦間に注目すべき相違があることが示された。つまり、女性は、妻・母親役割を再吟味することを通して自分らしさを構築しようとしていた。それに対して男性は、仕事を自分の中心的課題としてとらえており、夫婦関係や夫・父親役割の問題は、それほど明確には現れなかった。この男女の相違は、我が国の中年夫婦にも同様に認められる問題であり、中

年期危機の中身が男女でかなり異なることを示唆するものであろう。また、結婚カウンセリングへの動機づけから、中年期が夫婦にとってもアイデンティティの見直しの時期であることが示唆されたことは興味深いことである。

我が国においても、堀内(1990)、杉村(1993)は、40代の中年女性(専業主婦、看護婦、教師)59名を対象に、半構造化面接を行い、中年期のアイデンティティ再構築の様態を示す4つのパターンを見出している。

3. 女性の職業アイデンティティ発達に関する研究

女性を対象にした職業アイデンティティ発達に関する研究は、1980年以降、急増している。また、初期の研究のほとんどが看護婦や看護学生といった伝統的に女性の職業とされた分野に限られた研究であったのに対して、1980年代後半以降の研究は、対象とされた職種もバラエティに富んだものになっている。

このような研究動向の変化の背景としては、ひとつに社会的環境の変化によって、女性の社会参加が進み、従来男性の分野とされた職種に女性が就くことが多くなってきていることがあろう。このような社会的変化は、女性の職業における自己実現の可能性を増加させるとともに、課題とされる事柄も同時に生みだしているといえる。その結果、女性の職業アイデンティティの研究の必要性が増し、対象とされる職種も多岐にわたるものとなっていったと考えられる。

また、もうひとつの要因として、アイデンティティの研究動向の変化がある。初期には男性が対象であったアイデンティティ研究が、性差の検討へ、さらに男性とは異なる女性特有のアイデンティティへも焦点があてられるようになってきている。これまでも女性のアイデンティティについては、男性と異なる特徴や独自の発達経路があることが指摘されてきたが、それが職業アイデンティティの分野においても、女性を対象とした研究を多く生みだしている要因であろう。以下に、女性の職業アイデンティティの発達に関する主要な研究を概観する。

(1) 職業アイデンティティの発達における女性の特徴

Forrest & Mikolaitis(1986)は、女性の職業発達の理論について考察し、アイデンティティのあらたな構成要素である対人関係的要素について記述している。そして男性のアイデンティティが母親や他者からの分離にもとづいて形成されるのに対して、女性のアイデンティティは他者との愛着関係や結合にもとづいて形成されるとし、アイデンティティ形成に対人関係的要素をとりいれることで、職業発達の理論を拡大する可能性を示している。

また、Garfunkel(1985)は、プロの画家、彫刻家、版画家47名に対して半構造化

面接を行い、芸術家のアイデンティティの性差について、次のような興味深い考察を行っている。従来、女性が芸術へのコミットメントを欠いていると考えられてきたことは、実はアイデンティティの概念の問題であり、女性は人間関係と相入れない一人立ち的な个体化を強調する男性芸術家神話にも、女性芸術家の真剣なコミットメントと矛盾するような女性芸術家神話にもくみしていない。女性は実際に芸術活動を行っている間にだけ、自らを芸術家として体験しているのに対し、男性は自分の存在そのものにおいて芸術家であるという感覚をもっている。男性芸術家が芸術を自己表現活動としてのみ見ているに対して、女性芸術家は、それを自己の中心的な芸術創作であるとみなし、芸術創作の概念の中に自己主張と他者への関心を統合しようと試みている。男性が芸術を第1に、人間関係を第2に置いているのに対し、女性は生活のなかでの両者のバランスというものを大切にしている。この研究は、性別による職業アイデンティティの質的な差異について慎重に考えていかなければならないことと同時に、アイデンティティの概念についてもさらに検討していく必要があることを示している点で興味深いものである。

Baker(1987)は、高校生の進路選択について、とくに科学的な職業を志向する女子学生を中心に性役割の自己認知との関連を検討している。その結果、科学を好む女子学生は、ポジティブな性役割認知をしており、男性性も高いことを明らかにしている。すなわちここでも複数の性役割アイデンティティの統合の重要性を支持する結果となっている。

(2) ライフスタイル・職業志向性とアイデンティティ

Freedman(1987)は、女子大学生を対象にMarcia法による面接を行い、アイデンティティ・ステータスにおけるアイデンティティ達成型と予定アイデンティティ型について検討を行っている。その結果として、家庭を優先するかキャリアを優先するかという問題とアイデンティティ・ステータスには高い相関が見られた。このことから家庭志向かキャリア志向かという問題は、女性のアイデンティティにとって中核的テーマであるとしている。アイデンティティ達成型の女性は、経済的な必要がなくてもキャリア遂行をめざし、就学前の子供がいる時期にも就労を計画し、家庭とキャリアを同等またはキャリア優先に価値づけていた。予定アイデンティティ型の女性は、キャリアへの関与は低く、子どもの就学後に就労を計画し、家庭優先であった。また、母親が早くからフルタイムで働くことは、娘のキャリアへの高い関与を促進させることが示唆されている。この研究は、ライフスタイルとアイデンティティ発達の関連性を検討した研究としても重要である。

また、1980年代から、大学への再入学や仕事への関心など、成人女性がこれまでの伝統的役割や価値志向から脱却し、新しい個としてのアイデンティティを獲得しようとする際に生じる問題点を検討した研究も行われるようになっていく。Low & Bailey(1990)は、通常の大学生と23歳以上で少なくとも5年間学校を離れていた再入学の女子大生を対象に、職業アイデンティティ・ステータスの比較を行っている。そして両群のアイデンティティ形成パターンは類似しており、女性の職業アイデンティティは、青年期後期に完了するとはかぎらず、模索を繰り返しながらラセン的に発達していくという結果を得ている。

この他にも、Morgan(1987)やCaracelli(1989)などの研究が見られ、生活の変化やアイデンティティの変化への願望が女性の大学への再入学を促すことが示唆されている。しかしながら、Caracelli(1989)の研究からは、大学生活によって女性が本当にアイデンティティを達成できるかどうかには、かなりの個人差があることが示唆されているなど、明確な結論には至っていない。

縦断的研究として、女性の職歴の安定と変化のパターンを職業アイデンティティの概念から考察したのが、Spenner & Rosenfeld(1990)である。この研究は1979年の時点で30歳の女性2536名を対象に、1966年からの13年間の職歴を調査したものである。その結果、13年間に2821件の常勤のキャリア志向型の就労、6329件の常勤の収入志向型の就労、11664件の非常勤の就労を見出している。その職業の移行率と3つの変数、すなわち、①複数の期間を越えて固定しているもの(例:高校での職業アイデンティティ)、②1期間ごとに変化するもの(例:前の仕事の期間)、③同じ期間で変化のあるもの(例:学歴アップ、結婚・離婚、賃金)との関連を検討している。結果として、女性の職業移行に影響を与える決定的要因は、未婚・離婚と結婚、6歳以下の子どもの有無であった。また職業アイデンティティのタイプ(常勤キャリア志向職業アイデンティティ、常勤収入志向職業アイデンティティ)が、その内容と一致した行動を生じさせ、人生コースや職業状態に影響を与えることを明らかにしている。このことから、Spennerらは、女性の職業歴の構造を明らかにするために職業アイデンティティ概念の有効性を提唱している。

最後に、Spain & Bédard(1991)と Phelps(1991)の研究にふれておきたい。Spainら(1991)は、青年女子の職業アイデンティティにとって、対人関係とキャリアの統合が重要課題であり、統合により就職や継続機会が増加するであろうとしている。この指摘は、アイデンティティ研究において近年重視されつつある、対人関係の領域を女性の職業アイデンティティ研究において活用するための方向性を示していると思われる。

Phelps(1991)は、女性の職業アイデンティティ形成について、①知能の発達、

②情動の統制、③自律性の発達、④アイデンティティの確立、⑤対人関係からの自由、⑥目的の展開、⑦信念の発達、の7つの側面から検討を行い、有能な女性は強固なアイデンティティが確立したときにのみ、能力や価値、キャリア目標を選び行動できるとしている。これらの研究は、今後の実証的研究の方向性を示すとともに、女性の職業発達のための介入プログラムづくりへの理論的基礎を提供するものといえよう。

以上の実証的研究は、女性の職業発達に関して、性役割アイデンティティ、アイデンティティ・ステータス理論、母性性との統合、職業アイデンティティのタイプといった観点から検討を行っている。特に、Spenner & Rosenfeld(1990)の研究は、職業アイデンティティという視点から13年間という長期間にわたって職業移行のプロセスとその要因についての検討を行っており注目に値する。このような縦断的研究の進展により、女性の職業アイデンティティ研究もライフサイクルを視野に入れたものへと発展していくと思われる。

4. 女性特有のライフイベントにともなうアイデンティティ発達に関する研究

妊娠・出産、子供の巣立ちなど、女性特有のライフイベントにともなうアイデンティティの発達は、成人女性のアイデンティティ研究にとって重要な問題である。それらの研究は、①妊娠・出産期という母親としてのアイデンティティの形成期を対象にした研究と、②空の巣期という母親役割の終結期を対象にした研究に大別できる。いずれの時期も母親としてのアイデンティティにとって大きな転換期として重要である。

(1)妊娠・出産期の母親アイデンティティに関する研究

Gottesman(1988)は、20～37歳の妊婦41名を対象に、自我の発達レベルと母親アイデンティティの形成の関連性について検討した結果、次のような興味深い結果を得ている。つまり、妊娠した年齢と、親になることへの動機づけ、胎児への愛着、母親役割への同一化の進展との間には有意な関連性が見られた。また、自我の発達レベルは、母親への準備、胎児への愛着、母親役割への同一化の進展と有意な関連性があった。この研究の中で変数として用いられた親になることへの動機づけ、胎児への愛着、母親役割への同一化はいずれも、母親アイデンティティを構成する重要な要素であり、これらと自我の発達レベルとの関連性が見られたことは妥当な結果であろう。

また、出産後の母親を対象にした研究としては、Pridham, Lytton, Chang &

Rutledge(1991)の研究が見られる。彼らは、産後の母親140名を対象に、母親としての態度、哺乳計画、出産条件、養育・世話の能力の関連性について検討している。その結果、出産時によりサポートを受けた母親は母乳育児を予定し、出産時にストレスを受けた母親は母乳育児を計画しなかった。また、親になることへの評価は、出産時のサポートとストレス、出産後の学習資源の有用性などの要因が関連していることが示唆された。この研究は、母親役割への積極的関与や母親アイデンティティの形成にとって、出産時の援助や心理・社会的環境など、出産体験が大きな意味をもつことを示唆した点で重要であろう。

(2)仕事をもつ女性の出産によるアイデンティティの再体制化

Pickens(1982)とComart(1984)は、いずれも出産後の女性に対して面接を行い、母親になるという体験後、女性がアイデンティティを再体制化していくプロセスを、いくつかの段階に分けて記述している。まず、Pickens(1982)は、30歳またはそれ以上で、7年以上の仕事歴のある初産婦5名(うち一人は未婚であったが出産を望んでいた)に対して出産後2-3週間後と約4カ月後に面接を行い、アイデンティティの再体制化について次のような6つの認知プロセスを見出している。

①「振り返る」Reviewing: 仕事や妊娠前の自分への愛着について想起すること。以前の自分について、仕事と結びついた出来事や自分であると感じていた個人的な性質と関係づけて語ること。

②「展望する」Projecting: 未来の自己の理想としての概念やモデルについて思い浮かべ、表現すること。母親という役割のなかで自分がどのようになっていくか、またそれが母親役割と仕事での役割をいかに結びつけていくかについて語ること。

③「計画する」Planning: 予期される出来事に対する準備としての計画を考え、つくりあげること。現在と未来を統合しようと試み、より実現可能な状況をつくっていくこと。

④「代償を計算する」Cost Accounting: 母親になることでの代償と報酬を決定していくこと。

⑤「天秤にかける」Weighing: 母親役割と仕事役割における選択あるいは優先順位についてよく考え、比較をすること。自分にとってどちらも重要で、しかも同時に存在する2つのことについての要求を考えること。

⑥「測定する」Assessing: 母親としての役割における知識と能力を見積もり、評価すること。

Pickensによると、出産後2-3週間では「振り返る」行動が多かったのに対し、約4カ月後では「代償を計算する」や「測定する」にあたる行動が増えていた。また、

面接した5名は4カ月後までにはすべてが仕事を続けることを決めており、3名はすでに仕事を再開していた。

一方、Comart(1984)は、結婚して専門職についており、3～9カ月前に第1子を出産した7名の女性に対して、半構造化面接を行い、母親アイデンティティと専門家アイデンティティの統合は、次の4つの段階を経て達成されることを見出している。

第1段階： 出産直後の時期で、女性は母親であることに没頭し、子どもに対する消耗、無力感、そしてかわいらしさに圧倒されている。

第2段階： 外界にも目を向け始め、よい母親であるという社会的規範や他の若い母親たちや自分自身の母親と自分を比べる。

第3段階： 仕事への復帰と子供の保育について考え、内的な葛藤を体験する。

第4段階： 仕事へ復帰する(出産後2～6カ月後)。

これらの2つの研究から見出されたプロセスは、重なるところもあれば、そうでないところもある。これらの研究の結果は互いに補完し合う関係にあるとみることができ、出産が仕事をもつ女性のアイデンティティに与える影響を明らかにしたという点で興味深いものである。

また、女性の臨床心理士を対象にしたLev-El(1983)の研究は、それらの女性が、強い専門家アイデンティティをもち、自己の能力を信頼していて、自分で生活になっているという感覚をもっており、しかも結婚生活での役割や母親としての役割をアイデンティティの重要な側面と考えていることを明らかにしている。また、Gaddyら(1983)は、性アイデンティティや結婚における平等主義的な考え方が出産後の仕事の継続に関係があることを示している。

仕事をもつ女性にとって、出産し、職業アイデンティティと母親アイデンティティを統合していくという課題は重要である。その関係についてさらに明らかにしていくと同時に、統合の促進や妨害の条件について、今後さらに検討して行くことが必要であろう。

(3)空の巣期の母親アイデンティティに関する研究

空の巣期の母親のアイデンティティについて考察した研究は、Gonzalez(1990)と、Cooper(1987)、Ellett(1982)などが見られるが、いずれも興味深いものである。

Gonzalez(1990)は、71名の母親を対象にアイデンティティ・ステータス、自我の発達と「空の巣」状態に対する態度の関連性を検討している。その結果、自我発達レベルとアイデンティティ・ステータスは「空の巣」への態度との関連性が見られた。すなわち、①自我発達レベルの中程度の者は、空の巣状態への満足度が

最も高く、高および低レベルの者は、満足度が低かった。また、②アイデンティティ・ステイタスと生活の変化や満足感にも関連性が見られた。つまり、達成型とモラトリアム型は最も大きな生活の変化を報告しており、達成型と予定アイデンティティ型は最も満足感が高かった。また予定アイデンティティ型と拡散型は生活の変化が少なく、モラトリアム型と拡散型は満足感が低かった。この結果は、空の巣期に母親が体験するアイデンティティ変容のあり方と満足感を非常によく説明している。達成型は、大きな生活の変化を体験し、しかもその満足感が高いことは、空の巣状態になるという転換期にうまく対処し、アイデンティティを再達成する力、つまりアイデンティティの成熟性を示すものであろう。また予定アイデンティティ型は、生活の変化が少ないにもかかわらず満足感が高いことは、他の選択肢を考慮する余地の乏しさや固定的な思考というこのタイプの特徴をよく反映していると思われる。

また、2. で紹介したように、空の巣期の前後での自我統制様式の変化を検討した Cooper(1987)の研究も興味深いものである。

さらに、Ellett(1982)は、ポスト子育て期の空の巣段階にある中年期の専業主婦のアイデンティティについて検討している。その結果、この研究の対象者はすべて、アイデンティティの危機を体験しており、そのほとんどは、母親役割の喪失の結果、引き起こされたものであった。Ellettは、中年女性のアイデンティティを再定義し、将来の新しい方向づけを援助するための生活設計セミナーの効用を説いている。この結果は、特に目新しい知見ではないが、多くの成人発達研究の中で指摘されている、中年期がアイデンティティの危機期であることを実証的に示した点は評価されるべきであろう。

5. 職業と家庭役割のアイデンティティ葛藤に関する研究

3. および4. において概観した研究にも数多く見られたように、成人女性のアイデンティティには、職業と家庭役割が互いに深く関連しあい、ともすれば両者が葛藤を引き起こすことも少なくない。成人女性のアイデンティティ発達を論じる時、この複数のアイデンティティの葛藤と統合は、重要な課題である。

Hornstein(1986)は、中年女性を対象に、仕事への関与のし方と成人女性が生活の中でもつ他のさまざまな役割への自己関与とし方を検討している。その結果、20代から40代初期まで、一貫して仕事への自己関与のレベルの低い女性(第1群)は、伝統的な母、妻、ボランティアとしての役割の肯定的で、自信をもった見方をしていた。仕事への関与が低いレベルから高いレベルへ変化した女性(第2群)は、基本的には第1群と同じであるが、伝統的な役割遂行に代わるものとして

職業へ関与することで、役割関与のし方を再構築していた。青年期から一貫して仕事への自己関与が高い女性(第3群)は、職業人、母親、妻、ボランティアとしての複数の役割への関与をうまく統合していた。

この他にも、大学へ在籍している母親と一般の母親のアイデンティティと自己評価、育児への態度などの相違を検討したWatkins(1983)の研究、母親アイデンティティと専門家アイデンティティの葛藤と統合について考察したComart(1984)の研究、博士の学位取得候補者を対象に、女性の性アイデンティティや社会的役割達成について検討したDonnelly(1986)の研究など、成人女性が、これまでの伝統的役割や価値志向から脱却し、新しい個としてのアイデンティティを獲得しようとする際に生じる問題点を、さまざまな側面から検討した研究は、少なからず見られる。

また、成人女性のアイデンティティ発達の基盤として、性アイデンティティの問題がある。この領域については、1960年代後半以降、米国を中心に膨大な研究が行われている。この領域の研究の動向と展望については、『アイデンティティ研究の展望Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』を参照していただきたい。

6. 歴史・時代と女性のアイデンティティ

また、これまで諸外国の研究においては、散見するにすぎないが、歴史的な展望のもとで女性の生涯発達を分析したものに、西平(1996)の研究がある。西平は、高群逸枝、平塚らいてう、岡本かの子、神谷美恵子、ルース・ベネディクト、エレノワ・ルーズベルト、シモーヌ・ボヴォワール、レイチェル・カーソンなどの女性の綿密な伝記分析を行い、その生涯発達プロセスをまとめている。この研究は、その女性の生きた歴史、文化、社会をも視野に入れて、生涯発達の視点から女性のアイデンティティの発達を考察していく上で、貴重な示唆に富んだものである。

7. 全体のまとめと今後の研究課題

以上、これまで発表されてきた成人女性のアイデンティティ発達に関する研究を総覧すると、女性のアイデンティティ発達をとらえる次元と問題領域は、表1.のようにまとめることができるであろう。その中でも、現在までの研究の多くは、②社会文化的次元、③心理社会的次元に集中している。

現代の成人女性のアイデンティティ発達を考察する上での重要な鍵概念として、「ライフスタイル」「関係性」「ケア役割」を指摘することができるであろう。

表1. 女性のアイデンティティ発達をとらえる次元と問題領域

① 歴史的次元
・異なる時代や世代間に見られるアイデンティティ発達の相違
② 社会文化的次元
・ライフスタイルの多様性とアイデンティティ確立の困難さ・アイデンティティ葛藤
・ジェンダー・ロール
・異文化間に見られるアイデンティティ発達の相違
③ 心理・社会的次元
・「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」の葛藤と統合
・「世代性」をめぐる問題: 特に「世話役割」を担うことによるアイデンティティ葛藤と統合
・「関係性」への敏感さ
④ 個体発達の次元
・自我発達の特質(乳幼児期の母親との同一化・母親からの分離の不明確さ)

つまり、

1. ライフスタイルの相違は、女性のアイデンティティ発達にどのように影響するのか。
2. 「関係性」は、女性のアイデンティティ発達にどのように作用するのか。
3. ケアすることは、アイデンティティを発達させるのか。

という問題は、重要な研究課題であろう。

これまで概観してきたように、女性のアイデンティティの発達には、さまざまな要因が複雑に関連しあっている。特に、職業をはじめとする「個としてのアイデンティティ」の発達と、親であることや家庭役割を中心とする「関係性にもとづいたアイデンティティ」の発達は、女性の発達にとって等しい重みをもっているように思われる。Franz & White(1985)の「Erikson理論を応用した生涯発達に関する複線(two paths)モデル」は、その点に言及し、明確に理論化した研究として重要であろう。

成人女性のアイデンティティの発達について考察していくには、個の発達と関係性の発達、および相互のかかわりあいにも注目していくことが重要であろうと思われる。筆者は、成人女性のアイデンティティ発達に関して、表2. のような概念的枠組みを提出したい。

成人期のアイデンティティの発達と成熟性は、表2. に示したように2つの軸でとらえられるのではないであろうか。第1の軸は、個としてのアイデンティ

ティの発達である。これは改めて述べるまでもなく、「自分とは何者であるか」「自分は何になっていくのか」という個の自立・確立が中心的テーマである。個としてのアイデンティティの発達は、積極的な自己実現の達成へ向けて方向づけられる。もうひとつの軸は、これまでのアイデンティティ研究において重視されることが少なかった関係性にもとづくアイデンティティの発達である。この中心的テーマは、「自分は誰のために存在するのか」「自分は誰の役に立つのか」という問題である。関係性にもとづくアイデンティティは、他者の成長や自己実現への援助へ向けて方向づけられる。両者の特質としては、山本(1989)が指摘した「分離した自己」と「関係的自己」の特質が適用できるであろう。大人のアイデンティティの発達には、この両者が等しく重みをもち、両者が統合された状態が本当に成熟した大人のアイデンティティといえるのではないであろうか。

個としてのアイデンティティと関係性にもとづくアイデンティティは、相互に影響を及ぼし合い、深い関連性をもっている。たとえば、他者の成長や自己実現への援助ができるためには、個としてのアイデンティティが達成されていることが前提である。これは、親が子供を育てること、教師が生徒を教育すること、専門家として後進を育てることなど、さまざまな領域においていえることであろう。また、本当に他者に対してよい成長への援助ができるためには、常に個としても成長・発達をしつづけていることが重要であろう。

それに対して、関係性にもとづくアイデンティティが、個としてのアイデンティティの発達にどのように貢献するかという問題は、これまであまり注目されることが少なかったと思われる。それは、アイデンティティの発達にとって関係性にもとづくアイデンティティのもつ意味そのものが重視されてこなかったためであろう。しかしながら、他者に役に立っているということによる自信や自己確信ばかりでなく、他者を世話する営みを通して養われる生活や人生のさまざまな局面に対応できる力、---これは危機対応力と呼ぶことができるであろう---、自我の柔軟性やしなやかさの獲得などは、他者への深い関心や関与を通じて得られた、個としてのアイデンティティの成熟性といえるのではないであろうか。

本研究では、この概念的枠組みにもとづいて、特に成人女性がケア役割を担うことから体験するアイデンティティの危機と発達について検討した。

表2. 成人期のアイデンティティをとらえる2つの軸

	個としてのアイデンティティ	関係性にもとづくアイデンティティ
中心的テーマ	自分は何者であるか 自分は何になるのか	自分はだれのために存在するのか 自分は他者の役に立つのか
発達の方向性	積極的な自己実現の達成	他者の成長・自己実現への援助
特徴 (山本, 1989 による)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 分離-個体化の発達 2. 他者の反応や外的統制によらない自律的行動(力の発揮) 3. 他者は自己と同等の不可侵の権利をもった存在 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 愛着と共感の発達 2. 他者の欲求・願望を感じとり、その満足をめざす反応的行動(世話・思いやり) 3. 自己と他者は互いの具体的な関係の中に埋没し、拘束され、責任を負う
相互の関連性・影響	<p>①個としてのアイデンティティ⇔関係性にもとづくアイデンティティ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者の成長や自己実現への援助ができるためには、個としてのアイデンティティが達成されていることが前提となる。 ・他者の成長や自己実現への援助ができるためには、常に個としてのアイデンティティも成長・発達しつづけていることが重要である。 <p>②関係性にもとづくアイデンティティ⇔個としてのアイデンティティ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者の役に立つことにもとづく自己確信と自信。 ・関係性にもとづくアイデンティティの達成により、生活や人生のさまざまな局面に対応できる力、危機対応力、自我の柔軟性・しなやかさが獲得される。 	

引用文献

- Allder, A. P. 1991 Identity, intimacy, and marital satisfaction in midlife marriages. *Dissertation Abstracts International*, 52(4-A), 1533.
- Baker, D. R. 1987 The influence of role-specific self-concept and sex-role identity on career choices in science. *Journal of Research in Science Teaching*, 24, 739-756.
- Caracelli, V. J. 1989 Adult women in college: Stability and change in identity and personality. *Dissertation Abstracts International*, 50(3-B), 1131.
- Comart, J. L. 1984 Integrating maternal and professional identities: A paradox for new mother. *Dissertation Abstracts International*, 44(7-B), 2238.
- Cooper, K. L. 1987 Gender identity and ego mastery style in 43-to-51 year old, pre- and post-empty nest women. *Dissertation Abstracts International*, 47(8-B), 3514.
- Donnelly, S. C. 1986 An analysis of themes related to gender identity, social role, and achievement for women writing a doctoral dissertation. *Dissertation Abstracts International*, 46(12-A, Pt. 1), 3601.
- Ellett, S. E. 1982 An investigation of identity and self-esteem in traditional married women during their middle years, and the impact of the Life Planning Seminar. *Dissertation Abstracts International*, 42(7-B), 2969-2970.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: Norton.
- Erikson, E. H. 1964 The inner and the outer space: Reflections on womanhood. *Daedalus*, 93, 582-606.
- Forrest, L. & Mikolaitis, N. 1986 The relational component of identity: An expression of career development theory. *Career Development Quarterly*, 35(2), 76-88.
- Franklin, A. L. 1987 Body image and identity in women: An exploratory study. *Dissertation Abstracts International*, 48(6-B), 1808.
- Franz, C. E. & White, K. M. 1985 Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224-256.
- Franz, C. E. 1988 A case study of adult psychological development: Identity, intimacy, and generativity in personal documents. *Dissertation Abstracts International*, 48(6-B), 3443.
- Freedman, B. A. 1987 Ego identity status and the family and career priorities of college women. *Dissertation Abstracts International*, 48(5-B), 1528.
- Gaddy, C. D., Glass, C. R. & Arnkoff, D. B. 1983 Career involvement of women in dual-career families: The influence of sex role identity. *Journal of Counseling Psychology*, 30(3), 388-394.
- Garfunkel, G. 1985 The improvised self: Sex differences in artistic identity. *Dissertation Abstracts International*, 45(7-B), 2295.
- Gilligan, C. 1982 *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*. Harvard University Press. (岩男寿美子 監訳 1986 もうひとつの声 川島

- 書店.)
- Gonzalez, P. C. 1990 Ego development and ego identity in mothers at mid-life. *Dissertation Abstracts International*, 51(5-B), 2643.
- Gottesman, M. M. 1988 The relationship between maternal age, level of ego development, and progress in maternal identity formation. *Dissertation Abstracts International*, 48(9-B), 2604.
- Gould, R. L. 1978 *Transformations: Growth and Change in Adult Life*. New York: Simon & Schuster.
- Hart, B. L. 1990 Longitudinal study of women's identity status. *Dissertation Abstracts International*, 50(10-B), 4807.
- Hodgson, J. W., & Fisher, J. L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.
- Hopkins, L. B. 1980 Inner space and outer space identity in contemporary females. *Psychiatry*, 43, 1-12.
- Hornstein, G. A. 1986 The structuring of identity among midlife women as a function of their degree of involvement in employment. *Journal of Personality*, 54(3), 551-575.
- 堀内和美 1990 中年期女性の自我同一性に関する研究---同一性変化の特徴を中心に--- 日本教育心理学会第32回総会発表論文集, 119.
- Josselson, R. L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- Josselson, R. L. 1987 *Finding herself: Path to identity development in women*. Jossey-Bass Publishers, San Francisco.
- Jung, C. G. 1951 *Aion: Untersuchungen zur Symbolgeschichte*. (English translation, In J. Campbell(Ed.) *The portable Jung*. New York: Penguin Books, Pp. 139-162.)
- Kroger, J. 1990 Ego structuralization in late adolescence as seen through early memories and ego identity status. *Journal of Adolescence*, 13(1), 65-77.
- Kroger, J. & Haslett, S. J. 1991 A comparison of ego identity status transition pathways and change rates across five identity domains. *International Journal of Aging and Human Development*, 32(4), 303-330.
- Lev-El, I. 1983 The establishment of professional identity in women clinical psychologists as an adult development phase. *Dissertation Abstracts International*, 44(6-B), 1967.
- Levinson, D. J. 1978 *The Seasons of a Man's Life*. New York: Alfred A. Knopf.
- Low, J. M. & Bailey, K. A. 1990 A comparison of vocational identity formation in older and younger women undergraduates. *College Student Journal*, 24(2), 189-195.
- Marcia, J. E. 1964 *Dertermination and construct validity of ego identity status*. Unpublished doctoral dissertation, The Ohio University.
- 南博文 1995 人生移行のモデル---人間発達ドラマをどう見るか。南博文・やまだようこ(編) 講座生涯発達心理学 第5巻 老いることの意味 --- 中年期・老年期。金子

書房.

- Morgan, M. I. 1987 Women returning to community college: A response to life change and a desire for a revised identity (a case study of Paul D. Camp Community College). *Dissertation Abstracts International*, 48(4-A), 815.
- 中釜洋子・園田雅代 1989a 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究Ⅱ：発達経路の検討. 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 223.
- 中釜洋子・園田雅代 1989b 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究Ⅳ：青年期F群のその後の同一性変化の再検討. 日本心理学会第53回大会発表論文集, 170.
- 中釜洋子・園田雅代 1990 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究Ⅴ：転機・クライシスを中心とした内容分析. 日本心理学会第54回大会発表論文集, 153.
- Neugarten, B. L. 1964 *Personality in middle and later life*. New York: Atherton Press.
- 西平直喜 1996 生育史心理学序説 金子書房.
- 岡本祐子 1986 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析. *教育心理学研究*, 34, 352-358.
- 岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 風間書房.
- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版.
- O'Connell, A. N. 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *Journal of Personality*, 44, 675-688.
- Phelps, C. E. 1991 Identity formation in career development for gifted women. *Roeper Review*, 13(3), 140-141.
- Pickens, D. S. 1982 The cognitive processes of career-oriented primiparas in identity reformation. *Maternal-Child Nursing Journal*, 11(3), 135-164.
- Pridham, K. F., Lytton, D., Chang, A. S. & Rutledge, D. 1991 Early postpartum transition: Progress in maternal identity and role attainment. *Research in Nursing and Health*, 14(1)21-31.
- 園田雅代・中釜洋子 1989a 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究Ⅰ：9年間の自我同一性地位の変化について. 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 222.
- 園田雅代・中釜洋子 1989b 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究Ⅲ：自我同一性地位変化ならびに親密性地位との関連 日本心理学会第53回大会発表論文集, 169.
- Spain, A. & Bédard, L. 1991 *Maternite et carrière: identité et gestion des sphères d'activités (Motherhood and career: Identity and management of activity spheres)*. *Canadian Journal of Counseling*, 25(2), 273-293.
- Spenner, K. I. & Rosenfeld, R. A. 1990 Women, work, and identities. *Social Science Research*, 19(3), 266-299.
- 杉村和美 1993 現代女性の中年期: アイデンティティの視点から. *発達*, 54, 37-44, ミネル

ヴァ書房.

- 鎌幹八郎・山本力・宮下一博 1984 アイデンティティ研究の展望Ⅰ ナカニシヤ出版.
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1995a アイデンティティ研究の展望Ⅱ ナカニシヤ出版.
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1995b アイデンティティ研究の展望Ⅲ ナカニシヤ出版.
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1997 アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版.
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1998a アイデンティティ研究の展望Ⅴ-1 ナカニシヤ出版.
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1998b アイデンティティ研究の展望Ⅴ-2 ナカニシヤ出版.
- Vaillant, G. E. 1977 *Adaptation to Life*. Boston: Little, Brown.
- Waterman, A. S. 1982 Identity development from adolescence to adulthood: An extension of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, 18, 341-358.
- Watkins, D. M. 1983 A comparison of student housewife/mothers with non-student housewife/mothers on the characteristics of self-perceived identity, self-esteem, marital adjustment and attitudes toward child-rearing. *Dissertation Abstracts International*, 43(11-A), 3551-3552.

第 2 章

成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について

---理論的展望と生活レベルに見られる 2, 3 の問題---

1. 問題および目的

1990年代は「共生の時代」といわれるように、今日では「個の確立」と「個人の自由」を越えて、「共生」の思想が現代の時代精神を代表するものになりつつある。そこには、人的、物的両面の資源の有限性が見えてきた現代社会にあって、もはや個人の福利だけを追及していたのでは、個人そのものも社会も維持できなくなってきたという認識がある。具体的には、地球資源の有限性、水やエネルギー問題、環境破壊等のいわゆる環境問題や、少子化、高齢化社会の到来にともない、子供を産み育て、高齢者を看取るという課題は女性や専業主婦だけの問題ではなく、社会全体の必務であるという問題意識などである。

特に後者の問題、つまりライフサイクルを通して、家族をはじめとする他者の発達をいかに援助しつつ、自分自身も自己実現を達成していくかという問題は、心理学や家政学の領域においてもきわめて重要な現実的課題である。家族にあっては個人を犠牲にする「和」やもたれ合いではなく、可能な限り自立した者同士の共生関係を構築していく必要がある。しかしながら、成人期の発達に関する研究においては、これまでこの関係性の発達と実践の側面はあまり重視されてこなかったように思われる。ライフサイクルにおける関係性の発達と実践に関する問題は、多様な領域と次元にわたる複雑な課題を内包しているため、少なくとも、研究から得られた知見にもとづいた理論的展望と、現実の生活場面で見られる諸問題の分析を通して考えられる実際的問題の 2 つの次元で考察することが必要であろう。

本研究は、個の達成とともに成熟した共生関係を構築していくための基礎研究として、①心理学研究から得られた関係性の発達に関する知見を展望し、アイデンティティ発達における関係性の意味について考察するとともに、②生活レベルにおいて関係性の達成が阻害される今日的状況について検討した。さらに、③関係性の発達にとって重要な鍵概念の一つであると思われる「世話」のもつ意義について考察し、成熟した共生関係の構築のために重要であると考えられる、個の確立と関係性の達成の両者を統合するヴィジョンについて論じた。

(注) 本論文は、広島大学教育学部紀要 第 II 部, Vol. 44, Pp. 145-154, 1995 に発表した。

2. 心理学における「関係性」発達の研究

人間は、それぞれ固有の世界をもつ個的存在でありながら、同時に他者との関わりなしには生きていくことのできない関係的存在であることは、改めて述べるまでもなく人間の本質である。しかし、はじめに述べたように、個人の発達にとって関係的存在の側面のもつ意義は、これまで心理学研究においてはあまり重要視されてこなかったように思われる。

その背景のひとつには、今世紀後半の心理学の主要な関心と中心的研究課題が、個の達成、しかも西洋的、男性的な枠組みにおける自我の発達であったことがあげられる。個の確立と個人の自由は、今世紀後半の時代精神の主軸を担ってきたと思われるが、心理学の世界においても、分離-個体化を軸にした西洋的、男性的な自我の研究が重視され、それが我が国にもそのまま移入される傾向にあった。また、西欧においてもそうであったように、男性の研究者による男性をモデルにした発達研究が中心であったこともその一因であろう。そういう潮流の中で、「他者との関係性」の問題はともすれば、自我の発達の単なる一部分、あるいは背景的要因としてとらえられる傾向があった。もしくは後述するように、関係性の概念は「女性性」、「女性的要因」に類似した特質をもっているために、重視されることが少なかったとも考えられる。

(1)「関係性」の概念

人間は個的存在であるとともに、関係的存在でもあるという基本的2面性については、古くはJung(1951), Parsons(1955), Bakan(1966)などによって論じられている。Jungは、自己の基本的2面性の象徴を男性性、女性性の中に見出し、1人の人間の中での両面の統合の可能性と必要性について述べている。また、人間の基本的様態に対してParsons(1955)は、「道具性(instrumentality)」と「表出性(expressiveness)」、Bakan(1966)は、「個体維持機能(agency)」と「(親交)関係維持機能(communion)」という概念を用いて説明している。「道具性」は、家族システムの要求と家族外の世界とを調整する働きで、目標指向性が優先して人の反応にはあまりかかわり合わないのを特徴とするのに対して、「表出性」は家族内の相互関係や情緒的要求を調整・維持していく働きを示し、人の反応への敏感さと人間関係への関心を特徴とする。また、「個体維持機能」は、自己保護や自己拡張、自己主張の諸活動、支配、そして分化や他者からの分離といった機能様式を示す。そして「関係維持機能」は、無私、人間関係、人との融和や触れ合い、協同、開放性といったものにかかわる機能様式を示している(斎藤, 1990)。これらの概念は、しばしば男性性、女性性の概念として分類されることが多く、男性性は「道具性」と「個体維持機能」、女性性は「表出性」と「関係維持機能」が合わさったものと

して理解されてきた。

また最近の性役割に関する研究では、Bem(1974)をはじめとして、男性性と女性性を相入れない2極対立的な枠組ではなく、1人の人間の中に両者とも存在するという両性具有性の概念が提唱されている。さらに、Gilligan(1979)は、このような人間の存在様式の2面性を「幼少時のみならず人間の一生を通じ繰り返し、対位的に現れる『愛着と分離』』としてとらえ、アイデンティティの定義にも、各々に対応する2つのモード、すなわち人間関係の中で関わりそのものとして定義される「関係的自己」(Connected-Self)のモードと、関係から分離し他者とは隔たったものとして定義される「分離した自己」(Separated-Self)のモードがあるとした。彼女によれば、両面は共に人間の本質であり、同等の価値をもつもの、究極的には統合に向かうものであり、男女の違いはその発達の様相の違いとしてとらえられている。

(2)ライフサイクルにおける「他者との関係性」の発達

ライフサイクルを通して見た時、他者との関係性はどのように発達していくのであろうか。また関係性の発達は、個人の成長・発達にどのような意味をもつと考えられてきたのであろうか。

1)乳幼児期・児童期

乳児期・幼児期など発達早期については、男児、女児とも他者(特に母親をはじめとする養育者、家族)とのよい関係性を体験することは、人格発達の基盤ととらえられてきた。Erikson(1950)は、精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Schemeにおいて、その第I段階 乳児期の心理・社会的課題は「基本的信頼感の獲得」であるとし、これは世話してくれる母親(と母親を通じての世界)に対する信頼感と、自己の存在そのものに対する信頼感を意味すると述べている。

またMahler(1975)は、出生から生後6カ月頃までを「正常な共生期」(Normal Symbiotic Period)とし、発達のごく早期のこの時期に母子一体感、つまり安定した母子の共生関係を体験することが、次につづく「分離-個体化」の達成の基盤となるとしている。さらにBowlby(1969)による一連の愛着理論も、後の研究者によっていくつかの批判や修正が行われているとはいえ、乳幼児の母親との愛着関係が、後の発達に決定的な意味をもつことを実証したものである。

また、社会心理学の領域における愛他行動の研究も、関係性発達の視点から見ると示唆的である。生後1～2歳頃からすでに、子供には愛他行動らしきものが見られはじめ、思春期頃までに愛他行動の行動・認知・情緒の各側面は、いくつかの特徴的な段階を経て発達する。しかし、愛他行動は、質的にも年齢とともに発達するとは限らず、愛他動機が活性化されているかどうかにかかっているとい

われている(松井, 1992)。

このように乳幼児期の関係性研究は、母子関係に焦点化したものが圧倒的に多いが、そのいずれも関係性を後の人格発達、自我の発達の基盤としてとらえていることは共通している。

2) 青年期・成人初期

さて、関係性の発達と個としての発達が分岐し、その関連性や性差が俄かに重要視されてくるのが青年期である。この問題の多くは、アイデンティティ形成との関連で論じられることが多い。

Erikson(1950)の提唱したアイデンティティ理論によれば、青年は、それまでの成長過程の中で出会った重要な他者との同一化を主体的に見直し、さまざまな自己探求や模索を経て、独自の自己のあり方、生き方を主体的に選択する。青年期のアイデンティティ確立には、この主体的に選択した自己のあり方が、他者や社会から受け入れられること、つまり社会の中に自己の位置が与えられることはもちろん重要であるが、それは独自の主体的自己が確立されていることが前提である。Blos(1967)は、青年期を第2の分離-個体化期と呼び、青年が親からの心理的自立をとげ、成人に達するこのプロセスの中に、乳幼児期の分離-個体化プロセス(Mahler, 1975)と類似した特質を見出している。

また、成人初期における重要な関係性の概念に、「親密性(intimacy)」(Erikson, 1950)がある。親密性とは、特定の異性と深く長い親密な関係を維持する力を意味し、これは分化した強固な自己感覚を基盤に達成される他者との再融合関係を示している。周知のように Eriksonは、親密性は青年期のアイデンティティ確立の後に到来する成人初期の心理・社会的課題であるとしている。

それに対して、このような他者から分離した個としての自己確立を強調した青年期のアイデンティティ理論の多くは、男性をモデルにしたものであり、女性には必ずしもあてはまらないことが指摘されている。Chodorow(1978)は、女性は自分自身を人とつながっているものとして定義し経験するところ、つまり世界と結びあっているという基本的な自己感覚をもつ点において、男性の分離した自己感覚とは異なる特徴をもつと述べている。Miller(1976)もまた、女性の自己感覚が「親しむこと(affiliations)」や「関係性(relatedness)」の世界を作り出し、維持できることを通して固められていくということから、「関係自己(relational self)」が女性の人格発達の中心をなしていくと述べている(斎藤, 1990)。この男女の相違は、乳幼児の世話が普遍的に女性の手によって行われていることに由来し、根本的に、母親と娘との結びつき、相互愛着関係や原初の相互同一化関係という基盤がもたらすものと理解されている。

さらに、女性のアイデンティティ形成は男性とは異なる特質やプロセスをも

つことが、Josselson(1973)、O'Connell(1976)、Hodgson & Fisher(1979)ら、女性のアイデンティティ研究者によって指摘されている。これらの実証的研究によって得られた主要な知見は、次のようなものである。

①男性の場合は、アイデンティティ確立の後に親密性のテーマが問題となるのに対して、女性の場合は両者が並行して進行する。つまり女性は、親密な関係をもつことでアイデンティティがより確かなものとなる(Josselson, 1973)。

②女性の場合は、職業やイデオロギーの領域での自己探求や主体的選択という男性型経路によるアイデンティティ形成のみでなく、性や結婚など関係性に直接かかわる領域での模索や決断という女性型経路、あるいは両方の領域を通じての両性型経路のいずれによっても、アイデンティティ形成が行われる(Hodgson & Fisher, 1979)。

③女性の場合は、伝統型(結婚、出産後は専業主婦になるタイプ)、新伝統型(結婚、出産後は専業主婦になるが、子育て後再び職業をもつタイプ)、非伝統型(結婚、出産にかかわらず職業をもちつづけるタイプ)というライフスタイルによって、ライフサイクルの各時期におけるアイデンティティの感覚が異なっている(O'Connell, 1976)。

これらの研究を総合すると、青年期以降のアイデンティティ発達にとって、他者との関係性は、個の確立と同様の重要な意味をもっている。特に女性においては、乳児期という発達早期にまで由来する根源的な意味を内包しているようである。しかしその一方で、すべての女性が関係性を中核においてアイデンティティ形成を行うわけではなく、ライフスタイルなど個人内外の要因によって、男性と同様のアイデンティティ形成プロセスをたどる女性もまた多い。この女性の発達プロセスの多様性に関する問題は、今後の重要な課題である。

またこれまで、Eriksonをはじめとするアイデンティティ理論にもとづいて個の確立を強調して理解されてきた男性のアイデンティティ発達は、はたして本当に成熟したアイデンティティ達成といえるのかという問題も改めて問い直す必要がある。最近まで、アイデンティティ形成と親密性の獲得の問題は、男性にとっては深刻な葛藤をひきおこす問題としてはとらえられていなかった。それは1つには、社会的に見て男性にとっては、アイデンティティの確立と男性役割の取得・男性アイデンティティの獲得は、矛盾なく進展するものであること、第2に、発達的に見て、青年期のアイデンティティ形成、成人初期の親密性の獲得、成人期の世代性の達成という心理・社会的課題の流れは、一般の健康な男性にとっては非常に明瞭なプロセスとしてとらえられてきたからである。

男性が成熟した親密性を獲得するためには、男性役割の確立と親からの自立が不可欠の要件である。しかし、今日の社会では、この2つの要件が必ずしもうま

く達成されていないことが指摘されている。我が国においては、現在、男性の平均初婚年齢は次第に上昇しつつあり、男性の未婚率もまた年々、増加しつつある。このことは、我が国の青年期・成人初期の男性にとって、職業への積極的関与は比較的早く達成されるのに対して、家庭生活における親密性の形成は遅延される傾向があることを示している。

また、既婚女性も職業を持つことが一般化している現代社会においては、男性もまた、家庭生活の維持に責任をもち、積極的に関与することが期待される時代になった。「職業と家庭の両立」は、男性にとっても重要なテーマになっているはずであるが、今日ではまだこの問題は、より若い世代を中心とした一部の男性を除いて、多くの男性にとっては、自己のアイデンティティにとって重要な問題として主体的に受けとめられていないのが実情ではなかろうか。

こうして社会的、職業的アイデンティティの達成のみで、家族をはじめとする重要な他者との関係性を棚上げにして長い生涯を、少なくとも現役引退期までを過ごしてしまう男性が多いことは事実であろう。会社人間と呼ばれる人々はその典型的な例であろう。このような成人のアイデンティティのあり方は、成熟したアイデンティティとは考えにくく、3.において考察するように、生活レベルにおいてはさまざまな弊害や問題の背景となっている。今日、パートナーとの関係性を深めること、親になること、子供を世話し育てること、家庭を維持することの重みと、それが自己の成熟にとって重要な意味をもつことの自覚が、男性の側にも一層、求められていると思われる。

3) 中年期・高齢期

成人中期における関係性に関する重要な視点は、Eriksonの個体発達分化の図式の中に示された相互性(Mutuality)の概念によみとることができる。Eriksonは、「与えると同時に得る」という相互作用を精神発達の中にとらえようとした。幼児と母親は「育てられる者」と「育てる者」という一方向的な関係ではなく、「育てられると同時に育てる」存在として、発達の観点から人間関係をとらえようとしたのである。つまり、母親が幼児期の心理・社会的課題の達成を援助することが、とりもなおさず自分自身の課題である世代性を達成することになるのである。

この段階に至って我々のライフサイクルは、次の世代と交差することになる。次世代への深い関心なしに行われる生活や社会的行動は、単なる「自己陶醉」にすぎないとErikson(1950)は述べているように、アイデンティティの成熟は、他者への深い関心を通じて獲得されていくのではないであろうか。すなわち自己の獲得したアイデンティティでもって、他者を生かし育ててはじめて、成人としてアイデンティティを達成したといえる。ここに、アイデンティティは新たな広

がりと深まりを獲得する。

一方、Franz & White(1985)は、Eriksonの個体発達分化の図式について、次のような非常に意義深い提案をしている。彼女らは、成人期の心理・社会的課題である親密性や世代性の発達にとって本質的であると思われる愛着(attachment)の先駆的プロセスについて、これまでのアイデンティティ研究ではほとんど注目されていないことを指摘し、成人期のアイデンティティ発達にとって重要な側面である愛着についての精緻化が必要であると主張している。彼女らは、人間の生涯発達を個体化の発達と愛着の発達という2つの経路で理解しようと試み、表1のような「生涯発達に関する複線モデル」を提唱した。このモデルにおいては、Eriksonの図式の第Ⅵ段階「親密性 対 孤独」と第Ⅶ段階「世代性 対 自己陶醉」は、愛着の発達経路の方に組み入れられている。個の発達と関係性の発達を同等の価値をもつものにとらえ、両者が相互に影響を及ぼしつつ、アイデンティティが発達していくものにとらえた彼女らの試みは、きわめて示唆的なものである。

表1 Erikson理論を応用した生涯発達に関する複線(two-path)モデル

(Franz & White, 1985)

	乳児期	幼児前期	幼児後期	学童期	青年期	成人前期	成人期	老年期
個体化経路	信 頼 対 不 信	自律性 対 恥と疑惑	自発性 対 罪悪感	勤勉性 対 劣等感	アイデンティティ 対 アイデンティティ 拡散	職業及びライフ・スタイルの探索 対 漂流	ライフ・スタイルの確立 対 空虚	統合性 対 絶望
愛着経路	信 頼 対 不 信	対象及び自己の恒常性 対 孤独と無力感	遊戯性 対 受身性または攻撃性	共感と協力 対 過度の警戒または権力	相互性・相互依存 対 疎外	親密性 対 孤独	世代性 対 自己陶醉	統合性 対 絶望

また最近、個の確立と関係性の発達というこの2つの人格的特徴を生涯発達の視野のもとでとらえようとした実証的研究が行われるようになった。山本(1989)は、人格の2面性を表2に示したような「関係的自己」(Connected-Self)と「分離した自己」(Separated-Self)の2つの概念でとらえ、加齢とともに両者がともに発達していくことを明らかにしている。

また伊藤(1992)は、「個人志向性」「社会志向性」という概念を用いて、人格の2面性の発達の变化的変化を検討し、図1に示したように年齢とともに両者が上昇していくことを見出している。

これらの研究は、いずれも個の確立と関係性の達成は生涯を通じて進み、両者が共に達成された、つまり両者が統合された状態が成熟した人間の様態であるという認識のもとに、それを実証的に明らかにした点で共通している。これらの研究は、生涯発達における関係性の成熟の重要性を示唆した点で、評価することができると思われる。

表2 「関係的自己」と「分離した自己」の特質(山本, 1989)

<p>「関係的自己」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 愛着と共感性の発達に基礎づけられ、 2. 他者の欲求・願望を感じ、その満足を目指す反応的行動(思いやり, 世話)として現れ、 3. 自己と他者とは互いの具体的な関係の中に埋没し、拘束され、責任を負う存在として把握される。 <p>「分離した自己」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 分離-個体化の発達に基礎づけられ、 2. 他者の反応や外的統制によらない、自律的行動(積極的自己実現・力の発揮)として現れ、 3. 他者は自己と同等の互いの不可侵の権利をもった存在として、抽象的-一般的に把握される。
--

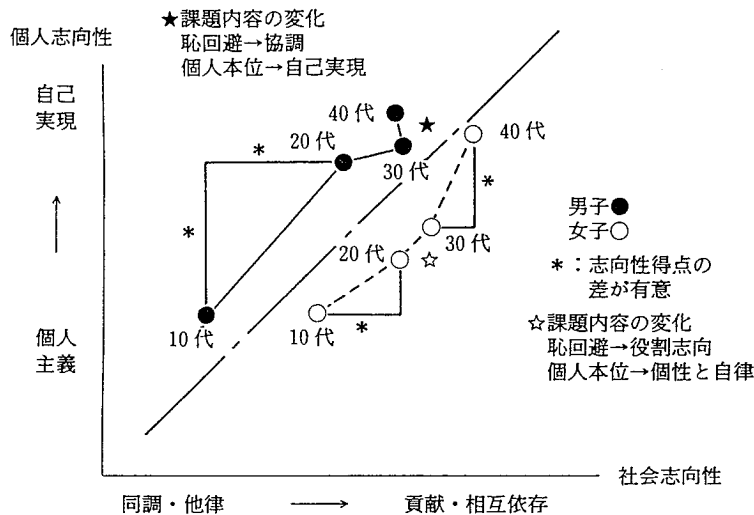


図1 2次元図式から見た志向性の変化過程(伊藤, 1992)

以上、概観したように、心理学における発達研究においては、関係性の発達・成熟は、人格発達において個の確立と同様、重要な意味をもち、個と関係性の両者が達成され、統合された状態が成熟した人格であると、理論的にはとらえられるようである。この理論的方向づけは、きわめて妥当なものであろう。しかしながら、青年期以降の長い人生の中で、この両者は必ずしも並行的に同等に発達していくものではない。ともすれば両者がはげしく葛藤する時期や状況も少なくない。あるいは多くの成人男性において見られるように、アイデンティティ形成がその一方を棚上げにして進行していく場合もある。個と関係性の両者を同等

の視座においたアイデンティティの生涯発達の研究の今後の方向性として、ライフサイクルの中で両者がどのように発達し、展開していくのか、そのライフサイクルの各時期で見られる両者の葛藤と統合のプロセスや、両者の発達を促進、あるいは阻害する要因や状況の考察が重要な課題として考えられる。

一方、現実の生活レベルでは、関係性がうまく達成されない状況は、今日、数多く見られる。ライフサイクルを通して他者の発達を援助しつつ、自分自身も自己実現を達成していくことは、成熟した人間のあり方を示していると思われるが、自己実現の達成と他者の自己実現への援助は、必ずしもいつも折り合うものではない。特に、今日、家族のまとまりの希薄化や家族の「個別化」によって、本来の家族機能が失われつつあるという指摘や、母親役割だけでは個としてのアイデンティティを支えきれないといった問題など、今日、この課題をめぐる葛藤はさまざまな領域で存在している。そこで次に、ライフサイクルの中で見られる個の確立と関係性の達成をめぐる葛藤と統合に関する実際的な問題について考察していきたい。

3. ライフサイクルにおける関係性の達成における実際的問題

ライフサイクルの中で見られる関係性、特に日常生活・家庭生活における関係性の最も一般的なものは、親子関係と夫婦関係であろう。中でも親子関係は、世代の異なる者同士の長期にわたる密接な関係である。特に親子関係が密接になるのは、子育て期と老親の介護期であり、これは「世話」を通しての関係性となる。この世話を通じた関係性は、Eriksonの相互性の概念によっても示唆されたように、世話される者ばかりでなく、世話する側にも発達・成熟をもたらすものと考えられる。

(1) 子供を育てることと親の側の発達と葛藤

親子関係の研究史はかなり古いが、柏木(1995)も指摘するように、これまでの親子関係の研究は、多くの場合、子供の発達に焦点化したものであり、子供の側から見た親子関係の研究であった。また、一般に「育児は育自」といわれるように、子育てによって親も成長するといわれていたが、親がどのように成長・変化するのかについては、かなりあいまいにとらえられてきた。この古くて新しい問題について柏木(1995)は、幼児をもつ親との面接および自由記述から具体化して作成した質問紙調査によって、表3のような親となることによる成長・発達に関する6因子を見出している。これらの中には、柔軟性、自己抑制と同時に、自己の明確さ、強さ、視野の広さなど、これまで人格の発達・成熟の概念でとらえられてきたものが含まれている。「また、日頃人々が『人間ができている』『練れた人』といっ

た言葉で、人格的に優れ、より高い水準にあると判断する時、暗黙の基準として
いるものが含まれており、『育自』とはこのような人格発達・成熟に至る営みであ
ることが確認された」(柏木, 1995)と考えられる。

しかしながら、今日、育児にかかわる女性が、必ずしもすべて安定したアイデ
ンティティを達成し、保持しているわけではないことも、また指摘されている。
例えば、育児ノイローゼや幼児虐待は、特殊な母親だけが体験するものではなく、
一般的な普通の母親も「子育ては つらい」「我が子がかわいく思えない」などの
気持ちをもつことが、日常茶飯にあることは広く知られるようになって来ている
(金沢, 1993)。

また、大日向(1988)は、昭和初期、昭和20~25年、昭和45年前後の3つの時期に
子育てをした女性の育児の意義や育児に対する意識に関する世代間比較を行い、
現代女性は、自己の生きがいは母親であることとは別のものと考える傾向にあ
ることを見出している。これは今日、空の巣期にある女性ばかりでなく、育児期
の女性においてさえ、母親役割だけでは自己のアイデンティティを支えきれな
いことを示唆するものであろう。このことは、関係性に根差した「母親アイデ
ンティティ」と個の確立にもとづいた「個としてのアイデンティティ」の相克・葛
藤を意味している。

表3 親となることによる成長・発達一次元得点平均 (柏木, 1995)

項目 (主なもの)	父	母	P
第I因子 「柔軟さ」	2.40 (0.74)	< 2.83 (0.61)	***
第II因子 「自己抑制」	2.57 (0.72)	< 2.99 (0.62)	***
第III因子 「視野の広がり」	2.21 (0.67)	< 2.60 (0.63)	***
第IV因子 「運命・信仰・伝 統の受容」	2.71 (0.73)	< 3.12 (0.54)	***
第V因子 「生き甲斐・存在 感」	2.82 (0.57)	< 2.95 (0.53)	**
第VI因子 「自己の強さ」	2.35 (0.69)	< 2.52 (0.58)	***

注) ** p<.01 *** p<.001

一方、母親の育児に対する不安や葛藤は、家族をはじめとして母親をとりまく心理・社会的環境によって大きな相違があることも、また事実である。例えば牧野(1987)は、育児期の女性を対象に、育児不安と社会的な人間関係や夫婦関係の関連性を分析し、育児不安の程度は母親の社会的関係の広さや夫との関係に規定されていることを見出している。

また岡本(1995b)は、育児期の女性のアイデンティティ様態を、個としてのアイデンティティ達成と母親意識の確立という2つの次元からとらえ、I 統合型、II 伝統的母親型、III 独立的母親型、IV 未熟型という4タイプを見出している。そして、両者が統合された最も成熟したタイプと考えられる統合型の女性は、自分の人生と育児が調和しており、育児によって自分自身が成長してきたことや生きがいになっていることが明確に意識されていた。また、家事、育児に対する夫の実際的な協力度では、I～IVタイプに有意差が見られなかったにもかかわらず、統合型の女性は他型に比べて、夫への信頼感が有意に高く、夫からの理解の程度を最も高く認知していた。このような研究は、女性のアイデンティティ統合や関係的アイデンティティの達成に家族をはじめとする他者のサポートが重要な意味をもつことを示唆するものであろう。

(2) 高齢者、特に老親の介護と介護する側の発達と葛藤

ライフサイクルの中で、もう一つの重要な世話を通しての関係性が、高齢者、特に老親の介護期において見られる。高齢者の介護も、子育てと同様、単に「介護する者」と「介護される者」という一方向的な関係ではなく、高齢者の世話を通じて介護する側も多くを学び、成長・発達する関係であるはずである。柏木(1995)が見出した親となることによる成長・発達に関する因子である「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命・信仰・伝統の受容」「生きがい・存在感」「自己の強さ」はいずれも、介護体験を通じても獲得される特質であるように思われる。また、ボランティアとして高齢者介護を行った青年の体験報告などからも、高齢者の世話を通じて、高齢者を共感的に理解することが、「受容し受容される」関係を形成し、青年に多くの活力を与えることが示唆されている(岡本、他, 1994)。これらの問題についての実証的研究が待たれるところである。

しかし現実的には、介護者の成長・発達というポジティブな側面よりも、介護ストレス等のネガティブな側面のみが注目され、強調されているように思われる。実際、介護者の担う心身の負担は、改めて記すまでもない。おそらく、子育て期以上に介護期は関係性の実践・達成が困難であり、個としての自己が圧倒されてしまうことが多いのが現状であろう。

Skaff & Pearlin(1992)は、介護とストレスの関係を調査し、介護において①

介護者の役割に「封じ込み閉止」(role engulfment)がおこること、②介護者が自己喪失の体験をすることについて言及している。介護者は介護すると同時に、社会人として社会生活を送っている。しかし徐々にその生活に制限が加えられ、社会的活動をはじめ、知人友人との接触も極度に減少し限定されていく。結局、「介護者であること」が介護活動のみに封じ込まれてしまう結果となり、他の役割を閉止せざるを得なくなる。自己の存在に対して外部からの認知や評価が得られなくなり、だんだん他者から孤立していく。その上、介護体験から受ける衝撃によってその孤立感を増幅されることになる。このような状態は、介護役割によって個としてのアイデンティティが喪失してしまうことを意味している。

(3)関係性の鍵概念としての「世話」(Care)

---世話役割はアイデンティティの支えにならないのか---

関係性の発達にとって「世話」は重要な媒体であり、実践的、理念的鍵概念であると考えられる。しかしながら、以上のような生活レベルに見られる諸状況を検討すると、世話役割はアイデンティティの支えになりにくいことが推察される。それどころか、上に述べたように世話役割の遂行によって、個としてのアイデンティティが喪失してしまう事態も少なくない。

子育てにせよ、高齢者介護にせよ、世話する仕事や役割が、なぜネガティブな側面が強調される困難な仕事であるかについては、いくつかの要因が考えられる。第1は、長時間労働による疲労、他の活動を制限されることによる欲求不満、生存に関与する緊張感など世話する仕事そのものの特性である。第2は、世話される側である子供や老親の要因として、体質や病気、扱いにくさなどへの心配や困難さが考えられる。第3は、世話する側の要因として、母親や介護者の健康状態、神経質や不安を感じやすいなどの性格、対人関係能力、家族関係、育児や介護に関する知識、育児・介護観、人生観などの影響があげられる。第4として、核家族にともなう家族内の潜在的サポート力の低下や、母親1人、妻または娘1人に負担が集中するなど、社会・文化的要因が考えられる。しかも、育児も介護も、結果の出にくい(したがって評価されにくい)、きわめてファジィな仕事であるため、西欧的な課題達成志向的、目的追求的な価値観にはそぐわないとも言える。このような世話にともなう実際的な負担が、関係性の発達を阻んでいるとも考えられる。

また生活レベルで見た時、世話役割がアイデンティティの支えになりにくいこと、さらには一般社会において、世話することの意義や価値の認識が浅いことの一因として、心理学研究に「生活」の視点が欠けていたことがあげられるのではないであろうか。生活的自立は、表層的なこととして、心理学的関心の対象に

なることは少なく、人間にとってより本質的な主体的自己確立の中に取り込まれ、見逃されてきた。しかし現実には、生活身の自立ができない青年や成人、特に男性は数多く、このことが関係性発達の重要な実践的、理念的鍵である「世話」に対する認識を滞らせてきたと考えられる。

渡邊(1994)によれば、我国における男性の家事・育児・介護の分担率は、妻が有職か否かにかかわらず諸外国に比べて著しく低く、既婚男性は妻に、独身で親と同居している男性は母親に、独身の一人暮らしの男性は代替サービス産業に依存している。生活身の自立能力は、家族との別居や死別、病気や障害などの「危機を乗り越える力となるばかりでなく、他者への思いやりや感謝の心につながる。日常の食事作りを考えてみても、その計画、買い物、料理、後片付けは容易ではないからである。共働きの妻が仕事・家事・育児で、専業主婦が家事・育児、さらに介護で過重負担になっても、自分が分担するなど思いもつかず、ねぎらいの言葉一つかけない夫の多くは、それまで生活身の母親や妻に依存し、自分ではやったことがなく、その大変さが実感できないからである。(中略)さらに、高齢になり体が不自由になった場合でも、可能な限り生活身のことを自分ですること、自分でやれるように支援することが、その人やその子供の喜びや生きる力になっている」(渡邊, 1995)。このように、生活身の自立能力は、人間がライフサイクルを通じて自己実現を達成していくための基本的な力である。

4. 今後の課題

—実践レベルにおける個の確立と関係性の達成の統合へ向けて—

2. で述べたような理論的、研究的レベルにおいてのみならず、実践的レベルにおいても、個の確立と関係性の発達の両者を統合するようなヴィジョンを構築することはきわめて重要であろう。個を大切にしながらの世話役割の実践、個としてのアイデンティティを達成しながら他者の自己実現をも援助していくことは、精神的健康や精神的充足感、幸福感、そしてアイデンティティ発達という、どの側面から見ても、最も望ましいことであると思われる。これを実現させるためには、世話役割にともなう心身の負担や時間的拘束という物理的な困難さが、個としてのアイデンティティや個人の愛情まで圧倒してしまわないための方策を考える必要がある。そのためには、真の世話(care)を可能にする統合されたヴィジョンが求められる。そこには、他者の自己実現への援助を可能にするための理念から、男女を問わず、日常生活における世話が実際にできるという具体的な技術のレベルに至るまでの総合的な視点と、家族による世話と専門家や施設など家族外の社会の手による世話の内容、および相互の連関が示されなければならない。

Finch & Groves(1983)による、愛情の表現として女性が家族の世話をする行為についての考察は、この問題について非常に多くの示唆を与えている。”care”という言葉には、「人の面倒を見ること」と「人を慈しみ、愛すること」という2つの意味が含まれている。つまり、英語ではだれかの世話をすることを”care for someone”と言い、だれかのことを思いやることを”care about someone”と表現する。Finchらは、女性は長い間、社会的にこの行為が同じものと見なされてきたため、愛する者の面倒をみるよう強制されてきたと主張している。個を大切にしながらの世話役割の実践には、”care about”という心理的な愛情や配慮においては、世話される者の身近な者を中心に、そして”care for”という面倒を見る次元においては、社会や専門家を含めたネットワークをも広く導入した方式が適切であろうと思われる。

「世話」の理念の構築には、今後の研究と教育に負うところも、また大きいであろう。これまで多くの母親を圧迫、拘束してきた母性神話や三才児神話も、幼児心理学や発達心理学の研究によって誤りであることが指摘されるようになった(例えば、Bronfenbrenner, Alvarez& Henderson, 1984;大日向, 1988)ように、科学的研究の裏付けをもった世話の価値と意義が提唱されることが重要であろう。このような基礎研究は、子供の発達に不可欠な母性的世話の質と量は何か、子供の特質や環境の個人差をふまえた研究へとさらに発展していく必要がある。同様に、高齢者にとっても、心身の健康や精神的充足感、さらには自己実現の達成のために不可欠な世話や関係性とは何かという問題も、具体的に明らかにしていく必要がある。その萌芽的研究はいくつか試みられつつある(岡本, 1995a;原田・岡本, 1995)が、今後の研究に負うところが大きいであろう。

また、ライフサイクルを通して見た時、我々は男女を問わず、1人残らず世話し、世話される存在であるということを再認識する必要がある。そして世話する立場に立った時には、身体的世話から心理的愛情や配慮まで、すべてを担うことが、他者への愛情の深さであるという、今日まで多くの女性がとらわれてきた一種の呪縛から解放される必要がある。さらに、すでにみてきたように、世話役割はけっして、ポジティブな側面ばかりではなく、数多くの負担をともなうネガティブな側面をも内包するものである。その負担感やネガティブな感情を意識し、表出することは、決して異常で冷淡だからではなく、ごく普通の自然のことであるという認識をもつことも重要であろう。その感情体験を認識し、表出することによって、本来の自己感覚が回復していくことは、幼児虐待をする母親のカウンセリング実践などによっても示唆されているところである。

本稿では、成人期の発達における関係性の重要性と、世話を通しての関係性に見られる実際的问题を検討し、真の共生関係の構築に向けてのヴィジョンにつ

いて考察した。成人期におけるもう1つの重要な関係性に夫婦関係がある。これは、親子関係とは異なって、本来、自立した個と個の共生関係であるはずである。しかしながら、現実的には世話する妻と世話される夫という硬直した関係の夫婦が多いことは、よく指摘されるところである。夫婦の成熟した共生関係についても重要な課題であるが、この問題についてはまた別の機会に論じることにした。

<注>

- 1) Mahler(1975)の理論における「共生(symbiosis)」は、発達のごく早期の段階の乳児に見られる母親との身体精神的融合を示し、本稿のテーマである個人の自立を前提とした成人期の「共生関係」とは別の概念である。

引用文献

- Bakan, D. 1966 The duality of human existence. Boston: Beacon Press.
- Bem, S. L. 1974 Theory and measurement of androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1047-1054.
- Blos, P. 1967 On adolescence. New York: Free Press.
- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss, Vol. 1. London: Hogarth Press.
(黒田実郎 訳 1976 母子関係の理論 ①愛着行動 岩崎学術出版社.)
- Bronfenbrenner, U., Alvarez, M. F. & Henderson, Jr., C. R. 1984 Working and watching: Maternal employment status and parents' perceptions of their three-year-old children. *Child Development*, 55, 1362-1378.
- Chodorow, N. 1978 The reproduction of mothering. Berkley: University of California Press. (大塚美津子 訳 1981 母親業の再生産 新曜社.)
- Erikson, E. H. 1950 Childhood and society. New York: W. W. Norton. (仁科弥生 訳 1977・1980 幼児期と社会 みすず書房.)
- Finch, J. & Groves, D. 1983 A labour of love: Women, work and caring. London: Routledge, Kegan and Paul.
- Franz, C. E. & White, K. M. 1985 Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224-256.
- Gilligan, C. 1979 In a different voice. Boston: Harvard University Press.
(岩男寿美子 訳 1986 もうひとつの声 川島書店.)
- 原田圭子・岡本祐子 1995 高齢期における精神的充足感形成に関する研究(第2報): 家族役割の検討. *日本家政学会誌*, 46, 933-940.
- Hodgson, J. W. & Fisher, J. L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.
- 伊藤美奈子 1992 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究. *教育心理学研究*, 41, 293-301.

- Josselson, R. L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- Jung, C. G. 1951 *Aion: Untersuchungen zur Symbolgeschichte*. (English translation, In J. Campbell(Ed.) 1976 *The portable Jung*. New York:Penguin Books, Pp. 139-162.)
- 金沢佳子 1993 わが子がかわいく思えない 日本放送出版協会.
- 柏木恵子 1995 親子関係の研究. 柏木恵子・高橋恵子(編) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房, Pp. 18-52.
- Mahler, M. S. 1975 *The psychological birth of the human infant*. New York:Basic Press. (高橋雅士 訳 1983 乳幼児の心理的誕生 黎明書房.)
- 牧野カツ子 1987 共働き女性の精神病理. 稲村博(編) 女30代にして惑う. 現代のエスプリ, 236, 173-183. 至文堂.
- 松井洋 1992 愛他行動の発達と形成. 東洋(編) 発達心理学ハンドブック 福村出版, Pp. 814-818.
- Miller, J. B. 1976 *Toward a new psychology of women*. Boston:Beacon Press.
- O'Connell, A. N. 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *Journal of Personality*, 44, 675-688.
- 岡本祐子・福田公子, 他 1994 高齢化社会に関する家庭科授業の実践的研究Ⅱ: 発展学習にみられる福祉思想と共感的理解. 広島大学教育学部学部・附属共同研究体制研究紀要, 22, 137-146.
- 岡本祐子 1995 高齢期における精神的充足感形成に関する研究(第1報): 高齢者の精神的充足感獲得と生活の満足度および主体的欲求との関連性. 日本家政学会誌, 46, 923-932.
- 岡本祐子 1996 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究. 日本家政学会誌, 47, 849-860.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店.
- Parsons, T. 1955 *Family structures and the socialization of the child*. In T. Parsons & R. F. Bales(Eds.) *Family, Socialization and the Interaction Process*. New York:Free Press.
- 斎藤久美子 1990 青年期後期と若い成人期 --女性を中心に-- 小川捷之・斎藤久美子・鐘幹八郎(編) 臨床心理学体系 第3巻 ライフサイクル 金子書房, Pp. 163-176.
- Skaff, M. & Pearlin, L. 1992 *Caregiving: Role engulfment and the loss of self*. *The Gerontologist*, 32, 656-664.
- 渡邊恵子 1994 自立と自己の性の受容(2): 性差の検討. 日本女子大学紀要: 人間社会学部, 3, 1-14.
- 渡邊恵子 1995 自立再考 --女性の自立・男性の自立-- 柏木恵子・高橋恵子(編) 発達心理学とフェミニズム. ミネルヴァ書房, Pp. 77-101.
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究: 青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討. 教育心理学研究, 37, 302-311.

第 3 章

育児期における女性のアイデンティティ 様態と家族関係に関する研究

1. 問題および目的

今日、成人女性のライフコースは多様化し、ポスト子育て期の空の巣症候群などをはじめとして、成人期においても女性特有の発達的特徴や危機が存在することが認識されるようになってきている。これまでアイデンティティの発達は、個の発達としてとらえられることが多く、家族に関する問題は単なる背景要因の1つと見なされる傾向にあった。しかしながら、アイデンティティは、個の確立によって発達、深化していく側面と同時に、他者との関係性によって成熟していく側面も存在する。特に成人期においては、人はさまざまな社会的役割や家庭的役割を担い、複数のアイデンティティを有する。多くの成人男性は、職業人としてのアイデンティティを太い幹としたライフコースを歩むのに対して、女性は職業、家庭、個というさまざまなアイデンティティを自己の内部で統合しつつ、成人期を生きることが求められる。

Levinson(1978), Sheehy(1974), Vaillant(1977)などの成人発達研究によると、--その多くは男性を対象にした実証的研究であるが、--30歳から30代半ば頃までの時期は「一家を構える時期」(Levinson)、「根付きと自己拡大の時期」(Sheehy)など、比較的安定した時期であるとされている。しかしながら、多くの女性の場合は、20代後半から30代半ばまでは出産・育児期にあたり、ひとつのアイデンティティ葛藤の時期にあたると思われる。すなわち、後述するようにこの時期は、結婚までに形成してきた個としてのアイデンティティと、新たに母親になることによって獲得されるべき母親アイデンティティが、しばしば葛藤を引き起こすことが指摘されている。個としてのアイデンティティが、乳幼児期からの重要な他者への数々の同一化の主体的選択と統合の結果として獲得されるのに対して、母親アイデンティティは、母親役割の反映として獲得されるアイデンティティ(reflected identity)である。この両者を自己の中でどのように両立、調和させ、統合していくかは、現代女性にとっては必ずしも容易なプロセスではない。

例えば、大日向(1988)は、昭和初期、昭和20～25年、昭和45年前後の3つの時期に子育てをした女性の育児の意義や育児に対する意識に関する世代間比較を行

(注) 本論文は、日本家政学会誌, Vol. 47, Pp. 849-860, 1996 に発表した。

い、現代女性は、自己の生きがいは母親であることとは別のものと考える傾向にあることを見出している。また岡本(1994)は、多様に分化していく成人女性のライフコースを1本の木に見立て、どのライフコースを歩んだにせよ、その途上でアイデンティティの危機に遭遇することを指摘している。そして、出産・育児期は、職業をもつ、もたないにかかわらず、個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティの葛藤が顕在化する時期であると述べている。少子化が進む今日であっても、多くの女性が子育てを体験しつつ成人期を生きることにはかわりない。そして母親としてのあり方は、成人女性のもつ複数のアイデンティティの中でも重要な意味をもち、アイデンティティの発達にも深く関連していると思われる。

一方、牧野(1987)は、育児期の女性を対象に、育児不安と社会的な人間関係や夫婦関係の関連性を分析し、育児不安の程度は母親の社会的関係の広さや夫との関係に規定されていることを見出している。この研究も示唆しているように、母親である自己の安定は、単に母親個人の問題ではなく、女性をとりまく家族や社会の問題としてとらえる必要がある。

そこで本研究では、育児期の女性のアイデンティティ様態を、①個としてのアイデンティティの達成、②母性意識の確立、つまり母親であること・母親役割の反映として獲得される母親アイデンティティの達成という2つの次元からとらえ、

1. 育児期の女性のアイデンティティ様態の状態像について検討する、
2. 育児期の女性における上記の2つのアイデンティティの統合のあり方と家族関係に見られる特徴の関連性について考察する、

以上の2点を目的とした。

周知のように「アイデンティティ達成」とは、Erikson(1950)によって青年期の心理・社会的課題として提唱された概念であり、アイデンティティ形成がうまく進行し、アイデンティティが確立された状態を示している。「アイデンティティ達成」の対極の状態を示すのが、「アイデンティティ拡散」状態である。本研究で用いている「アイデンティティ葛藤」の概念は、「アイデンティティ拡散」状態ではなく、青年期、成人期に獲得された複数のアイデンティティが、互いに葛藤を引き起こしている状態を示す。「アイデンティティ統合」とは、これらの複数のアイデンティティが個人の中で調和し、統合されていることを意味する。

2. 方法

(1)調査対象者：

H市内のA幼稚園児の母親147名。平均年齢 33.2歳、対象者の83.0%が核家族、

76.6%が専業主婦であった。

(2) 手続き :

以下の内容からなる質問紙調査を行った。①Rasmussen(1964)の Ego Identity Scaleを翻訳、標準化した61項目からなるアイデンティティ尺度、②花沢(1992)の母性理念質問紙27項目、③家庭生活、夫との関係、夫の育児・家事への協力などに関する5ポイント・スケールの質問4項目、および自分の人生、生きがい、子育て、夫との関係などに関する文章完成法(SCT)6項目。調査は留め置き法により1995年9~10月に行った。

3. 結果 および 考察

(1) アイデンティティ 様態の定義と分類

本研究では、育児期の女性のアイデンティティ様態を①個としてのアイデンティティの達成度と②母性意識の高さの2次元でとらえた。

Rasmussenのアイデンティティ尺度は、Erikson(1950)の精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Schemeに示された第I~第VI段階の心理・社会的課題の達成度によって、1次元的にアイデンティティ達成の程度を測定しようとしたものである。この1次元的な測定法に対しては、Marcia(1964)らの批判も見られるが、Rasmussenのアイデンティティ尺度は、今日においてもなお、米国や我が国において広く用いられているアイデンティティ測定法の一つであり(鏞・山本・宮下, 1984; 鏞・宮下・岡本, 1995)、意識レベルでの個としてのアイデンティティ達成度を測定する尺度としては妥当であると考えられる。

一方、花沢の母性理念質問紙は、伝統的な母親役割を肯定する内容の項目(以下、肯定項目と記す)と、伝統的な母親役割を否定する内容の項目(以下、否定項目と記す)からなる。母性理念とは、花沢(1992)によれば、「母親であることの自覚にもとづく妊娠・分娩・育児への態度や価値観」と定義されている。今日まで、「母性」あるいは「母性意識」という言葉は明確に定義されないまま、日常的に広く用いられているが、上記の花沢の定義は、女性の中の「母親としての自己意識」を表現しているものと考えられる。本研究においては、花沢のこの母性理念の定義にもとづいて母性意識をとらえ、母性理念質問紙を用いて母性意識を測定することとした。

本研究では、この個としてのアイデンティティと母親としてアイデンティティが、個々人の中でどのように統合、あるいは葛藤しているかという視点から、育児期の女性のアイデンティティ様態について、表1のような4タイプを想定した。これらのタイプは、それぞれⅠ統合型、Ⅱ伝統的母親型、Ⅲ独立的母親型、

IV未熟型と命名した。

表1. アイデンティティ様態の4タイプの定義

タイプ	個としての アイデンティ ティ達成度	母性意識 の高さ	人数
I 統合型	高	高	47
II 伝統的母親型	低	高	35
III 独立的母親型	高	低	30
IV 未熟型	低	低	35

これらのI～IVタイプは、理論的には質的に異なる次のような特徴をもつと考えられる。I統合型は、個としてのアイデンティティがよく達成されている。しかも母性意識も高いことから、母親役割を反映した母親としてのアイデンティティもよく達成されているタイプである。このタイプの人々は、個としてのアイデンティティの達成の上に母親アイデンティティもよく確立されており、両者をうまく両立させているタイプであると推察される。

II伝統的母親型は、個としてのアイデンティティの達成度は低い。しかし、母性意識は高いことから、母親役割を反映した母親アイデンティティはよく達成されている。このタイプの人々は、母親としてのアイデンティティが、自己のアイデンティティの中心を占めているため、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの間の葛藤は少ないと考えられる。それに対して、III独立的母親型は、個としてのアイデンティティの達成度は高いが、母性意識は低い。このタイプの人々のアイデンティティの中心は、個としてのアイデンティティである。彼女らは、物理的には母親であるが、母親としての意識が乏しく、母親アイデンティティの確立が不十分な人々である。このタイプの人々は、4タイプの中で、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの間に矛盾や葛藤を感じることが最も多いと考えられる。

IV未熟型は、アイデンティティ達成度、母性意識ともに低く、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの両方とも確立が不十分なタイプである。このタイプも、両者の間の葛藤を体験することが多いと考えられる。しかし、個としてのアイデンティティを大切にしたいがために、母親役割の遂行や母性意識が不十分になりがちなIII型と異なって、IV型の葛藤体験は、発達の未熟であるがゆえのものであると推察される。

個としてのアイデンティティ達成度は、Rasmussenのアイデンティティ尺度得点の平均値 36.56 を基準に、37点以上を「高」、36点以下を「低」と見なした。母性意識の高さは、花沢の母性理念質問紙の得点の平均値 93.85を基準に、94点以

上を「高」、93点以下を「低」と見なした。各タイプのアイデンティティ得点は表2に、母性理念得点は表3に示した。

表2. タイプ別のアイデンティティ得点

タイプ (人数)	各ステージ別得点						総得点	有意差検定	
	I	II	III	IV	V	VI			
	(10)*	(10)*	(8)*	(11)*	(11)*	(11)*			(61)*
I 総合型 (47)	M	8.19	4.93	7.00	8.02	9.46	6.34	43.95	}
	SD	1.23	1.75	1.47	1.85	1.25	1.62	4.53	
II 伝統的母親型 (35)	M	6.00	3.17	4.77	5.20	6.54	3.88	29.57	}
	SD	1.83	1.84	1.47	2.02	1.79	1.42	4.86	
III 独立的母親型 (30)	M	7.86	5.26	6.63	8.23	8.86	5.76	42.63	}
	SD	1.52	1.82	1.30	1.97	1.33	1.47	4.02	
IV 未熟型 (35)	M	5.54	3.34	4.14	4.85	6.65	3.85	28.40	}
	SD	2.06	1.97	1.35	2.07	1.56	1.58	5.49	
Total (147)	M	6.97	4.20	5.71	6.64	7.98	5.05	36.56	}
	SD	2.03	2.05	1.86	2.50	1.99	1.91	8.67	

*項目数, *** $p < 0.001$.

表3. タイプ別の母性理念得点

タイプ	人数	得点	有意差検定
I 総合型 47	M	102.63	}
	SD	6.89	
II 伝統的母親型 35	M	101.59	}
	SD	7.21	
III 独立的母親型 30	M	84.53	}
	SD	7.86	
IV 未熟型 35	M	82.31	}
	SD	9.22	
Total 147	M	93.85	}
	SD	12.20	

*** $p < 0.001$.

以下に、各タイプに見られる母性意識、家庭生活や家族関係の特徴を分析し、最後にSCTの反応内容を総合して、育児期における女性のアイデンティティ統合のあり方について考察した。

(2)母性意識の特徴

母性意識は、母性理念質問紙に対する反応をもとに検討した。母性理念質問紙は、肯定項目(18項目)に対してはそれぞれ、「非常にそう思う」5点～「全く思わない」1点、否定項目(9項目)に対しては「非常にそう思う」1点～「全く思わない」5点を与えた。したがって得点が高いほど、母性理念がよく形成されていることを示す。表4および図1は各々の肯定項目の得点を、また表5および図2は否定項目の得点を示したものである。

表4. タイプ別の母性理念得点（肯定項目）

タイプ	N		1	2	4	5	7	8	10	11	13	14	16	17	19	20	22	23	25	26	
I 統合型	47	M	4.76	4.53	4.59	4.61	3.36	3.38	2.95	3.61	3.48	4.70	2.78	4.72	4.42	3.42	4.14	4.27	4.44	3.31	
		SD	0.55	0.73	0.67	0.52	1.31	1.02	1.07	1.06	0.96	0.54	1.07	0.44	0.67	0.98	0.79	0.73	0.61	0.74	
II 伝統的 母親型	35	M	4.85	4.65	4.60	4.45	3.54	3.65	3.14	3.82	3.22	4.51	3.05	4.60	4.60	3.77	4.11	4.17	4.34	3.45	
		SD	0.42	0.71	0.80	0.73	1.20	0.82	1.22	0.84	0.67	0.60	1.16	0.83	0.59	0.98	0.74	0.99	0.62	0.80	
III 独立的 母親型	30	M	4.33	3.86	3.76	3.63	2.66	2.73	2.33	2.60	2.33	4.50	1.90	4.23	3.60	2.40	3.36	3.36	3.40	2.10	
		SD	0.64	0.99	0.98	1.22	0.90	0.99	0.90	0.91	0.86	0.67	0.74	0.80	1.17	1.01	0.91	1.01	0.75	0.83	
IV 未熟型	35	M	4.14	3.74	3.68	3.57	2.42	2.20	2.11	2.42	2.22	4.11	1.82	4.20	3.65	3.00	3.28	3.54	3.34	2.51	
		SD	0.85	1.05	1.25	1.04	1.07	0.97	0.97	0.80	0.75	0.74	0.87	0.82	1.09	1.14	0.94	1.02	0.92	0.93	
Total	147	M	4.54	4.23	4.21	4.12	3.04	3.03	2.67	3.17	2.89	4.47	2.44	4.46	4.11	3.19	3.77	3.89	3.94	2.91	
		SD	0.70	0.95	1.03	1.00	1.24	1.11	1.13	1.10	1.00	0.67	1.12	0.75	0.99	1.14	0.93	1.01	0.89	0.98	
有意差 検定	I vs. II																			***	
	I vs. III		***	***	***	***		***		***	***		***	..	***	***	***	***	***	***	***
	I vs. IV		***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	..	***	..	***		***	***	***	***
	II vs. III		***	***	***	***	***	***	***	***	***	***		***		***	***	***	***	***	***
	II vs. IV		***	***	***	***	***	***	***	***	***	***		***		***	***	***	***	***	***

..p<0.01, ***p<0.001.

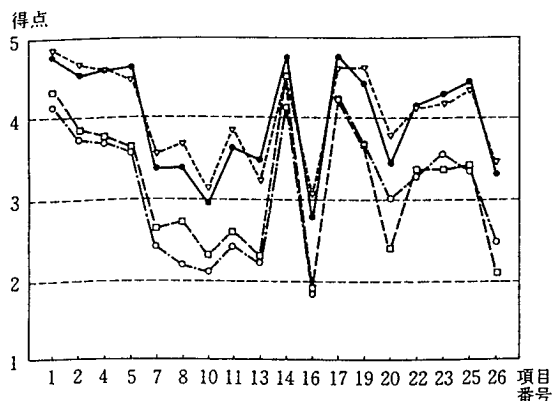


図1. 母性理念得点（肯定項目）

<肯定項目> (1) 妊娠は女にとってすばらしい出来事である。(2) 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である。(4) 赤ちゃんを産んではじめて子供のかわいさがわかる。(5) 赤ちゃんを無事産むためならどんな苦しみもがまんできる。(7) 女は子供を産むことで自分が生きた証拠を残すことができる。(8) どんなことをしても赤ちゃんは母乳で育てるべきである。(10) 子供を産んで育てるのは社会に対する女の務めである。(11) 女は子供をもつことで人生の価値を知ることができる。(13) 育児は女に向いている仕事であるからするのが自然である。(14) 子供を産んで育てることは自分自身の成長につながる。(16) 子供を産んで育てなければ女に生まれた甲斐がない。(17) 子供がいることで家庭生活はより楽しくなる。(19) わが子の成長を見とけるために長生きをしなければならない。(20) 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である。(22) わが子のためなら自分を犠牲にすることができる。(23) 子供を育てるのは生みの母が最良である。(25) わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りが出る。(26) 育児に専念したいというのが女の本音である。

表5. タイプ別の母性理念得点 (否定項目)

タイプ	N		3	6	9	12	15	18	21	24	27
I 統合型	47	M	4.68	3.59	3.31	4.36	3.57	1.61	3.17	3.36	3.38
		SD	0.50	1.04	1.05	0.81	0.76	0.67	1.15	1.09	0.81
II 伝統的 母親型	35	M	4.42	3.02	3.05	4.08	3.68	1.91	2.80	2.94	3.05
		SD	0.72	0.97	0.85	0.99	0.82	0.59	1.14	0.98	0.98
III 独立的 母親型	30	M	4.20	2.66	3.06	3.70	3.16	1.40	2.40	3.30	2.76
		SD	0.97	1.29	0.89	0.86	0.73	0.61	1.01	0.90	0.76
IV 未熟型	35	M	3.91	2.85	3.00	3.51	3.08	1.31	3.00	3.14	2.80
		SD	1.10	1.17	1.01	0.96	0.64	0.52	1.14	0.98	0.85
Total	147	M	4.34	3.09	3.12	3.95	3.40	1.57	2.95	3.19	3.04
		SD	0.88	1.17	0.97	0.96	0.78	0.74	1.20	1.02	0.89
有意差 検定	I vs. II			..		***					..
	I vs. III			..		***					..
	I vs. IV	***	..	n.s.		***	***		n.s.	n.s.	..
	II vs. III								
II vs. IV					***				

.. $p < 0.01$, *** $p < 0.001$.

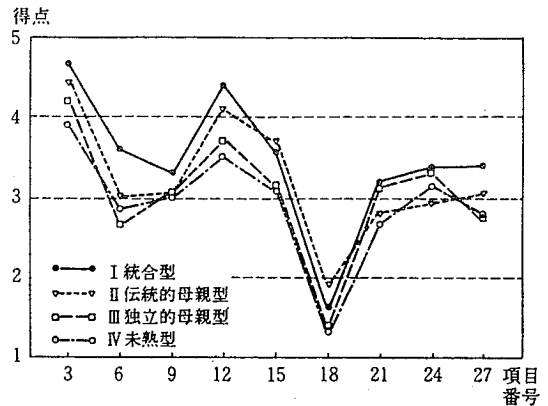


図2. 母性理念得点 (否定項目)

<否定項目> (3) 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである。(6) 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは不公平である。(9) 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない。(12) 結婚生活を楽しむためには、子供をつくらないほうがよい。(15) わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである。(18) 育児は妻だけでなく夫も分担すべきである。(21) 育児に追われていて、若さが早く失われる。(24) 育児から解放されるときに人間らしい自由な生活ができる。(27) 母親が子供の成長を生きがいにするのはまちがっている。

表6. 各タイプ別に見た家庭生活, 夫の理解, 家事・育児に対する協力への満足感

タイプ	人数	項目				
		家庭生活の満足感	夫の妻への理解の程度	夫の家事・育児の協力度	夫の家事・育児の協力に対する満足感	
I 総合型	47	M	4.32	4.08	3.80	3.76
		SD	0.70	0.85	1.11	1.07
II 伝統的 母親型	35	M	3.85	3.45	3.40	3.34
		SD	0.77	0.78	1.11	1.05
III 独立的 母親型	30	M	3.93	3.73	3.66	3.66
		SD	1.04	0.98	1.37	1.32
IV 未熟型	35	M	3.74	3.57	3.85	3.34
		SD	1.01	1.03	1.16	1.23
Total	147	M	3.99	3.74	3.69	3.54
		SD	0.89	0.93	1.18	1.16
有意差 検定		I vs. IV*	I vs. II*	n.s.	n.s.	

* $p < 0.05$.

母性理念得点は、すべての項目においてⅠ統合型、Ⅱ伝統的母親型は、Ⅲ独立的母親型、Ⅳ未熟型よりも高得点を示した。この結果は、表1の定義から見て妥当なものである。

また各々の項目の得点を検討すると、4タイプ共通の特徴として、次のような点が見出された。全体的に肯定項目のうち、「子供を産んで育てるのは社会に対する女の務めである」(No. 10)、「育児は女に向いている仕事であるからするのが自然である」(No. 13)、「子供を産んで育てなければ女に生まれた甲斐がない」(No. 16)、「育児に専念したいというのが女の本音である」(No. 26)や、否定項目のうち「育児は妻だけでなく夫もするべきである」(No. 18)に対しては特に得点が低く、全対象者の平均値は、3.00未満の値を示した。これらの結果は、従来の母性理念、すなわち女性であることは即、よい母親であるべきであるという考え方を否定する傾向や、育児は女性だけがするものではないという現代女性の意識を明確に表している。このような現代女性の母性意識の特徴が4タイプに共通に反映されていることは注目すべきであろう。

(3)各タイプに見られる家庭生活への満足感・夫婦関係の関連性

次に各タイプの家庭生活や夫婦関係の特徴を検討した。2.方法において記したように、本研究の対象者の83.0%が核家族、76.6%が専業主婦であり、Ⅰ～Ⅳのタイプ間には、家族形態、妻の有職率や有職者の勤務形態には大きな相違は見られなかった。家庭生活の満足感、夫の妻への理解の程度、夫の家事・育児への協力の程度およびそれへの満足感に関する項目は、それぞれ5ポイント・スケールで評定させた。それぞれのタイプの得点は、表6に示した。分散分析の結果、家庭生活の満足感は、Ⅰ統合型がⅣ未熟型よりも、夫の妻への理解の程度は、Ⅰ統合型がⅡ伝統的母親型よりも有意に高い得点を示した($F(3, 143)=3.50, P<.05$; $F(3, 143)=3.77, P<.05$)。しかし、夫の家事・育児への協力の程度およびそれへの満足感には有意差は見られなかった。

これらの結果は、Ⅰ統合型は他のタイプに比べて家庭生活への満足感が高いことや、夫からの理解の程度も高いと認知していることを示唆している。すなわち、家事・育児に対する夫の実際の協力という次元ではなく、より人格的な次元において夫から理解されていると認識できることが、育児期の女性を支えるものであると推察される。夫が妻の生き方を理解し、心理的に支えていくことが、育児期の女性にとって個としての自分と母親としての自分の両者を受容し、アイデンティティを統合させていくことにつながると考えられる。

(4)SCTの反応内容に見られた各タイプの特徴

最後に、文章完成法SCTの反応内容を総合して、各タイプの特徴を分析した。SCT 6項目に対する反応内容は、それぞれ、表7に示したような視点・基準に従って分析・検討した。表7の右欄に、各タイプの該当する反応数(人数)の割合を示した。表8は、各タイプのSCT各項目に対する反応内容の特徴をまとめたものである。表7および表8に示したようにSCTの反応内容は、各タイプによって著しい相違が見られた。

I 統合型は、自分の人生と育児の両者を意義あるものとして肯定的に受けとめ、主体的、積極的に関与していることが特徴的であった。さらに自分の人生と育児が調和しており、育児によって自分自身が成長してきたことや、育児が生きがいになっていることが明確に意識されていた。また、SCTの各刺激項目に対して、家族に対する記述が多く、夫を信頼し、高く評価していることが推察された。

II 伝統的母親型は、自分の人生に対しては肯定的で満足しているが、I型と比較すると、現在の生活や将来に対する主体性はそれほど高くない。また、自分の人生に対する明確な意識や展望が乏しいことが特徴的であった。育児に対しては、子供の気持ちを大切にすよい母親であろうとする姿勢が4タイプの中で最も強く、自己意識の中に占める子供の存在の大きさがうかがわれた。育児に対してはアンビバレントな反応も多いが、このタイプのアンビバレントな感情は、「大変だけれど楽しいもの」「夢いっぱいだが悩むことも多い」などの反応に示されているように、子育てにしっかりと関与し、積極的にとりくんでいることから体験されていた。これは、III 独立的母親型の、「子育ては苦楽に満ちているが生きがいではない」というような、育児への関与の浅さからくる気持ちの揺れとは異なるものであろう。II 伝統的母親型の夫に対する意識は肯定的であるが、子供の父親あるいは、いることがあたりまえの家族員としてとらえており、1人の人間としての受けとめ方は見られなかった。

III 独立的母親型は、上記のI・II型とは異なり、個としての生き方が前面に出ていることが特徴的であった。母親である自分は「不思議」という反応が象徴的に示しているように、母親としてのアイデンティティが自己にしっかりと定着し受容されていないことが推察された。夫に対しても対等で、独立した生活者として意識されていた。

IV 未熟型は、4タイプの中で否定的な意味合いの反応が最も多く見られ、不適応的タイプであると考えられる。自分の人生に対しても不満や漠然感が強く、将来展望もかなり悲観的であった。育児に対しても否定的、消極的であり、母親としての自分を受容できていない反応が多く見られた。夫に対しても拒否的であったり理解し合えていないことが推察された。

このように、各タイプのSCT反応の内容は、表1に示した4タイプの定義を明

表 7. SCT 反応内容の分類の視点・基準

(単位：%)

SCT 項目	分類の視点・基準		反応例	I 総合型	II 伝統的 母親型	III 独立的 母親型	IV 未熟型
私の人生	Highest level 人生を肯定的、積極的 にとらえ、家族との生 活に幸福感、充足感を 体験している。	H	・夫とともに歩みながら、 自分自身も成長してい くこと。 ・悔いのないように頑張 りたい。	66.0	48.6	40.0	28.6
	Lowest level 人生を否定的、悲観的 にとらえている。また は人生に対する漠然感 が特徴的である。	M	・こんなものかなと思う。 ・子育てだけで終わりた くない。 ・私のもの。	29.8	42.9	43.3	42.9
		L	・こんなはずではなかつ た。 ・どこでまちがったか。 ・この先、どうなるのだ ろう。	4.2	8.5	16.7	28.5
私の生きがい	Highest level 生きがい感をもってい ることが、明確に表現 されている。生きがい についての具体的な記 述がある。	H	・家族の幸せであり、仕 事の充実である。 ・私を必要とする人のた めに頑張ること。	76.6	54.3	46.7	31.4
	Lowest level 生きがいがない、また は生きがいについて考 えたこともない。	M	・これから見つけたい。 ・子供でもあるが、別の こともしたい。	23.4	28.6	26.7	31.4
		L	・まだ見つかっていない。 ・何だろう。 ・考えたことがない。	0.0	17.1	26.6	37.2
子供を育てることは 私にとって	Highest level 育児に対する積極的な 姿勢が見られ、育児を 自分自身の成長と関連 させてとらえている。	H	・人生の課題であり、喜 びでもある。 ・人生最大の仕事であり、 私を大人に成長させて くれる。	80.9	68.6	46.7	31.4
	Lowest level 育児に対する否定的、 消極的な姿勢が特徴的 である。育児を義務と してとらえている。	M	・あたりまえのことであ る。 ・楽しさ3割、試練7割 である。	17.0	28.6	30.0	31.4
		L	・かなり大変な仕事であ る。 ・与えられた試練である。 ・義務である。	2.1	2.8	23.3	37.2

表7. (つづき)

子供がいなかったら	Highest level 子育てに情緒的に積極的関与し、自分自身も成長したという親子の相互交流を示す記述内容.	H	・私の人生は今より淋しいものになっていただろう。 ・人の気持ちや痛みがわからない小さな人間になっていただろう。	55.3	68.6	36.7	48.6
	Lowest level 子供の存在から全く分離した子供とは無関係の生活の記述内容.	M	・体型もくずれず手の指も美しいままであっただろう。 ・淋しかったかもしれないが、気楽でよかったかもしれない。	17.0	14.3	23.3	14.3
		L	・別の楽しみをもっている。 ・もう少し自由に行動できた。 ・仕事を充実させていただろう。	27.7	17.1	40.0	37.1
私が母であるということ	Highest level 母親としての自分を積極的に受容し、親としての役割を一生懸命果たそうとする姿勢が見られる。	H	・子供たちは気にいらないうかもしれないが、一生懸命やっている。 ・子供たちの最強の友人になりたい。	53.2	45.7	36.7	28.6
	Lowest level 母親としての自分を受容できていない。母親役割に対する否定的、消極的な姿勢が特徴的である。	M	・私の責務である。 ・女に生まれたのだから、当然である。 ・事実である。	34.0	28.6	30.0	31.4
		L	・未だに信じられない。 ・ほとんど罪である。 ・何かのまちがいでないか。 ・自分自身たよりない。	12.8	25.7	33.3	40.0
私にとって夫は	Highest level 夫を信頼し、夫婦としての相互交流が見られる記述内容.	H	・何でも話し合っ共々生きていく相手である。 ・心の支えであり、最愛の人。 ・人生の最良のパートナーである。	80.9	62.9	53.3	43.0
	Lowest level 夫を拒否、または夫と理解しあえていないことを示唆する記述内容.	M	・必要である。 ・子供の父親。 ・空気のようなもの。	19.1	31.4	26.7	34.3
		L	・他人である。 ・暴君である。 ・あくまで子供の父親にすぎない。	0.0	5.7	20.0	22.7

H: high level, M: middle level, L: low level.

表8. タイプ別に見た SCT 反応の特徴

	「私の人生」	「私の生きがい」	「子供を育てること は私にとって」	「子供がいなかったら」	「私が母である ということ」	「私にとって夫 は」
I 総合型	「温かな家族に包まれ幸せを毎日かみしめている」「今も昔も家族や友人に支えられている」など、幸福感を感じている反応が多く、「夢に自分がどれだけ近づけるか試されている」など、前向きで積極的な姿勢が特徴的である。	「今のところ子供」だが、「これから何か探していく」など、子育てがすべてではないという気持ちが推察される反応や家族を思いやる反応が多い。反応内容のほとんどは子供や家族に関するものであり、I群の対象者はすべて生きがいをもっている。	「自分自身の成長」「プラスの面が多い」など育児を自分自身を向上させていけるものとしてとらえている。また「一番大事なこと」「生きがい」「楽しい」など積極的な姿勢で育児に臨んでいる。「かなり大変」といった否定的な反応は1名のみである。	「今の自分はある得ない」「心の成長はなかった」など育児による自分自身の成長をうかづかわせる反応が多い。一方、「いいなりの人生を歩む」など、子供がすべてではないと思われる反応や「もっと自由な生活ができる」など母親役割を否定するような反応も少数見られた。	全体的に「良き母になるよう努力する」「責任をもちたい」など、母としての自分を積極的に受け入れ、高めていこうとし、「幸せなこと」「感謝したい」と感じているが、「今だに信じられない」「不思議」という反応も少数見られた。	「人生の良きパートナー」「大切な存在」「良き理解者」「心の支え」として夫を信頼し、高く評価していることが推察される。
II 伝統的母親型	「これで十分」「平凡で平和」など現状に満足している反応がほとんどである。また「家族のために働くこと」「子供のためにある」など自分を犠牲にしていると感じられる反応も見られた。	「子供の成長」としているが、I群に比べて今後、1人の人間としての生きがいを見つけていこうと感じさせるものが少ない。また「何だろう」「まだ見つかっていない」「考えたことがない」などの反応も見られた。	「大変だけれど楽しいもの」「夢いっぱいだが悩むことも多い」などI群にはあまり見られなかったアンビパレントな記述が多い。「自分自身の成長」とするものも見られた。	「淋しい」という反応がほとんどである。「それなりに楽しく暮らす」などの反応はわずかであり、子供の存在の大きさが推察される。自分自身の成長や母親役割を否定するような反応は全く見られない。	「子供にとって良き母であるかどうかはわからないが、がんばる」「子供たちによかったらと思ってもらえれば」など、子供の気持を優先する反応が多い。	「良いパートナー」「一番の理解者」「頼りにしている人」であるが、「子供の父親」というI群には見られなかったとらえ方をしている。また「空気みたいな人」「こんなものかな」など夫の存在が意識されていないと感じられる反応も見られた。
III 独立的母親型	I・II群には見られない「私のもの」という反応がかなり多い。「まだまだこれから」「充実した日々を送っていききたい」と人生を前向きに考えてはいるが、家族とともに歩んでいくことする姿勢は感じられない。	「子育ては苦楽に満ちているが生きがいではない」など、家族に関する記述は少ない。人生に対する積極的な姿勢が見られる一方で、「何だろう」「今はない」という漠然とした反応もある。	「自分自身の成長」とするものと、「義務の一つ」「時々苦痛になる」など育児を否定的・消極的にとらえるものに分かれている。I・II群に比べ「楽しい」「生きがい」という反応はかなり少なく、育児に対する積極性は見られない。	「仕事をしていた」という反応が圧倒的に多い。また「淋しいかもしれないが、楽でよかったかも」というアンビパレントな反応も多く、母親役割を受容しきれないことが推察される。	「不思議」という記述が最も多く、「あまり思っていない」「時に煩わしいこともあるけど母親としての肯定的感情は少ない、よい母親でありたい」という積極性は見られない。	「良きパートナー」とする記述はわずかであり、「ともに生きる相手であってほしい」「共同生活者」「ふつうの人」「同志である」など他群に比べて独立した生活者として意識している側面が見られる。
V 未熟型	「どこでまちがったのか」「思いどおりにならない」など現状に対する不満が感じられる。また「この先どうなるの」「これからが一番きつい」など不安で悲観的な反応も目立つ。III群と同様、子供や家族に関する記述はほとんどなく、自分に対して「何だろう」「わからない」など漠然感が特徴的である。	「何だろう」という反応が最も多い。「子供の成長」とする者も他群に比べて僅かである。現時点で生きがいを見出せていないことが推察される。	「難しい」「重荷」「試練」など育児に対して否定的、消極的であり、「仕事」としてとらえている者も見られる。III群と同様、「楽しい」「生きがい」という反応は少ない。	「淋しい」「毎日が退屈でつまらない」という反応も見られるが、「遊んでいるかも」「もう少し自由な行動ができた」と思うことがあがるなど母親役割を否定する反応がI・II群に比較して多く見られた。	「不思議」「ほとんど罪」「まちがっている」「不徳のいたすところ」など他群に比べて母親としての自分を受容できていない反応が最も多い。「事実」「一生変わらない」という事実を述べているだけの反応も見られた。	「良きパートナー」という反応が多い反面、「いなくてもよい」「永遠の大きな謎」など、否定的な内容や理解し合っていないことが推察される反応も見られた。

確に裏づけるものであった。本研究によって示唆されたように、子供をもつすべての女性が母親であることを受容し、母親である自分を自己の生き方の中に統合しているわけではない。特にⅣ未熟型は、母親であることへの不適格感や母親役割を否定する傾向が強いこと、同時に自分の人生に対する不満や不適応感、漠然感も高いことが示唆された。また、Ⅲ独立的母親型は、育児に対して否定的、消極的であり、母親であることにアンビバレントな感情が強く、葛藤状況にあることが推察された。Ⅰ統合型は、個としての自己と母親としての自己が調和し統合されており、4タイプの中で最も成熟したアイデンティティを達成していると考えられる。以上のように、個としての自己と母親としての自己の統合のあり方は、育児期にある女性のアイデンティティの状態像を示す重要な視点の1つであると思われる。

これら4タイプの女性の家族との関係を分析すると、Ⅰ統合型が夫を最も積極的、肯定的に受けとめており、家族に対する積極的な関与がしっかりとできていることが示唆された。Ⅱ伝統的母親型も、家族や夫に対する意識は肯定的であるが、Ⅰ型に比べて主体性の程度は低い。Ⅲ独立的母親型は、夫と対等であることが意識されており、自立性が感じられるが、子供に対する姿勢は、否定的、消極的な面が多い。またⅣ未熟型は、夫や子供に対して拒否的であったり、積極的関与が不十分であることが示唆された。

以上の結果を総合すると、育児期の女性のアイデンティティの統合には、家族とのかかわり方、特に夫との関係が重要な意味をもっていることが示唆された。しかしながら、本研究によって見出された家庭生活や夫との関係に対する認知は、全体的な意識の把握にとどまっており、さらなる検討の余地を残している。特に、女性のアイデンティティ様態は、夫婦の相互作用のあり方や夫自身のアイデンティティ様態との関連性など、さまざまな角度からさらに考察していく必要がある。

成人女性のアイデンティティ発達に関する研究は、まだその途についたばかりであり、検討されるべき数多くの課題が残されている。はじめに述べたように、女性のアイデンティティは、個の確立と同時に、他者との関係性によって発達していく側面が強い。またその特質は、各ライフステージにおいてかなり異なってくると思われる。その意味においても、家族関係の視点から女性のアイデンティティの発達・変容を考察していくことは、今後の重要な課題であると考えられる。

本研究では、個としてのアイデンティティ達成度と母性意識の高さによって、育児期の女性のアイデンティティ様態に関する4タイプを設定した。また、母性理念得点の高い人は母親アイデンティティがよく達成されていると仮説的にとらえた。これらの方法論的妥当性の検討、すなわち4タイプの独立性や母性理念

と母親アイデンティティの関連性の検討もまた、今後に残された重要な課題である。

引用文献

- Erikson, E. H. (仁科弥生訳) 1977・1980 幼児期と社会 1, 2. みすず書房.
- 花沢成一 1992 母性心理学 医学書院.
- Levinson, D. J. (南博訳) 1980 人生の四季. 講談社, 東京.
- 牧野カツコ 1987 共働き女性の精神病理. 稲村博(編): 女30代にして惑う. 現代のエスプリ, 至文堂, 236, 173-183.
- Marcia, J. E. 1964 Determination and Construct Validity of Ego Identity Status. Unpublished Doctoral Dissertation, The Ohio State University.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店.
- 岡本祐子 1994 現代女性をとりまく状況. 岡本祐子・松下美知子(編) 女性のためのライフサイクル心理学. 福村出版.
- Rasmussen, J. E. 1961 The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. Psychological Reports, 15, 815-825.
- Sheehy, G. (深沢道子訳) 1978 パッセージ -- 人生の危機 プレジデント社.
- 鑓幹八郎・山本力・宮下一博 1984 自我同一性研究の展望. ナカニシヤ出版.
- 鑓幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1995 アイデンティティ研究の展望II ナカニシヤ出版.
- Vaillant, G. E. 1977 Adaptation to Life. Boston: Little Brown.

第 4 章

ケアすることによるアイデンティティ 発達に関する研究 I

-----高齢者介護による成長・発達感とその関連要因の分析-----

1. 問題および目的

(1) 個としてのアイデンティティと関係性にもとづくアイデンティティ

ライフサイクルを通じて見られるアイデンティティの発達に関する研究は、生涯発達心理学の進展と並行して、1980年代以降、次第に増加しつつある(鑑・宮下・岡本, 1995, 1997)。これまで、アイデンティティの発達は、多くの場合、いわゆる個としての発達の側面から論じられてきた。しかしながら、成人期のアイデンティティは、単に、個としての発達の側面のみならず、関係性、つまり他者とのかかわりの中で、発達、深化していく側面も重要であろう。岡本(1995, 1997)は、成人期のアイデンティティ発達におけるこの「関係性」の側面のもつ意味を理論的に検討し、成人のアイデンティティ発達と成熟性は、表 1 に示したような2つの軸でとらえられることを示唆した。

第1の軸は、個としてのアイデンティティの発達である。これは改めて述べるまでもなく、「自分とは何者であるか」「自分は何になっていくのか」という個の自立・確立が中心的テーマである。個としてのアイデンティティの発達は、積極的な自己実現の達成へ向けて方向づけられる。もうひとつの軸は、これまでのアイデンティティ研究において重視されることが少なかった関係性にもとづくアイデンティティの発達である。この中心的テーマは、「自分は誰のために存在するのか」「自分は他者の役に立つのか」という問題である。関係性にもとづくアイデンティティは、他者の成長や自己実現への援助へ向けて方向づけられる。成人期のアイデンティティの発達には、この両者が等しく重みをもち、両者が統合された状態が本当に成熟した大人のアイデンティティであると考えられる。

個としてのアイデンティティと関係性にもとづくアイデンティティは、相互に影響を及ぼし合い、深い関連性をもっている。たとえば、他者の成長や自己実現への援助ができるためには、個としてのアイデンティティが達成されている

(注) 本論文は、広島大学教育学部紀要 第II部, Vol. 46, 1997(印刷中) に発表した。

表1. 成人期のアイデンティティをとらえる2つの軸

	個としてのアイデンティティ	関係性にもとづくアイデンティティ
中心的テーマ	自分は何者であるか 自分は何になるのか	自分は何のために存在するのか 自分は他者の役に立つのか
発達の方向性	積極的な自己実現の達成	他者の成長・自己実現への援助
特徴 (山本, 1989による)	1. 分離-個体化の発達 2. 他者の反応や外的統制によらない自律的行動(力の発揮) 3. 他者は自己と同等の不可侵の権利をもった存在	1. 愛着と共感の発達 2. 他者の欲求・願望を感じとり、その満足をめざす反応的行動(世話・思いやり) 3. 自己と他者は互いの具体的な関係の中に埋没し、拘束され、責任を負う
相互の関連性・影響	①個としてのアイデンティティ⇔関係性にもとづくアイデンティティ ・他者の成長や自己実現への援助ができるためには、個としてのアイデンティティが達成されていることが前提となる。 ・他者の成長や自己実現への援助ができるためには、常に個としてのアイデンティティも成長・発達しつづけていることが重要である。 ②関係性にもとづくアイデンティティ⇔個としてのアイデンティティ ・他者の役に立つことにもとづく自己確信と自信。 ・関係性にもとづくアイデンティティの達成により、生活や人生のさまざまな局面に対応できる力、危機対応力、自我の柔軟性・しなやかさが獲得される。	

ことが前提である。これは、親が子供を育てること、教師が生徒を教育すること、専門家として後進を育てることなど、さまざまな領域においていえることである。また、本当に他者に対してよい成長への援助ができるためには、常に個としても成長・発達をしつづけていることが重要である。

それに対して、関係性にもとづくアイデンティティが、個としてのアイデンティティの発達にどのように貢献するかという問題は、これまで注目されることが少なかったと思われる。それは、アイデンティティの発達にとって関係性にもとづくアイデンティティのもつ意味そのものが重視されてこなかったためであろう。しかしながら、他者の役に立っているということによる自信や自己確信ばかりでなく、他者を世話する営みを通して養われる生活や人生のさまざまな局面に対応できる力、---これは危機対応力と呼ぶことができるであろう---、自我の柔軟性やしなやかさの獲得などは、他者への深い関心や関与を通じて得られた、個としてのアイデンティティの成熟性といえるのではないであろうか。成人期のアイデンティティの発達にとって、関係性にもとづくアイデンティティの重要性を実証に検討することは、きわめて重要な課題であろう。しかしながら、現在のところ、このような視点にもとづく研究は、行われていない。

(2)成人期の発達における「ケアすること」の重要性

今日は、「共生の時代」といわれるように、これからの社会は、もはや個人の福利だけを追及していたのでは、個人そのものも社会も維持できなくなってきた

ことが認識されつつある。そして、他者の成長や自己実現を援助しつつ、自らも自己実現を達成していくという課題に一人一人が取り組んでいかねばならない時代になってきているのではないであろうか。この「関係性」を支える重要な鍵概念のひとつが、「ケア」(care, 世話・介護・看護)ということである(岡本, 1995)。ケアすること・世話役割は、成熟した共生関係の構築のためには不可欠の重要な意味をもっているにもかかわらず、これまで長い間、世話することの意義は、社会的にも学問的にも軽視されてきた傾向がある。学問的には発達心理学の視点から、最近ようやく子育てによる親の側の発達が注目されるようになった(柏木・若松, 1994)にすぎない。

反対に、子育てや老親の介護など、家族内の異世代の世話を通して共生関係を構築することが、困難な問題であることは、数多く指摘されているところである。特に、高齢少子化社会の到来にともなって、老親の介護者のストレスの増大やアイデンティティ喪失感などが指摘されている。例えば、1人の家族が介護の責任を全面的に任されるという事態は、ともすれば介護者になった者が、介護役割に自分の全生活を奪われ、社会人としての生活や個としてのアイデンティティの喪失を生じさせることにもなる(Skaff & Pearlin, 1992)のである。

本研究は、関係性、特にケアすることによるアイデンティティの発達を実証的に検討するための基礎研究として行われたものである。柏木・若松(1994)は、子育てすることによる親の側の成長・発達に注目し、日々、自ら手をかけて子育てしている母親は、そうでない父親よりも、「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命・信仰・伝統の受容」「生きがい・存在感」「自己の強さ」などの人格特性を獲得していることを見出し、これらを親となることによる成長・発達に関する因子と名付けている。高齢者の介護も、子育てと同様、単に「介護する者」と「介護される者」という一方向的な関係ではなく、高齢者の世話を通じて介護する側も多くを学び、成長・発達していく関係としてとらえることはできないであろうか。柏木・若松(1994)の研究で見出された6つの因子は、いずれも、介護体験を通じても獲得される特質であるように思われる。

実際に、高齢者の介護や世話をしている人々は、その介護体験をどのように受けとめているのであろうか。介護に携わることによって、人生の実相を学ぶ、他者の喜びを自分の喜びとすることができる、忍耐強くなる、他者に対して思いやり深くなる、ものごとを現実的あるいはプラス思考で考えられるようになる、などのいわゆる人格の成長感を体験するのであろうか。また、もし成長感の体験に個人差があるならば、その個人差は何に由来しているのであろうか。

(3)本研究の目的

本研究は、このような問題意識にもとづいて、

- ①高齢者介護にたずさわることによる介護者の側の成長・発達感の実態、
 - ②高齢者介護による成長・発達感に関連する要因、
- について検討することを目的とした。

2. 方法

(1)調査対象者：

I 在宅介護者群（在宅で家族を介護している者）79名（男性7名、女性72名、平均年齢53.1歳、平均介護年数4年3カ月）、II 施設職員群（養護老人ホーム、老人保健施設の介護職員）23名（男性5名、女性18名、平均年齢35.4歳）、III 一般群（介護体験のない者）23名（男性5名、女性18名、平均年齢51.2歳）、合計125名を対象とした。第III群は、統制群として設定した。対象者は全員、広島県内に在住している。

(2)手続き：

以下の内容からなる質問紙調査を実施した。

1)介護体験による成長・発達感に関する5ポイント・スケールの質問，10項目。

予備調査をもとに、介護に携わることによって体験されるであろう成長感を、次のように仮定した。

1. 介護し看取ることによって、自分は成長した。
2. 私は、介護し看取ることによって人生の実相が学べた。
3. 私は、介護し看取ることで自分の人生を今までより豊かなものにできた。
4. 私は、他者の喜びを自分の喜びとすることができるようになった。
5. 私は、介護し看取ることによって、以前よりも忍耐強くなった。
6. 私は、介護し看取ることによって、人に対して深い思いやりがもてるようになった。
7. 私は、介護し看取ることによって、以前よりも現実的になった。
8. 私は、以前よりも物事をプラス思考で考えられるようになった。
9. 私は、以前よりも人とのつながりを大切にするようになった。
10. 私は、以前よりもつらいことや苦しいことがあっても、乗り越えていける強さをもった。

これらの項目には、「最もよくあてはまる」(5点)～「全くあてはまらない」(1点)を与えた。したがって、得点が高いほど、成長・発達感が高いことを意味する。

2)介護に関わる感情・態度に関する項目：

A介護に対する感情、B要介護者への接し方、受けとめ方、C要介護者の人生の受けとめ方、D介護者自身のアイデンティティ意識、E老いに対する感情、の5つの側面に関する項目を、それぞれ7～12項目ずつ設定し、それを介護者自身がどのように意識・体験しているかを、5ポイント・スケールで評定してもらった。これらは、介護体験による成長・発達感に影響する要因であると仮定した。その主要な項目は以下のとおりである。

A介護に関する感情：

- ① 介護はつらい。
- ② 介護は自分の時間をとられるので腹立たしい。
- ③ 介護はやりがいのある仕事だ。
- ④ 介護をするのは、自分が今までお世話になった分の恩返しである。
- ⑤ 介護は義務であり、できればたくない。

B要介護者との接し方・受けとめ方：

- 1 私は介護している人の身体的、精神的障害をそのまま受け入れられる。
- ② 私は介護を受けている人の老いていく姿を見て、やりきれなさを感じる。
- 3 私は介護を受けている人の話し相手によくになっている。
- 4 私は介護を受けている人と意志疎通がよくできていると思う。
- 5 私は介護を受けている人から精神的に支えられていると思う。

C要介護者の人生の受けとめ方：

- 1 私は介護を受けている人の人生を、かけがえのないものだと思う。
- 2 私は介護を受けている方を人生の先輩と思い尊敬している。
- 3 私は介護を受けている人が、自分の人生を満足しているように思う。
- ④ 私は介護を受けている人の人生は報われないものだと思う。
- 5 私は介護を受けている人の人生は、私の人生と通じるものがあると思う。

D介護者自身のアイデンティティ意識：

- 1 私は自分の果たすべき役割がわかっている。
- 2 私は生きている意味がはっきりわかっている。
- 3 私は自分の今までの人生を受け入れ、満足している。
- 4 私は人から認められていると思う。
- 5 私は、喜びや愛を生み出す力をもっている。

E老いに関する感情：

- ① 老いていくことはむなししいものである。
- ② 老いることは自然なことである。
- ③ 私は、将来老いていくと役に立たなくなるだろう。
- ④ 年をとることは、若い時に考えていたよりもよいことだと思う。
- ⑤ 私は年をとっても若い時と同じように幸せであると思う。

(○は、否定的意味をもった項目であり、逆転させて得点化する。)

統制群である介護体験のないⅢ一般群の人々に対しては、成長感については、「今の私は5年間前より成長した」「私は5年前より人生の実相をよく知っている」というように、この5年間の成長感について回答を求めた。また、「介護に関する感情」「要介護者に対する接し方・受けとめ方」「要介護者の人生に対する受けとめ方」については、調査対象者に対して「あなたの親または伴侶が老衰や病気により、日常ベットのうえで過ごし排泄や食事などの介護を要するようになり、あなたが自宅で介護しなければならなくなった時のことを想定して答えて下さい」と教示して回答してもらった。

3. 結果および考察

(1)介護による成長・発達感の分析

介護による成長・発達感の平均得点は、Ⅰ在宅介護者群、43.82(SD 7.67)、Ⅱ施設職員群、43.78(SD 4.64)、Ⅲ一般群 42.13(SD 4.75)であり、t検定の結果、3群間に有意差は見られなかった。しかし、図1に示したように、その成長感の得点分布には、3群間で大きな相違が見られた。Ⅱ施設職員群やⅢ一般群では、その成長感得点は平均値のあたりに集中しているのに対して、Ⅰ在宅介護者群の場合は、非常に高く成長感を感じている人からほとんど成長感を感じていない人まで幅広く分布していた。このことは、在宅介護者の介護にともなう成長感の体験には非常に個人差が大きいことを示唆している。

(2)介護に関わる感情・態度得点の分析

次に、介護による成長感に関連すると考えられる介護に関わる感情・態度得点について分析した。

結果は表2に示したとおりである。分散分析の結果、3群間に有意差が見られたのは、A介護に関する感情についてのみであった。3群の中でⅡ施設職員群の得点がもっとも高く、高齢者の介護に対して肯定的な感情をもっていることが示唆された。これは、職業として勤務時間の範囲内で、しかも複数名で協力し

表 2. 介護体験による成長感および介護にかかわる感情・態度得点

調査対象者		I群 在宅介護者 (79名)	II群 施設職員 (23名)	III群 一般人 (23名)	有意差検定
A 介護に関する感情 (7項目)	M	23.62	27.59	21.87	II > I * II > III *
	SD	5.58	5.18	4.07	
B 要介護者に対する接し方, 受けとめ方 (9項目)	M	31.67	32.70	32.35	n.s.
	SD	5.53	4.80	3.76	
C 要介護者の人生の受けとめ方 (7項目)	M	23.58	23.32	24.91	n.s.
	SD	5.09	4.23	3.52	
D アイデンティティ意識 (9項目)	M	35.10	30.70	33.96	I > II *
	SD	5.97	4.93	4.09	
E 老いに関する感情 (12項目)	M	38.91	36.91	38.70	n.s.
	SD	7.11	5.62	5.98	
F 介護体験による (又はここ5年の) 成長感 (11項目)	M	43.82	43.78	42.13	n.s.
	SD	7.67	4.64	4.75	

* p < .05

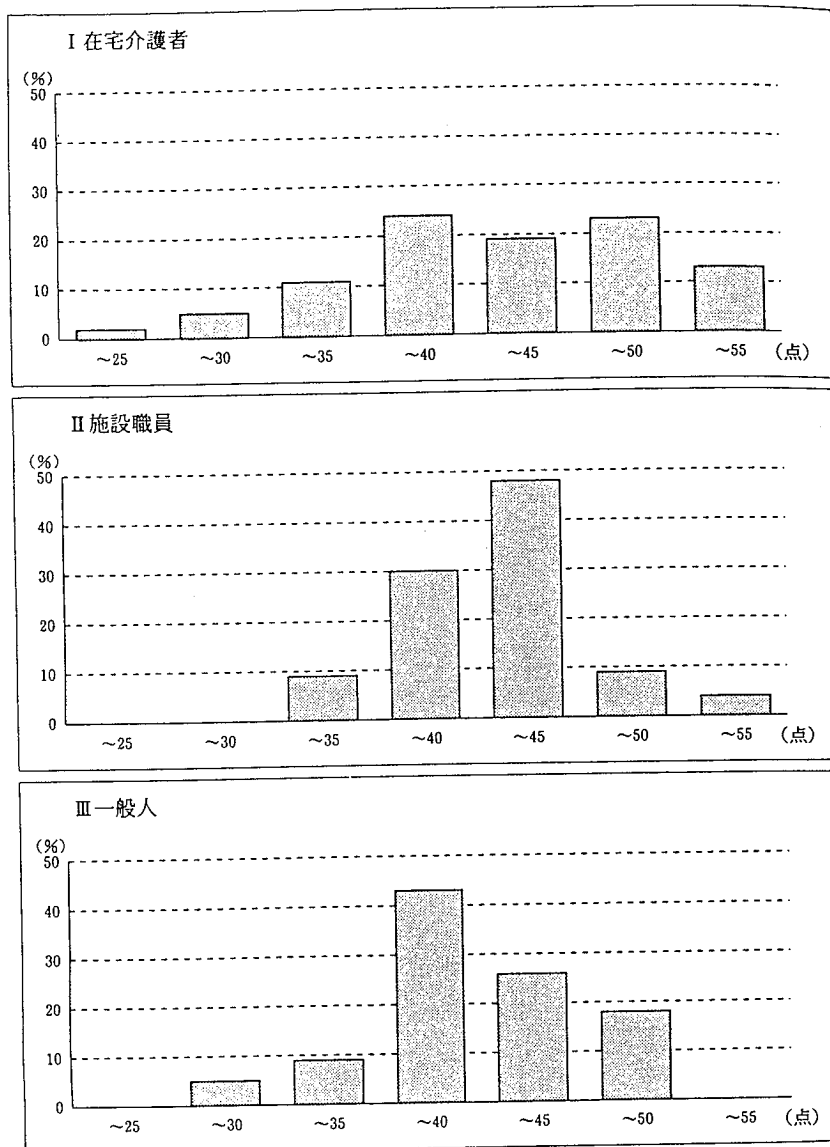


図 1. 介護体験による成長感得点の分布

て介護を行っている施設職員は、ほとんど自分1人で24時間体制で、自宅で介護しているI在宅介護者群よりも、介護にともなうストレスや否定的な感情が低いことを示唆するものであろう。

(3)介護による成長感に関わる要因

(1)で述べたように、在宅介護者群の成長・発達感には、非常に個人差が大きいことが示唆された。そこで次に、介護体験のあるI在宅介護者群、II施設職員群のみを対象にして、介護による成長感に関わる要因について分析した。つまり、介護することによる成長感は、A～Eのどの要因と関連性があるかについて検討した。成長感得点の高低によって、表3のように、「成長感大」群、「成長感中」群、「成長感小」群の3群に分類し、A～Eの要因の得点の相違を検討した。

結果は表4のとおりである。分散分析の結果、E「老いに対する感情」以外はすべて、「成長感大」群が「成長感小」群よりも有意に高い得点を示していた。このことは、介護者が肯定的な気持ちをもって介護にあたっていること、要介護者に対してもよく意志の疎通がとれ、受容的な態度で接していること、また要介護者の人生を尊重して肯定的に受けとめていること、そして介護者自身もしっかりとしたアイデンティティ意識をもってしていることが、自分自身の成長感の体験につながっていることを意味している。

表3. 介護による成長感得点による分類

	成長大群	成長中群	成長小群
得点(点)	55~46	45~36	35以下
人数(名)	46	44	10

表4. 成長感の程度からみた介護にかかわる感情・態度得点

項目	対象者群	i群	ii群	iii群	有意検定
		成長大群 (46名)	成長中群 (44名)	成長小群 (10名)	
A介護に関する感情 (7項目)	M	26.60	23.18	22.50	i > ii *
	SD	5.20	5.70	6.77	
B要介護者に対する接し方、受けとめ方 (9項目)	M	34.71	30.09	26.10	i > ii * i > iii * ii > iii *
	SD	5.10	4.17	5.24	
C要介護者の人生の受けとめ方 (7項目)	M	25.07	23.00	20.00	i > iii *
	SD	4.77	4.77	4.19	
Dアイデンティティ意識 (9項目)	M	37.02	31.68	29.60	i > ii * i > iii *
	SD	5.39	5.22	5.06	
E老いに関する感情 (12項目)	M	38.89	38.02	38.90	n.s.
	SD	7.37	5.98	7.82	

* p<.05

これらの結果より、他者を尊重し、より深い関係性をもてることが、介護という大きな困難をとまなう役割のストレスを軽減し、さらに自分自身の心の発達を促進させることが示唆されたと考えられる。

(4)今後の課題

高齢少子化社会を迎えた我が国において、高齢者の介護・看取りは最も重要な課題の一つである。よりよい高齢者介護の実践のためには、単に福祉、経済的支援のみにとどまらず、心理的な次元においてもよい介護-被介護関係の達成に注目していく必要がある。その基本的なヴィジョンは、個を大切にしながらの世話役割の実践、個としてのアイデンティティを達成しながら他者の生活と自己実現をも援助していくという考え方であろう。本研究は、このような真の共生関係を構築していくための基礎研究として行われたものである。本研究によって、介護者が被介護者とより深い関係性をもてることが、介護役割を遂行する上で重要な役割を果し、さらに介護者自身の成長・発達感を促すことが示唆された。今後さらに、このようなよりよい介護-被介護関係を達成するための要因、特に介護者にとって、世話役割にとまなう心身の負担や時間的拘束という物理的な困難さが、個としてのアイデンティティや家族に対する愛情を蝕んでしまわないための方策や援助を考察していくことが、重要な課題であると思われる。

引用文献

- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 岡本祐子 1995 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について：理論的展望と生活レベルに見られる2, 3の問題. 広島大学教育学部紀要 第2部 44, 145-154.
- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版.
- Skaff, M. & Pearlin, L. 1992 Caregiving: Role engulfment and the loss of self. The Gerontologist, 32, 656-664.
- 鑓幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1995 アイデンティティ研究の展望Ⅱ ナカニシヤ出版.
- 鑓幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1997 アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版.

第 5 章

ケアすることによるアイデンティティ 発達に関する研究Ⅱ

---介護体験を通じて見られる老いと死の受容プロセスの分析---

1. 問題および目的

「ケアすることによるアイデンティティ発達に関する研究Ⅰ」において、高齢者介護によって介護者の側に成長・発達感が体験されること、そして介護体験による成長感は、介護者による要介護者の人生の受けとめ方や介護者自身のアイデンティティと関連性が見られることが示唆された。この介護役割を担うことによる成長感は、決して短いとは言えない介護期間を通じてどのように獲得、達成されるのであろうか。研究Ⅱでは、介護者の介護役割や老いと死の受容による成長・発達のプロセスについて検討することを目的とした。

2. 方法

(1)調査対象者：

研究Ⅰの調査対象者のうち、ひきつづき面接調査にも応じてくださった在宅介護者10名。調査対象者のプロフィールは、表1. に示した。

(2)手続き：

個別の半構造化面接調査を行った。面接調査は、各々の対象者の都合に合わせて、各対象者の自宅を訪問し、個別に約2時間をかけて行った。面接の内容は、①介護の状況、②介護者自身の、介護するようになる前、介護期初期、中期、後期における身体的、精神的変化について、③要介護者の介護が必要になる前、被介護期初期、中期、後期における身体的、精神的変化、およびすでに亡くなっておられる人に対しては、その最期の様子、④介護期を通して見られる介護者と要介護者の心理的關係について、である。

面接調査は、すべてテープレコーダーに録音され、逐語録を作成した。それらの逐語録をもとに、介護前、介護初期、中期、後期および現在における、①要介護者の状態、②介護者の状態・介入・行動、③介護者の心理的变化のプロセス、について分析した。

表1. 調査対象者のプロフィール

事例 No.	介護者					要介護者				質問紙調査の得点 (研究I)					
	性別	年齢 (歳)	同居 家族	介護 年数 (年)	健康 状態	続柄	年齢 (歳)	病因	症状や 痴呆の 程度	介護 感情 (点)	要介護 者への 接し方 (点)	要介護 者の人生 受け止方 (点)	介護者の アイデン ティティ (点)	古い への 感情 (点)	成長 発達 感 (点)
1.	女	59	母	13	普通	実母	80	脳卒中	寝たきり 痴呆なし	H (28)	H (41)	H (28)	L (26)	H (45)	H (49)
2.	女	53	夫 母	4	普通	実母	80	脳卒中	寝たきり 痴呆重度	H (29)	L (22)	M (25)	H (41)	H (60)	H (55)
3.	男	68	妻 父母	13	不良	実父 実母	82 79	老人性 痴呆	父母とも 寝たきり 痴呆重度	L (17)	M (28)	M (20)	H (40)	L (29)	H (54)
4.	女	55	夫 母	4	普通	実母	-	骨折	寝たきり 痴呆重度	M (20)	H (35)	M (21)	M (32)	L (29)	H (48)
5.	男	70	妻	2	不良	妻	71	高血圧 症	寝たきり 痴呆重度	L (18)	(-)	(-)	L (18)	M (38)	L (36)
6.	女	49	夫,母 子供 2人	3	普通	義母	85	骨折	寝たきり 痴呆重度	L (16)	L (26)	M (26)	H (39)	L (30)	M (41)
7.	女	52	夫,母 子供 2人	15	普通	義母	82	高血圧 糖尿病	寝たきり 痴呆重度	L (19)	L (25)	L (20)	L (24)	L (32)	M (45)
8.	女	60	母	1.5	良好	実母	88	脳卒中	寝たきり 痴呆なし	H (34)	M (33)	M (22)	M (34)	L (34)	H (55)
9.	女	64	夫 母	3	普通	義母	93	老衰	寝たきり 痴呆軽度	M (22)	M (29)	M (22)	H (42)	M (39)	H (48)
10.	女	65	夫 母	6	良好	義母	92	癌 老衰	寝たきり 痴呆なし	M (24)	H (37)	H (27)	H (39)	M (40)	M (46)

(注) H:平均得点より3点以上高得点を示す。L:平均得点より3点以上低得点を示す。

3. 結果および考察

以下に、各々の事例の概要を紹介した上で、その介護状況と心理的变化のプロセスをまとめた。

(1)事例1. の介護状況と心理的变化のプロセス

【事例1】の概要

Jさんは59歳の主婦である。80歳になる実母を介護して現在、13年になる。Jさんは、母親を本格的に介護するようになる少し前、ある事情で離婚し、それ以後親と同居生活を送っていた。母親は脳卒中で、回復の兆しは見られない。現在、母親との2人暮らしである。

4年前までは、母親の介護はそれほど困難ではなかった。Jさんは1カ月に3、4日、実家を訪れて母親の世話をしていたが、その頃から母親の高血圧が悪化し、また腰も悪くなり、手術をすることになった。ところが、その手術中に母親は脳梗塞をおこし半身麻痺の状態となる。「手術などしなければよかった」とJさんは悩み悲しんだ末、その時から母親のそばで面倒を見ることを決心した。

Jさんは長女で兄弟は皆、男であった。Jさんはちょうどそのころ離婚し、実家にもどってきていた。「兄弟は皆結婚して、子育てや仕事で忙しいから、私が一番身軽なので」自分が介護することが決まっていたかのように自然に引き受けたという。母親は、娘が離婚して戻ってきたことを心配したが、父親はJさんと同居できるようになったことを大変喜んだということである。母親の状態は次第に悪くなり、車椅子のいる状態になり、しゃべることもできなくなっていった。Jさんは母親の急激な病状の悪化をうけとめることができず、病院を恨んだり悩みつづけた。

それから約一年後、Jさんはプラス思考で考えないと損だと思ふようになり、ようやく諦めがついたという。それから徐々に生活が明るくなっていった。母親のために住居を改造し、車椅子のままでするトイレ、段差のない自由に車椅子をつかえるスペースを作り、母親が生活しやすくJさんが介護しやすいようにさまざまな工夫を重ねた。母親は、麻痺していない左腕だけで刺子をして暮らした。1枚作るのに1カ月はかかったが、白い木綿の布に美しい模様を描き出すことができた。母親はそれを人に見せるのが好きで、大変うれしそうな表情をする。やがて体力が衰え、刺子ができなくなると、絵を描くようになった。Jさんによると、母親の状態は現在最も落ち着いているという。

Jさんは長い介護体験によって、人生観が変わったと語っている。忍耐力が付き、自分の精神的なコントロールがうまくなったという。自分の生き方や他者の生き方は、状況や状態によって変化していくことを深く認識し、それを受容できているようである。

事例1. Jさんの介護体験を通じての心の変化は、表2のようにまとめることができる。

(2)事例2. の介護状況と心理的变化のプロセス

【事例2】の概要

Kさんは、53歳の主婦である。80歳になる実母を介護しながら、夫との3人暮らしである。

表2. 事例1の介護状況と介護者の心理的変化のプロセス

	要介護者(母親)の状態	介護者(J)の状態・介入・行動	介護者(J)の心理的変化のプロセス
介護前	母親は高血圧症。夫との2人暮らしで、介護も主として夫がしていた。	Jは結婚して、親とは別居していたが、月に2、3日は実家に帰り、介護者である父親を助ける。その後、ある事情で離婚。	
初期	高血圧症が悪化し、腰が悪くなり、入院する。手術を受けるが、手術中、脳梗塞をおこし、右半身麻痺の状態です手術室から出てくる。 母親は在宅療養を望み、退院。	Jは、病院で付きっきりで看病する。母親から離れられない気持ち。疲労で倒れることもあった。 手術しなければよかったと思ひ、後悔する。 父親に楽をさせたいと、自分が実家にもどり、母親の介護をすることを決心する。	母親から「離れられない」気持ち、使命感。 手術室から出てきた母親を見て、強い衝撃を受ける(衝撃)。病院に対して怒りの感情を抱く(怒り)。手術を悔やみ、悲しみ、抑鬱状態になる(抑鬱)。
中期	3人暮らしになる。退院した母親は、娘との同居を喜び、片手で刺子をして暮らす。父親は、旅行や人の世話など、充実した生活を送る。	実家で母親の介護をする。 必要な時だけ母親の側にいるようにし、徐々に母親との適切な距離のとり方がわかり始める。家を介護しやすいように、増改築する。	手術から約1年後、あきらめ、母親の状態を受け入れる。プラス思考で考えないと損だと思い直し、お互いに不幸だと思わないようにした(消極的受容)。
後期	父親はその後、癌で20日の入院後亡くなり、母親とJの2人暮らしとなる。母親は夫の死を悲しみ、よく泣く。トイレに行く回数が増え、夜中に5、6回はJを起こす。 デイサービスを月3日のペースで利用し、入浴サービスを受ける。 刺子ができなくなり、絵を描くようになる。時には、自分の言いたいことが、Jに伝わらなくてもどかしく、Jにあたることもある。	Jは、父親の死を「いろいろな好きなことができてよかった」と受けとめる。母親の介護を一人でするようになり、ますます家を空けられなくなる。 母親の介護は、自分にとって「大切な仕事」と受けとめるようになり、ストレスがたまると友人への電話や友人の訪問でストレスの解消を図っている。	父親の死は「走り去っていったような」死であったが、死ぬ前に好きなことができてよかった。そのために自分のしたことはよかったと受けとめる(父親の死の受容)。 介護を自分の「大切な仕事」とし、自分の生き方を認められる(積極的受容)。 「少しでもよかったと思える最期にしてやりたい」という目標ができる(目標)。
現在	時々、けいれんや発作を起こすが、表情は次第に柔らかくなっている。 「ありがとう」という一言を喋ることができる。 来客を歓迎し、気配りができる。	家を空けることができず、日用品はすべて配達してもらおう生活である。 俳句作りを続けている。	長い介護の中で「命一つ預かっている」という自覚が生まれ、精神的に向上したと感じている。忍耐力がつき、「人生観が変わった」という認識が見られる。

以前は仕事をもっていたが、現在は介護のためにやめている。母親は、脳卒中で一日中、ベットの上で過ごし、排泄、食事、着替えなど日常のすべての面で介護を必要としている。回復の兆しはなく、また痴呆の症状も見られ、自分の名前や寸前のことを忘れるといった状態である。介護期間は、現在4年3カ月になる。

母親は、以前はある都市の繁華街で働きながら、1人でマンション住まいをしていた。痴呆のはじまりは、母親が娘であるKさんの名前を間違えて呼んだことである。痴呆はさらに進み、きれい好きだった母親は、掃除をしなくなりマンションは散乱状態となり、徘徊も始まった。Kさんは、母親を自分の家に引き取り介護することを決心し、仕事をやめた。自分が母親の世話をすることは、Kさんによれば、ごく自然の成り行きとして受けとめたという。しかしながらKさんは、以前の「大きくて強くて賢い母」であった母親とのギャップに驚く毎日であった。なんとか母親の痴呆を治そうと、あらゆる病院を回り、自然食品を食べさせ、毎日一緒に散歩をして体を動かし、良いと思えることはすべてやってみたという。しかし、母親の痴呆の症状は進んでいった。Kさんはどうしていいかわからず、ただ疲れ、心も体もボロボロの状態だった。「偉大なきれい好きな母親」がどうしてこんなに弱い人間になってしまったのかという衝撃と疲れから、Kさんは怒りっぽくなり、母親を叱ることもあり、絶望の毎日であった。

そのころ、在宅介護支援センターを知り、在宅介護のやり方を教わり、壁にぶつかっていたKさんに道が開けてきた。Kさんは介護を行うための知識が身につく、専門家の援助も受けられるようになり、余裕がもてるようになった。現在、Kさんは、母親の状態の後退を苦しめていない。母親の状態には、これまでの生きざまが現れているように思われるということである。現在寝たきりになった母親でも「今も私に人の生き方というものを教えてくれている」とKさんは語っている。

事例2, Kさんの介護体験を通じての心の変化は、表3のようにまとめられた。

(3)事例3. の介護状況と心理的变化のプロセス

【事例3】の概要

Lさんは、実母と実父を10年余りにおよぶ介護の末に看取った68歳の男性である。Lさんの父親は長く教員を勤め、几帳面な性格の持ち主であった。Lさんの家族は、Lさんの父親、母親、妻Mさんの四人で、Lさんには子供はいない。

父親が突然旅行に行くと言い出し、3日間の東北旅行が返ってきた時から、父親の痴呆は始まった。大金をおろしてなくしたり、徘徊も始まった。Lさんはその頃、まだ定年退職の前であり、昼夜を問わず徘徊を始めた父親を妻と交代で看ていた。Lさんは、父親の異変に気づきながらも、最初は「まさか自分の親が……。疲れているだけだろう」と、極力痴呆ではないと思おうとした。また近所や親戚の人々にも、父親の痴呆を気づかれまいとした。「親の恥ずべき行動を隠したい、近所に迷惑をかけたくない、そして昼夜なく徘徊されたんでは、こっちの身がもたない」という絶望的な気持ちになった。Lさんは、精神的にも消耗し「こんな状態がいつまで続くのか、早く終わってほしい」と、父親を叱ることもあった。

Lさんの妻Mさんは、愚痴もこぼさず、あまり丈夫でない体で舅の介護をつづけていた。

表3. 事例2の介護状況と介護者の心理的变化のプロセス

	要介護者(母親)の状態	介護者(K)の状態・介入・行動	介護者(K)の心理的变化のプロセス
介護前	几帳面な性格だった。子供達が自立した後は、ある都市で働きながら一人暮らしをしていた。	子育てを終え、夫と2人暮らし。職業に就いていた。	
初期	痴呆の症状が現れ始める。Kがそれに気づき、弟夫婦に伝えるが、信じない。徐々に痴呆が進み、家族や周囲の人々とトラブル。そのうち、自宅も掃除しなくなり、徘徊が始まる。	弟夫婦と相談し、夫の理解もあったため、Kが母親の世話をすることを決心する。母親の介護のため、退職。「遊びに来るように」と偽って、母親をKの家に呼び、母親との生活が始まる。	母親の痴呆は信じがたく、「潔癖で強い偉大な母親」としか、考えられない(衝撃と否認)。
中期	痴呆が進み、徘徊が頻繁になる。以前住んでいた家に帰るといつてきかない。鍵をかけると「家から出してくれ」と大声で叫ぶ。胸が苦しいといって泣いたり、瞬時に気分が変わり、「ごめんね」といったりする。	何としてでも母親を、以前のしっかりとした母親にもどそうといういろいろな病院を回るなど、母親の痴呆を回復させるためにあらゆる努力をする。	「大きくて強い母」と現実の母親とのギャップに驚く。「50年の空白を埋めるのに大変だった」(衝撃)。母親の痴呆は絶対に治ると信じ、症状は一時的なものだと考える(否認)。病院の若者優先の態度に怒り(怒り)。今後の介護の目処が立たず、日々、やみくもに過ごす。強い疲労感(抑鬱)。
後期	時々、デイサービスやショートステイに行く。次第に表情を表すことが少なくなる。	在宅介護支援センターを知り、介護に関する情報や知識が徐々に増える。デイサービスやショートステイを利用することにより、自分の時間ももてようになる。	介護に関する知識が身につく、自信がもてるようになる。母親の存在を非常に近く感じられる。母親の人生をふり返り、母親の人生を認め感謝する。母親の現状は「なるべくしてなった」と受けとめ、寝たきりでも「私に人生を教えてくれている」と感じる(受容)。
現在	足が悪くなり、体力も衰え、ほぼ寝たきりとなる。ほとんど無意識のような状態で、表情は表さない。	毎月1回、ショートステイを利用し、温泉やカラオケに行くという生活パターンができる。	介護が楽しくなり、「献身的に生きる」という自分に対する目標が生まれる(目標)。

Lさんは、自分の親であっても怒りを感じるのに、妻はどうして文句ひとつ言わず、舅の世話ができるのかと、妻の献身と忍耐強さに驚嘆する日々であった。そのうち、母親も夫の介護の疲れで入院することになり、昼間の父親の世話はMさんの肩にかかってくる。Lさんは妻の健康を案じて、気晴らしのため、夜に開かれる俳句の会に参加するように勧める。Mさんはそれが楽しみになり、どんどん句作の腕前も上がって行った。そのころから、Mさんは、舅にとって「嫁」ではなく「母親」という存在になって行った。「母ちゃん、母ちゃん」とMさん呼び、Mさんは自分が本当に舅の母親になったような気持ちになったという。舅はそれから3年後に亡くなった。

Lさんの母親は、夫の死のしばらく前に退院して自宅に戻っていたが、夫の死に対して何の反応も示さなかった。そのころから、母親にも痴呆が始まり徘徊を始めた。Lさんは心身共に疲れるが、父親の介護によって痴呆の実態を知っていたため、母親の時にはがっかりしながらも母親の徘徊に付き合い、繰り返しの言葉を忍耐強く聞いてやれるようになっていた。母親が寝たきりになったとき、「やれやれ、やっと楽になった」と感じたという。それから1カ月後、母親は亡くなった。Lさんは、「こんなに早く亡くなるとは思っていなかった。すまないことをした」と感じる。

Lさんは現在、痴呆の親の介護という同じ体験をしている人に、自分の経験を役立てたいと、痴呆をかかえる家族の会の相談員をして働いている。

事例3, Lさんの介護体験を通じての心理的变化のプロセスは、表4のようにまとめられた。事例4~10の詳細は、本稿では省略する。

表4. 事例3の介護状況と介護者の心理的变化のプロセス

	要介護者(父親)の状態	介護者(LとM)の状態・介入・行動		介護者(LとM)の心理的变化のプロセス	
		L(息子)	M(Lの妻)	L(息子)	L(Mの妻)
介護前	几帳面な性格。教師を退職し、農業に携わっていた。	中学校の校長として在職。	専業主婦。		
初期	突然、一人で旅行に出掛け、3日後に帰宅。痴呆の症状が始まる。徘徊が始まり、大金を下ろしてはくしたり、絶えず空腹を訴えるようになる。几帳面な性格にも変化が見られる。	父親の異様な行動を近所の人々に見られまいとする。	自分が世話するのが当然だという気持ちで介護する。舅の言動をすべて夫に報告するが、愚痴は口にしない。	父親の異様な行動に衝撃を受けるが、疲れだろうと思ひ痴呆の症状とは考えもしなかった(衝撃)。痴呆とわかった後も、自分の親がそうなったとは思いたくない(否認)。	
中期	近所の人々に「うちの嫁さんをいじめてくれるな」と言ったり、息子がよく怒ると訴えたりする。しばらくすると、家に閉じこもるようになり、同じことを何度も繰り返す。昼と夜が逆転してトイレの場所もわからなくなる。Mを「お母ちゃん」と呼ぶようになる。	父親の言動を許せず怒る。父親を家から出さないようにし、近所の人々から非難される。痴呆に関する情報を集め、老人性痴呆症者の家族の会があることを知る。	舅の母親になったように接する。夫の勧めで、俳句を始める。	イライラが続く。「これがいつまで続くのか、こちらが先にまいってしまふ、早く終わってほしい」と感じる(怒り)。近所の人々の声がつらく、痴呆の症状も進む一方で、ただただつらかった(抑鬱)。	「介護を苦に思わないようにしている」

表4. (cont' d)

後期	人の言うことが少しは理解できるようになる。その後、死に至る。			「近所にやっと迷惑がかからないようになった。父親が恥をかくことがなくなってよかった」と思う。	
	要介護者(母親)の状態	介護者(LとM)の状態・介入・行動		介護者(LとM)の心理的变化のプロセス	
		L(息子)	M(Lの妻)	L(息子)	M(Lの妻)
初期	夫の介護疲れで入院していたが、夫の最期の別れのために退院。このころから痴呆の症状が現れ始める。夫の死に対して「ふーん」としか反応せず、「里へ帰る」と1日に6, 7回も往復するようになる。	母親の徘徊の後をつける。母親のわけのわからない会話も聞いておられるが、時々、不満をもらす。		痴呆の状態はわかっていながらも、「なんで自分の親がしかも2人とも」と思い、がっかりする(否認、抑鬱)。	
中期	同じことを何度も繰り返す。ショートステイを利用するが、徘徊がひどく、2, 3日以上は預かってもらえなくなり、痴呆専門施設へ入所する。足が悪く寝たきりとなる。	疲れで寝込む。 ショートステイに母親を預かってもらい、自分たちの体力回復に努める。 痴呆専門施設に預け、1日交代で施設に通う。		施設に行くときは、罪責感にかられる。 「やれやれやっと寝たきりになってくれて楽になった」と思う。 「施設でどうしているか。迷惑をかけていないか」と心配する。母親を思う気持ちが強くなる。	
後期	寝たきりになって1カ月後、息を引き取る。			「これほど早く亡くなるとは思いませんでした。すまないことをした」という後悔や罪責感にかられる。	
現在		老人性痴呆症者の家族会の相談員を務め、介護をしている人々の援助に多忙な日々を送っている。		他の介護者に対して、自分の体験を語る(受容)。自分の体験を他の人々にも役立てたいと考える(昇華)。	

(4)介護体験による老いと死の受容のプロセス

本研究の10名の調査対象者の介護体験にともなう介護役割、老いと死の受容のプロセスには、図1.のような共通の特徴が見出された。

まずはじめに体験されるのが、「衝撃」の段階である。「衝撃」は、要介護者の老いに対して衝撃を受ける段階である。その程度は、事例によってさまざまである。その後、親の老いていく姿や、親の身体的な症状を「否認」する段階が訪れる。症状に対して自分なりの解釈をして、回復可能な病気のせいだと思おうとしたり、「まさか、うちのおばあちゃんが……」と信じようとしなかったり、いくつも病院をまわったり、隠そうとしたりする。しかし、回復の兆しがなく、ごまかしきれない症状がはっきりと現れた時、あきらめ、怒りや抑うつが現れる。「怒り」は、要介護者本人に向けられたり、他の家族メンバーや親戚、病院であったりする。

次に訪れるのが、「抑うつ」の段階である。このままではだめだと感じていながら、全く見通しが立たず、絶望で自分自身が押し潰されそうになる。そしてこの時期から、親の老いの受容に達するまでが最も困難な時期であり、親の老いと死の受容のプロセスの中で、一つの関門であるともいえよう。

この時期に、家族だけで介護することがいよいよ限界に達し、親を施設に預けた人々も見られた。また、要介護者の状態が悪化し、入院や死に至った場合もあった。あるいは、要介護者以外のもう1人の親や、身近な人の死に遭遇する場合も見られた。このような身近な人の死や別離の体験は、老いと死の受容プロセスの中

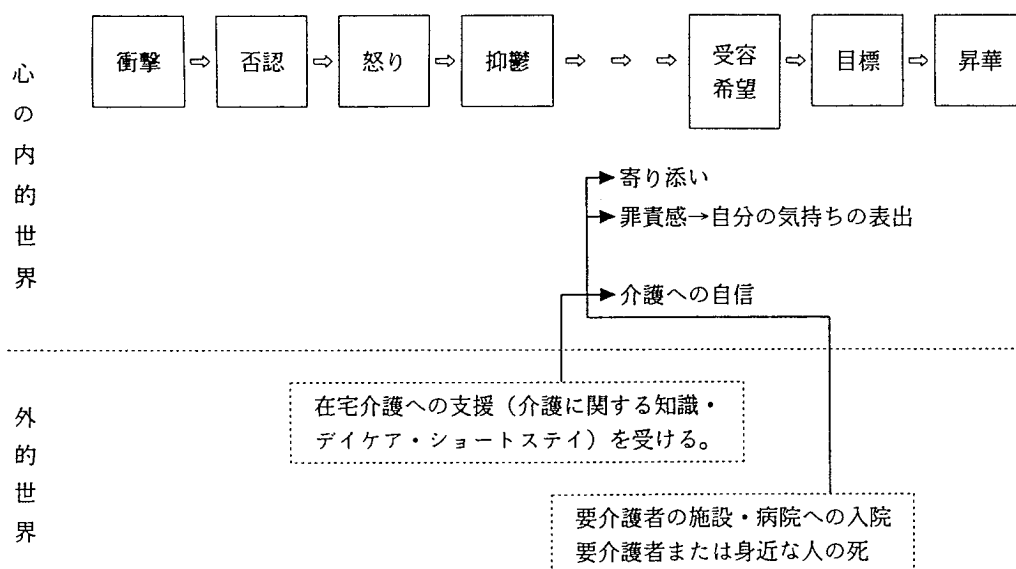


図1. 介護者による老いと死の受容のプロセス

でひとつのターニング・ポイントになるようである。この体験によって、家族は死と直接的に向き合うことができ、心の中で、自然な死というものを受け入れることができるようになる。

肯定的な気持ちで介護を行うためには、死の受容と老いの受容の両方が必要である。介護者が、老いの受容と死の受容の両方が体験できていた場合には、介護の身体的、精神的な辛さの中からも、その後の目標や希望が生まれてくる。しかし、介護者が親の老いの受容ができないままに、親が亡くなった時には、その後も老いに対する感情は否定的なままであることが多い。

また、身近な人の死や別離を体験したことによって要介護者に心から寄り添おうとする場合も見られた。要介護者が入院して物理的に離れて後、心はかえって近くなるという場合も多い。また、要介護者が介護者に「甘える」形で寄り添おうとする場合も見られた。これは、痴呆の人にも見受けられた。この「寄り添い」と「受容」の段階とは大変近く、このように要介護者を思う気持ちが強くなってからの「受容」は比較的容易である。

また、親が亡くなったことについて、「自分のせいだ」、「自分が……しなかったら」と、自分を責め、罪責感を抱く人々も見られた。自分のことを、しっかりとした強い存在であると感じている人ほど、この気持ちは大きいようである。その罪責感を心の外に表出してはじめて、親の死と現在の自分を受容することができる。今まで、親に対して十分に介護できなかったことはそのまま受けとめ、親の介護者として自分がやってきたことの意味が感じられた時に、この受容感が獲得されるようである。否定的な気持ちをもつことは自然なことだと思えること、そしてそれを心の外に表出することは、受容が行われるためには、大変重要なことであると考えられる。

介護者の体験する受容には、①介護役割の受容、②要介護者の症状や老いの受容と、介護者自身の老いを含めたより広い意味での老いの受容、③死そのものの受容、④介護をしている(していた)環境の受容 などさまざまな次元が存在する。そして、このような「受容」の段階に至ると、その後、希望や目標が生まれてくる。中には、事例3のLさんのように、自分の体験を他人に生かそう考えた人々も何人も見られた。これは、「昇華」と呼ばれるものである。ここに至って、介護者は自分の体験したことの意味を確認し、自分自身の成長を感じとることができる。そしてそれは、自分の親だけでなく、他の人々にも役立つ体験として介護者自身を支えていくことになるのである。

本研究で見出された介護者の老いと死の変容プロセスは、キューブラー=ロス(Kubler-Ross, E., 1971)の末期患者の「死に行く過程のチャート」と非常によく類似している。このことは、介護される人が、いよいよ老いが進み、死を迎える

という局面にあるとき、それを支える介護者自身もまた、自己の変容を迫られる転機にあることを示唆しているのではないであろうか。私たちの研究によってまた、介護者が体験する「衝撃→否認→怒り→抑うつ」という段階と、要介護者が体験するその段階は並行して進んでいくことが認められた。つまり、要介護者が自分の老いに対して衝撃、否認、怒りの感情を表すとき、介護者もまた衝撃を受け、否認し、怒りの状態を示したのである。しかし残念ながら、痴呆の症状の見られた人々では、「抑うつ」、「受容」、「昇華」の段階は見出せなかった。それは、要介護者の痴呆の症状が進んで、自分のことがわからなくなったり、病状の悪化によって感情表現が不可能になっていくことにより、老いの受容できているのかどうか、介護者にも調査者である筆者にもよく認識できなかったからである。

本研究によって、介護者の心の変容プロセスが、要介護者の心理に深く影響していることが示唆された。おそらく人生最後の、しかも最大の課題である老いと死の受容は、死に直面した高齢者本人と、それを介護し看取るものの中で、相互に影響を及ぼし合いながら達成されていくものであると思われる。

我々のライフサイクルは、死をもって完結する。人生の初期と最晩年には、我々は他者の世話を受けて生きる。まさにこの時期の生は、自分にとって重要な他者との深い相互作用のうちに営まれることになる。我々のアイデンティティもその他者による支えによって変容して行くのではないであろうか。一方、世話する側もまた、この時期は子供である乳幼児や、親である高齢者の生と死に直にふれつつ、自らの人生を見つめ直すプロセスでもある。これまで見てきた介護のプロセスの中で介護する側に獲得された心の資質は、自分自身の心の発達そのものを意味するものであったにちがいない。ケアすること、自分のもてる力を重要な他者に注ぎ込むことによって発達していくアイデンティティの局面があることをこれらの事例は教えてくれているように思われる。

この研究は、他者をケアすることがアイデンティティの発達にどのように寄与するのかという問題を考えていくための手がかりとして行ったものである。したがって本研究で見出された「介護体験による老いと死の受容プロセス」が、どの程度一般的なものであるかは、さらに多くの事例を検討していく必要があるだろう。

引用文献

Kübler-Ross, E. 川口正吉(訳) 1971 死ぬ瞬間 読売新聞社.

第 6 章

成人前期から老年期における自律達成的価値 と愛着関係性価値の発達、統合について

1. 問題および目的

人間の一生は、1. 児童期と青年期 0～20歳前後 2. 成人前期 20歳前後～40歳前後 3. 中年期（成人中期） 40歳前後～60歳前後 4. 老年期（成人後期） 60歳以降と大まかに分けられる（Levinson 1978）。人間の社会的自立や生産性、効率性、強さの上昇に優先価値を置いていたLevinson以前の西欧近代の合理主義社会においては、中年期以降に起こる心理の変化は発達ではなく、個々の適応の問題と見なされ、この時期には心理学的発達はないと考えられていた。

近年、日本人の平均寿命は伸びて、65歳以上の老年人口の実数と割合が急速に増加し、平成8（1996）年には15.1%に達するほどの高齢社会となった。厚生省人口問題研究所の推計によれば、この人口構造の高齢化は今後さらに速度を速めながら、老年人口は平成12（2000）年には17.0%、平成37（2025）年には25.8%、約3244万人（国民の4人に1人の割合）となると推測され、この時点では、15歳から64歳までの生産年齢人口2.5人で1人の扶養が支えられることになると言われている。

また高齢化とともに疾病にかかる割合は高くなり、自立能力の低下、寝たきり老人、痴呆性老人の増加とともに、核家族化、女性の就労、配偶者との死別、介護する家族の高齢化などによる介護力不足から社会福祉や保健医療面で重大な社会的課題をかかえているのが現実である。また長期的には、社会の活力低下も懸念されている。

平均寿命の著しい伸びと老年人口の増加は、社会全体に対しても重大な影響を与えると同時に、子育て終了後あるいは定年退職後の生活の長期化は個々人のライフサイクルにも大きな変化をもたらした。

このような今日、我々はどのように生きてなら幸せな一生を送ることができるのか、どのように生きてなら、長い老年期が幸福なのか、生きていく限りより幸せに過ごすために、かつてのような生産主義や物質主義でも、また快楽主義でもなく、どのように生きてならよいのかを考えることは、高齢社会となった現在とても重要なことである。

成人発達研究の父と言われるC. Jung（1928）は生産性、機能性重視の1900年代前半からすでに人生後半の重要性に注目していた。すなわち彼は性別にか

かわりなく誰しも持つ人間存在の原理を男性性側面と女性性側面の2側面として述べ、人間の心理的成熟や幸福、自己実現、人生受容のためには人生の後半においてこれらの2側面を統合させ、補完する必要があることを指摘した。

この男性性側面と女性性側面の2つの発達、統合は成人前期以降の心理的变化によっていかなる意味を持ち、いかに人生の肯定感や幸福に影響を及ぼしているのか、男女でその様相は異なっているのか等現在まで実証的にはあまり明らかにされていない。

したがって筆者はこれらの問題を調査、検討することは、高齢社会となった今日必要であると考え、C. JungやP. Tournier (1979) にならい、人間存在の原理を他者の反応や外的統制によらない自律的行動、積極的な力の発揮、合理性重視、競争、独立などの概念で象徴される男性性側面としての「自律達成的価値」と、互いの人格の触れ合いや人間理解に重きを置き、他者の欲求や願望を満たそうとする優しさ、愛情、世話行為、いのちに対するいたわりの心などの概念で象徴される女性性側面としての「愛着関係性価値」の2側面として定義し、成人前期から老年期にこの2側面がいかに発達し、統合されていくのか横断的に検討し、成人後の心理的発達やより幸福な高齢社会の生活に必要な価値観について考察することにした。

2. 方法

【調査対象】岡山市在住の20~82歳の成人673人。(男279人、女394人)

【調査内容】自律達成的価値尺度22項目、および愛着関係性価値尺度16項目は、山本(1989)と伊藤(1993)の尺度を参考に、2側面に関する具体的意識のあり方を表現すると思われる項目を検討し、予備調査と因子分析を経て作成し、5件法で調査した。人生肯定感尺度は、角野(1995)の尺度のうち必要と思われる7項目を使用し6件法で調査した。以下に各尺度項目を示す。

Table1 調査対象者数の内訳と平均年齢

	20代	30代	40代	50代	60代	70-80代	計
男性	53	58	55	50	31	32	279
平均年齢	23.1	35.3	45.6	53.7	64.8	75.6	
女性	64	75	87	61	65	42	394
平均年齢	22.7	36.2	44.9	52.7	63.9	75.8	
計	117	133	142	111	96	74	673

自律達成的価値および愛着関係性価値の尺度項目

予備調査による因子分析結果

項 目		F1	F2	F3	F4
関 係 性 因 子	1. 人とのあたたかい心の交流を大切にしたい。	.724	-.013	-.048	.092
	2. 人を喜ばせたり人の幸せに少しでも役立つことがしたい。	.696	.058	.046	.102
	3. 子どもや弱者をいつくしみ、世話をしたい。	.653	.023	-.153	-.042
	4. 人の思いやりに触れて感激してしまうことがよくある。	.632	.116	.002	-.201
	5. 相手の気持ちや立場を進んで理解し受けとめたい。	.606	-.061	-.061	.320
	6. 自分の気持ちをありのままに話し人と分かち合いたい。	.588	.003	.045	-.152
	7. 悲しんでいる人を見ると平気ではいられない。	.577	.002	-.07-	-.008
	8. 人々と協調して生活するよう心がけている。	.569	-.129	-.003	.302
	9. 人に対し心のこもった態度をとるよう心がけている。	.556	.106	-.118	.321
	10. 進んで社会集団に溶けこみ人々と力を合わせて生きていきたい。	.517	.013	.135	.089
	11. 進んで人々の集まりに参加し楽しく生きていきたい。	.465	.026	.185	-.002
	12. 何かやろうとする時は必ず相手の気持ちを考える。	.451	-.244	-.087	.438
	13. 人の幸せや生活にはたいして関心がない。*	-.406	.012	.169	-.100
自 律 性 因 子	1. 一度決めたことでも、人から何か言われるとすぐ気持ちが揺らいでしまう。*	.188	-.639	.015	-.040
	2. 人が何と首おうが自分自身の考えに基づいて行動する。	-.114	.637	.074	-.021
	3. 自分の目標に向かって正面から立ち向かっていく方だ。	.188	.633	-.003	.158
	4. 何事にも勇敢にチャレンジしていく。	.179	.627	.094	.216
	5. 正しいと思うことは人に構わず実行する。	-.011	.690	-.007	-.129
	6. 自分の意見や権利をはっきり言うのにためらいを感じることが多い。*	.081	-.658	-.042	.124
	7. 納得できないことには妥協しない。	-.028	.542	.001	-.096
	8. すぐ弱音をはく方だ。*	.126	-.604	.073	-.147
	9. 自分の目標を実現するために見通しを持って前進する。	.145	.497	.165	.263
	10. 一度決めたことは最後までくじけずやり通す方だ。	.156	.494	.098	.266
	11. まわりの人に頼りやすく甘えたい気持ちが強い。*	.264	-.492	.100	-.171
	12. 人生の問題や悩みを積極的に理解し解決していく方だ。	.330	.487	.040	.027
	13. 自分は何をしたいか確かな目標を持っている。	.152	.467	-.037	.176
	14. 自分から進んで行動することは少ない。*	-.168	-.462	-.031	.033
	15. 独立心が旺盛だ。	-.145	.434	.197	-.020
達 成 因 子	16. 人を押しのけても出世したい。	-.136	.051	.741	.031
	17. 高い地位や名声を得る人間になりたい。	.061	.067	.710	.041
	18. 人に負けず優位に立ちたい。	-.081	-.155	.640	-.085
	19. 自分の力や才能を人に認めさせたい。	.058	-.012	.694	.016
	20. 仕事の成功、勝利を何よりも目指している。	-.037	.149	.684	.010
	21. 人の失敗を責めたり非難しやすい。	-.059	-.026	.439	-.376
	22. 相手の地位や肩書きに応じて自分に有利なように態度を変える方だ。	.055	-.288	.420	.044
既 成 因 子	14. 適切な行動が取れるよう冷静に考えて行動する方だ。	-.132	.219	.026	.573
	15. 相手にこまやかな心配りができる。	.362	-.018	-.016	.555
	16. 日常生活の細かいことに配慮できる。	.072	.148	.021	.489
因子の寄与率 (%)		13.14	12.42	7.31	5.15
累積寄与率 (%)		13.14	25.56	32.88	38.03

*は逆転項目

自律達成的価値 = 自律性因子 + 達成因子

愛着関係性価値 = 関係性因子 + 配慮因子

人生肯定感尺度項目

1. 私の人生は、すばらしい状態である。
2. できるなら、自分の人生を誰かの人生と取り替えたい。*
3. この先、人生に不満を持つようなことはきっとないだろう。
4. 私は、私の人生に満足している。
5. 私の人生は苦痛にみちている。*
6. 生まれてきたことに感謝している。
7. 私は大きな期待をもって、これからの人生を楽しみにしている。

*は逆転項目

3. 結果

Table2 自律達成的価値、愛着関係性価値、人生肯定感の年代別平均得点と(SD)、男女差、および分散分析結果

	年代	20代	30代	40代	50代	60代	70~80代	分散分析	分散分析
								年代差	性差・年代差
自律達成的価値 (t検定)	男性	69.87 (10.99)	66.76 (10.77)	70.40 (10.25)	70.16 (11.16)	71.58 (9.66)	70.19 (10.78)	F(5, 278) =1.11 n.s.	性差 F(1, 672) =48.39***
	女性	62.22 (11.24)	62.88 (10.90)	62.41 (11.58)	66.38 (9.93)	67.23 (10.33)	60.88 (11.85)	F(5, 393) =3.13 **	年代差 F(5, 672) =2.58*
	男女差	3.67 **	2.06 +	4.15 ***	1.83 n.s.	1.95 n.s.	3.43 **		交互作用F(5, 672) =1.26n.s.
愛着関係性価値 (t検定)	男性	53.43 (10.22)	55.41 (7.70)	57.09 (8.21)	61.02 (7.25)	62.58 (7.66)	65.81 (9.62)	F(5, 278) =12.40***	性差 F(1, 672) =33.52***
	女性	59.88 (6.75)	61.28 (6.62)	61.64 (6.57)	63.16 (6.61)	65.89 (8.02)	65.10 (7.66)	F(5, 393) =6.73 ***	年代差 F(5, 672) =20.73***
	男女差	3.18 **	4.68 ***	3.62 **	1.61 n.s.	1.90 n.s.	0.35 n.s.		交互作用F(5, 672) =3.01 *
人生肯定感 (t検定)	男性	27.47 (5.56)	29.83 (5.75)	30.22 (4.78)	32.46 (5.36)	30.77 (6.84)	32.63 (7.64)	F(5, 278) =4.85**	性差 F(1, 672) =0.53 n.s.
	女性	28.13 (5.48)	29.60 (6.39)	30.69 (5.40)	31.59 (5.84)	31.26 (5.04)	30.02 (7.95)	F(5, 393) =2.88 ***	年代差 F(5, 672) =6.43***
	男女差	0.64 n.s.	0.21 n.s.	0.52 n.s.	0.80 n.s.	0.35 n.s.	1.40 n.s.		交互作用F(5, 672) =1.12 n.s.

***:p<.001 **:p<.01 *:p<.05 +:p<.1

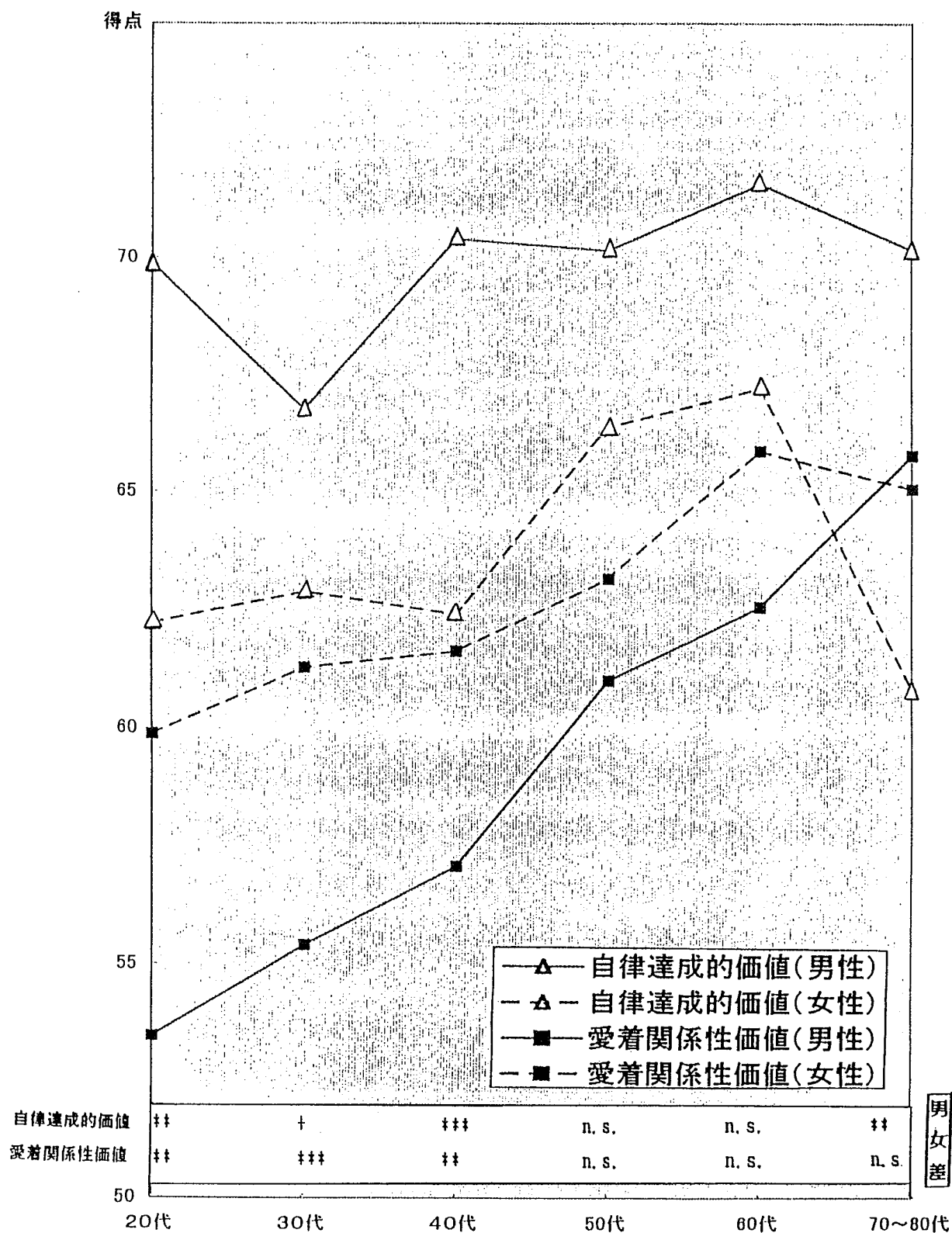


Fig.1 自律達成性価値と愛着関係性価値の年代別平均得点

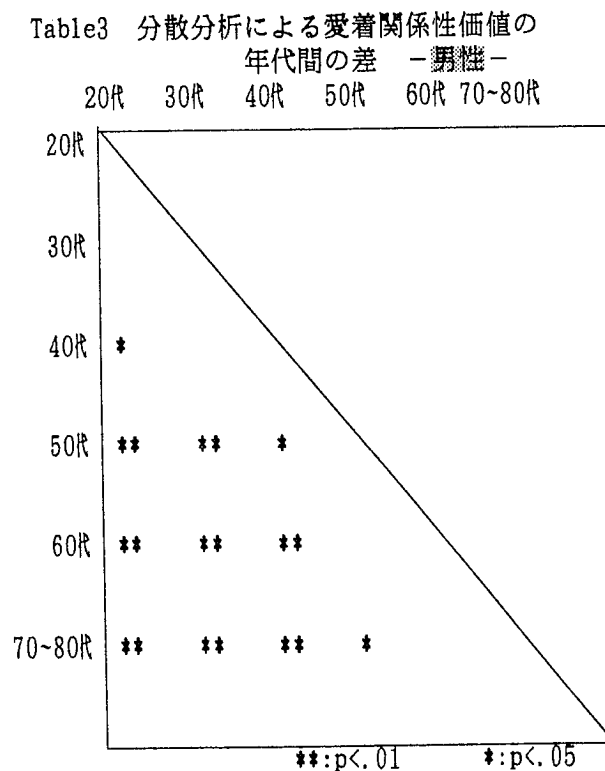
***:p<.001 **p<.01 +p<.10

(1)全体的には加齢につれ、自律達成的価値、愛着関係性価値、人生肯定感のいずれも得点の上昇が見られた。2価値の平均得点を比べると、概ね自律達成的価値では男性が、愛着関係性価値では女性が優位なことが認められた。(Table2) (Fig.1)

(2)性と年代を2要因とする分散分析の結果、自律達成的価値では性差と年代差に有意な主効果が見られ、愛着関係性価値では性差と年代差に有意な主効果と交互作用が見られた。(Table2)

(3)2側面の各年代の男女差をt検定で求めると、40代までは男女差が見られたが50代60代では男女差は見られなかった。(Table2)

(4)男女別に年代を1要因とする分散分析を行ったところ、男性では自律達成的価値に有意な差は見られないが、愛着関係性価値に有意差が認められた。(Table2) 下位検定の結果、男性の愛着関係性価値は人生前半と40代以降の人生後半の差が明らかであった。(Table3)



(5)女性では自律達成的価値、愛着関係性価値の両方に、年代を1要因とする分散分析結果有意差が認められた。(Table2) 下位検定の結果、女性の自律達成的価値は20代から40代はあまり差はない。しかし50代60代は高く、特に60代がピークで他年代との差が有意に見られた。(Table4) 愛着関係性価値は20代より上昇を続け、特に60代を境に他年代と有意な差が見られた。(Table5)

Table4 分散分析による自律達成的価値の年代間の差 - 表4 -

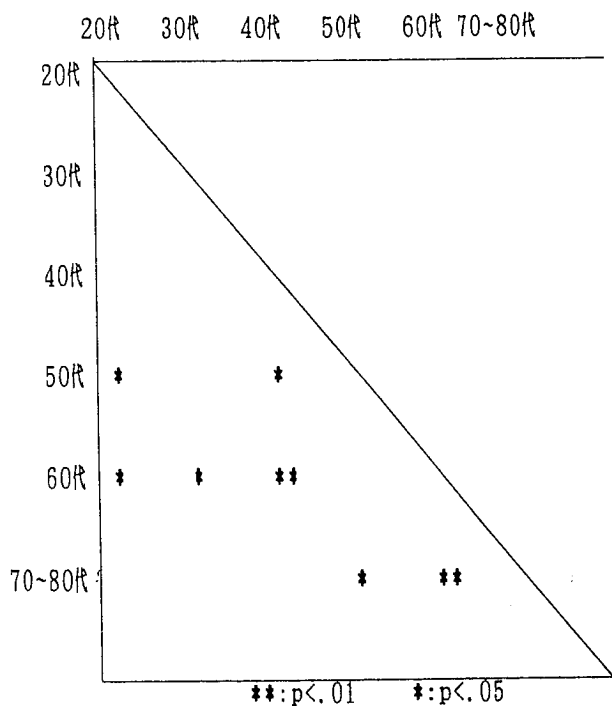
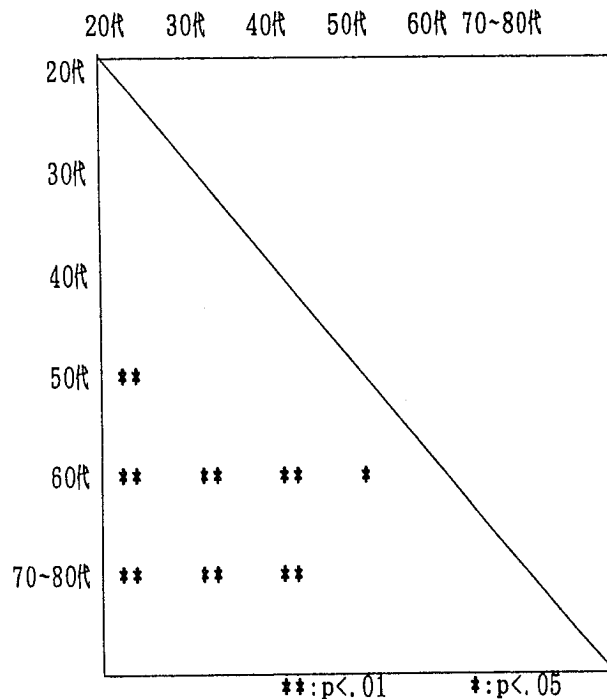


Table5 分散分析による愛着関係性価値の年代間の差 - 表5 -



(6)自律達成的価値と愛着関係性価値の相関を求めると、男性の20代30代、60代70~80代は相関が高い。全体的には、女性の方が一貫して有意な相関が見られた。(Table6)

Table6 自律達成的価値と愛着関係性価値の相関係数

		自律達成的価値					
		20代	30代	40代	50代	60代	70~80代
愛着関係性価値	男	.407	.250	.085	.110	.375	.568
		**	*	n. s.	n. s.	*	**
	女	.371	.297	.219	.423	.454	.419
		**	**	*	**	**	**

**:p<.01 *:p<.05

(7)自律達成的価値と人生肯定感の相関を求めると、男性では40代を除き、有意な正の相関が示された。女性では、40代50代に、有意な正の相関が示された。(Table7)

(8)愛着関係性価値と人生肯定感の相関を求めると、男性の場合、30代に相関は見られないが、40代以降両者の相関は一貫して見られた。女性の70代~80代にも両者の相関は見られた。(Table7)

Table7 自律達成的価値および愛着関係性価値と人生肯定感の相関係数

		自律達成的価値						愛着関係性価値					
		20代	30代	40代	50代	60代	70~80代	20代	30代	40代	50代	60代	70~80代
人生肯定感	男	.470	.414	.023	.377	.360	.337	.238	.131	.303	.338	.321	.390
		**	**	n. s.	**	*	+	+	n. s.	*	*	+	*
	女	.126	.100	.331	.238	.095	.338	.273	.179	.413	.343	.096	.283
		n. s.	n. s.	**	+	n. s.	*	*	n. s.	**	**	n. s.	+

**:p<.01 *:p<.05 +:p<.10

4. 考察

筆者は人間存在の原理を「自律達成的価値」と「愛着関係性価値」の2側面として捉え、成人前期から老年期に、両者がいかに発達し、統合するかという観点で心理的变化を調査、検討した。

今までの社会は成人前期を人生の頂点と見なし「より強く、より早く」という生産的、上昇的、課題達成的側面を重視し、評価してきた。しかし、今回の結果より、加齢につれ、自律達成的価値、愛着関係性価値、人生肯定感はいずれも概ね得点の上昇が見られることから (Table2 Fig.1)、人間は、成人前期で心の発達は完了せず、中年期、老年期を迎えても、心理的発達を続けることが示唆された。

概して、自律達成的価値は男性が、愛着関係性価値は女性が優位であった。そして、これら2価値は40代までは男女差が見られたが、50代60代には男女差が解消されたことは (Table2) 注目に値する。これは、男性では愛着関係性価値が年齢とともに上昇し、40代以降は、20代30代と大きな差が認められたことや (Table3)、女性では、50代60代に自律達成的価値が有意に上昇していること (Table4)、60代以降は男女とも自律達成的価値と愛着関係性価値の相関が高いことから (Table6) 裏付けられるが、男性は愛着関係性価値の発達が、女性は自律達成的価値の発達が重要な契機となり、中年期以降に人間の2側面のバランスが回復され、統合へ至ったものと思われる。

この結果は、Erikson が言うように、男性はまず自己確立やアイデンティティ獲得を成し、その後他者との関係性や親密性を育て、統合へ至ることを示唆していよう。また女性は男性とは逆のプロセス、あるいは2側面が並行して発達し統合へ至るというJosselson の説を支持するものであろう。

さらに、男性は40代以降、愛着関係性価値と人生肯定感との間に一貫して有意な正の相関が示された (Table7)。このことより、男性は中年期以降、愛着関係性価値がより発達し、自己の肯定感や存在感を支え、人生の統合にとってこの価値が重要な意味を持っていることが明らかとなった。

また男性の自律達成的価値は、70-80代も高値が維持され (Table2 Fig.1) 人生全般にわたり、概ね自律達成的価値と人生肯定感に有意な正の相関が認められている (Table7)。これらのことから自律達成的価値は、生涯生き方や自己肯定感に影響を及ぼし、老年期にも男性は自らの力を発揮し、自律的に生きようとする一方、他者との関係も重視し、相手を理解し援助する、人の役に立つなど新たな自己の存在価値を見出しながら、自律達成的価値と愛着関係性価値の2側面が統合されることが理解された。

女性の場合、老年期にも愛着関係性価値は高値を維持し、この価値は生涯を

通じて発達を続けることが示された (Table2 Fig.1 Table5)。また女性の50代60代は、自律達成的価値がより成長し (Table4)、40代50代は自律達成的価値と人生肯定感に相関が見られた (Table7)。これらのことは、子育てが一段落する中年期以降に、より主体として積極的に生き、自分らしさを確立して自己肯定感が高まる女性が多いことを示していよう。

さらに、女性の方が男性よりも、若い頃から自律達成的価値と愛着関係性価値の2側面がバランスよく発達していることが認められる (Table6 Fig.1)。これは、女性は若い頃から、他者に深く関与し、理解したり、世話する関係性の中で、相互発達の的に自己の主体的、自立的な生き方を見つけ育てていくことを裏付けるものであろう。

今回の調査より、人間は年齢が上がるにつれて自律達成的価値と愛着関係性価値がともに発達し、最終的には統合へ向かうこと、また高齢者の男女共通の価値観として、愛着関係性価値が重んじられ、自己の肯定感を支えていることが実証された。これらのことから、愛情、いたわりの心、他者の尊重、共感、人間の理解といった愛着関係性価値を成熟させながら生きていくことが、人間の幸福な人生、老年期のためには重要であることが理解された。このような関係性価値が十分認められ、育まれいきわたる社会こそ、現在すでに至った高齢社会に最も求められる姿であろう。

今後の課題として、さらに年を重ね、身体の機能、能力が衰え、一人では自立的な生活を営むことが困難になった時、人間は何から力や慰めを得るのか、存在価値を何に見出してゆくのか、考えていかねばならない。

[参考文献]

- 浜口晴彦 1997 エイジングの発見とその諸相 浜口晴彦 (編) エイジングとは何か 早稲田大学出版部
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究, 教育心理学研究, 41-3, 293-301
- ユング C. G. 1982 野田倬 (訳) 自我と無意識の関係 人文書院
- 角野善司 1995 人生に対する肯定的評価尺度の作成1, 日本教育心理学会第37回大会発表論文集, 95
- 国眼真理子 1994 女性らしさと自分らしさの間で 岡本祐子・松下美知子 (編) 女性のためのライフサイクル心理学 福村出版
- レビンソン D. J. 南博 (訳) 1992 ライフサイクルの心理学 (上) (下) 講談社学術文庫

- 村川浩一 1992 現代社会と高齢者 福祉士養成講座編集委員会（編） 老人
福祉論 中央法規
- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- 高橋恵子・波多野誼余夫 1990 生涯発達の心理学 岩波新書
- トゥルニエ P. 山口實（訳） 1981 女性であること—パーソナルな世界
の豊かさ ヨルダン社
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究, 教育心理学研究, 37
302-311

第 7 章

高齢女性の配偶者との関係性と 死別への準備性

1. 問 題

高齢期の結婚生活は概して円満であることや、高齢者の幸福感にとって配偶者の存在が重要であることは、すでにいくつかの実証的研究によって報告されている。逆に、配偶者の死は最もストレスフルなイベントとして位置づけられている (APA, 1988)。女性の平均寿命が男性に比べて長いことや、依然として男性が女性よりも年長の結婚が主流である今日、夫婦の死別場面は夫の死を妻が看取るパターンが圧倒的に多い。このような状況にあって、高齢女性は、日常生活において配偶者との死別の問題をどのようにとらえ、それに対処しようとしているのであろうか。

これまで、高齢者の自分自身の死については、心理的適応研究において一つの重要な指標として取り扱われてきている (Molinari & Reichlin, 1985)。しかしながら、心身ともに健全な者の死に対する意識を、夫婦関係の文脈の中で検討しようとする動きは、ほとんどみられなかったように思われる。配偶者喪失のテーマは、必然的に実際に死別の移行期に看取る側である者や、喪失後の生活適応を要する者に対して論じられることが多く、自己と配偶者ともに死期が迫っていない者を対象とした実証的研究は皆無に等しいといえる。しかしながら、死別への短期的・長期的適応の実証的研究から、生前の夫婦関係の重要性が指摘されている (河合, 1990; 岡村, 1992; 高橋, 1989)。無論、死別前の態度が実際の死別への対処の仕方をどれだけ予測するかを明らかにするには縦断的研究を要するが、本研究はプレ・ウイドウフード・エデュケーション (Deeken, 1995) や配偶者に先立たれた者への心理臨床的介入の方途に有益な示唆を提供できるものと考えている。

ところで、高齢期を配偶者と過ごす者の増加や離婚率の上昇は、単に結婚年数の長さだけを円満さや適応の指標と見るのではなく、そのプロセスの質についても議論する必要があることを示している。特に結婚生活を持続させる要因は、その質をとらえる上で注目されている。関係継続の意志を支える要因は、個人内に複数存在し、各要因の重要性は個々人によって異なる。それは生活をともにしている夫妻間であっても、異なる場合があると考えられる。

一つの主要な分析枠組みとして、関係継続の意志を支える要因に、配偶者とともに生きること自体の価値や親密なやりとりといった結婚の本質的要素があ

るか否か、に着目する動きが見られる（例えば、Robinson & Blanton, 1993; Weishaus & Field, 1988）。この本質的結婚は、離婚することの不利益性や子どもが存在、道徳といった外発的な動機づけとは質的に異なる。

宇都宮（1996a）は、本質的結婚を配偶者の存在を人格レベルから必要とみなし積極的に関与することであると考え、その発達モデル「関係性ステイタス」を提唱している。宇都宮（1996a）によれば、配偶者との関係性の様態は、人格的意味づけと積極的関与という2つの基準の組合せから、6つのステイタスを想定している（表1）。また宇都宮（1996b）は、高齢期有配偶者を対象とした実証的研究を行い、その構成概念妥当性を確認している。分析結果として、関係性達成型が他のステイタスよりも、高齢期の結婚生活とそれまでの夫婦人生の受容において最も適応的という結果を得ている。対照的に、関係性拡散型と献身的関係性型では不適応性が示されている。さらに、対象者の3割は表面的関係性型で、日々の結婚生活の中で配偶者の存在意味について主体的に探求する必要性を意識化できていなかった。配偶者との死別に対する準備性は、そうした関係性の質によって何らかの相違が見られるのであろうか。死別は究極的な別離であることから、本研究を通して配偶者との絆の本質に迫ることができ、その意義は大きいと考えられる。

表1 配偶者との関係性ステイタス（宇都宮，1996a）

	存在の意味づけ	積極的関与
(a)関係性達成型	模索体験あり →人格的肯定	している
(b)献身的関係性型	現在模索中 (アンビバレント)	している or しようとしている
(c)妥協的關係性型	模索体験あり →中立的	していない
(d)関係性拡散型	模索体験あり →否定的	していない
(e)表面的関係性型	模索体験なし (機能的肯定)	している
(f)独立的関係性型	模索体験なし (中立的)	していない

2. 目的と分析の視点

本研究では、高齢期における配偶者との関係性発達と死別に対する基本的態度の関連性について検討する。ここで、自己と配偶者ともに心身が健康な者を対象に死別に対する態度を検討する際に、当然のことではあるが視野に入れておかなければならないことを確認しておきたい。それは、自己と配偶者のうちどちらが先立つのか、すなわち自分が看取る側になるのかそれとも看取られる側になるのかはわからないという点である。どちらの場合にも遭遇する可能性があることから、両パターンを想定させた準備性を養っておくことが求められる。そうすることで、例えば配偶者に先立たれても、喪失にともなう生活構造の変容に、より柔軟に適応することができると思われ、同様に自分が死にゆく側で立たされても、配偶者を残すことへの心残りや不安を抱くことが軽減され、安らかな死を迎えることに寄与すると考えられる。

このことをふまえ、本研究では死別に対する基本的態度の特徴をとらえる上で、以下の分析の視点が有効であると考えた。それは、①自己と配偶者双方の死に対する意識、②夫婦における死の順序性とその背景的要因、③想定された死別場面での配偶者に対する言葉掛けである。

視点①からは、個人内における、自己の死と配偶者の死の意味づけ方や、両者の相違点あるいは関連性が把握できると考えられる。

視点②からは、夫婦内での死ぬ順序という問いに対する基本的姿勢が明らかにされると思われる。さらに、どちらかのパターン（「自分が先で配偶者が後」もしくは「配偶者が先で自分が後」）の記述に関しては、その選択を支えている要因の多様性を把握することができると考えられる。

最後の視点③では、死別が別離の決定的局面であることから、そこでの言葉掛けを通して、夫婦人生の意味づけの度合いや受容状況が明らかになると思われる。さらに視点②において、ある一定の順序パターンを示した者やどちらのパターンも選択しなかった者双方に対して、両方の死別パターンを想定させることで、死別の順序性に対する柔軟性を把握することが可能になると考えられる。したがって、本研究の具体的課題は、関係性ステイタスによって、これら3つの要因が異なる特徴を示すかを検討することにある。

3. 方法

(1)調査対象者

広島県在住で、自己あるいは配偶者のどちらか一方が少なくとも60歳以上か、結婚年数が30年以上の有配偶女性80名である。

対象者の基本的属性は、以下のとおりである。自分自身の平均年齢は65.4歳

(54～79歳の範囲)で、分布は60代が最も多く(55.0%)、以下70代30.0%、50代15.0%と続いていた。配偶者の年齢は平均68.8歳(57～81歳の範囲)で、50代5%、60代51.3%、70代41.3%、80代2.5%となっていた。結婚生活期間の平均年数は41.6年(12～55年の範囲)で、ほとんどの者が初婚であった(94.3%)。家族構成は、夫婦のみの世帯が過半数を占めていた(66.3%)。

(2)調査内容

以下の内容からなる質問紙調査を実施した。

①配偶者との関係性発達の様態：関係性ステイタスSCT(宇都宮,1996b)を実施した。これは人格的意味づけの達成状況に関する6項目(例「夫の存在は私の人生において、」)と積極的関与に関する6項目(例「私は夫と二人で、」)から構成されている。

ステイタスの分類は、宇都宮(1996b)の評定マニュアルにしたがって行い、総括して最も適切であると考えられるステイタス(関係性達成型、献身的関係性型、妥協的關係性型、関係性拡散型、表面的関係性型、独立的関係性型のいずれか)に位置づけた。この評定方法は、Marciaのアイデンティティ・ステイタス文章完成法に準じており、高齢期の配偶者との関係性を測定する上で有効であることが示唆されている。

②自己と配偶者双方の死に対する意識：SCT刺激項目「私は自分の死に対して、」と「私は夫の死に対して、」をもとに分析した。反応内容は、「死の意味に関する主体的探求」と「死の受容」という2つの観点に着目した。主体的探求の見られた者は、受容状況からさらに肯定的見解の「積極的受容型」、現在探求中の「模索型」、消極的受容の「あきらめ型」、否定的見解の「悲観型」に細区分された。一方、主体的探求の乏しい者は、問題の否認を示す「無自覚型」と死の意味について吟味する必要性を抱いていない「質的議論否定型」に分類した。評定基準と反応内容例は、表2に示すとおりである。

③夫婦における死の順序性とその背景的要因：SCT刺激項目「私は自分と夫の死ぬ順序について、」と「なぜなら、」の反応内容をもとに分析した。順序選択の背景的要因は、表3-4、5の評定基準にしたがって分類した。

順序選択を明確に示した者は、まずその根拠に心情が含まれているか否か(「客観推測的要因」)に着目した。さらに心情を含む記述に関しては、その要因を内的なもの(「人格充足的・情愛的要因」)と、外的なもの(「機能的・規範的要因」)とに区分した。

「人格的・情愛的要因」とは、自己(配偶者)の情緒的充足における配偶者(自己)の重要性や、看取りたい看取られたいとする背景に情愛性による強い

表2 配偶者との死別に対する態度の評定マニュアル④
(自己と配偶者の死に対する基本的態度)

- ①「私は自分の死に対して、_____」
②「私は夫の死に対して、_____」

タイプ	分類基準	反応内容例
1. 無自覚型	死について、これまで全く意識したことがないとと思われる記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・今のところ何も考えていない。 ・どういうことかわからない。 ・まだ先のこと。
2. 悲観型	死を自分(達)の問題として認知しているが、受容はできていないと思われる記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・不安でならないです。 ・いやです。 ・考えたくありません。
3. 模索型	死を自分(達)の問題として受け入れようと努めているあるいは、その意味を真剣に探求していると思われる記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・現在検討中です。 ・人生の最終的な課題です。 ・真剣に向き合うつもりです。
4. あきらめ型	死を自分(達)の問題とみなし、受容もしているが、真剣に探求しようとする姿勢や積極的な意味付けのみられない記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・しかたのないことだと思う。 ・のがれることのできない運命だと思う。 ・命あるものには必ず死が訪れる。
5. 質的議論否定型	そもそも死を議論することに価値を見いだしていない(問いの否定)、あるいは問いを受け入れていても望ましいとする死に方を淡々と示しているだけで、真剣な意味の探求がみられない記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・いつかは訪れると思う。 ・すべて神におまかせ。 ・できればポックリ死にたい。 ・ぼけずにさっとおわりたい。 ・周りから惜しまれるうちに死ぬのが理想。 ・考えても仕方がない。
6. 積極的受容型	死を自分(達)の問題として認知し、主体的に関わっており、死に対する心構えができていると思われる記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・いつ死んでも悔いはない。 ・恐ろしいとは思わない。素直に死んでいけると思う。 ・恐れを知らず安心して死を求めている。

表3 配偶者との死別に対する態度の評定マニュアル②
(夫婦における死の順序選択およびその根拠)

- ③「私は自分と夫の死ぬ順序に
に対して、 _____」
④「なぜなら、 _____」

※評定の前に…まずSCT③の記述内容を、「自分が先(1)」、「配偶者が先(2)」、「その他(3)」に分類する。



- ・SCT③で、明確な順序選択のあった者(1 or 2)は、SCT④の記述内容を下記の(a)明確な順序選択をした根拠によって評定する。
- ・SCT③で、明確な順序選択をしなかった者(3)は、SCT③の記述内容を下記の(b)明確な順序選択をしない根拠によって評定する。

(a)明確な順序選択をした根拠 (※SCT③で 1. or 2. に該当した者のみ)

タイプ	分類基準	反応内容例
1. 人格的・情愛的要因	どちらの順序選択(残る側/去る側, 看取る側/看取られる側)であっても, 夫妻のどちらかあるいは両方の幸福感を視野に入れた内発的なものである。2人の関係的文脈以外の要因に支配されていない。	<p><自分が先の場合></p> <ul style="list-style-type: none"> ・夫がいるから自由に思い切ったことができるし, 気ままにさせてもらえた。 ・夫のいない生活は考えられない。 ・私がいてできなかったことを思う存分やってもらいたい。 <p><配偶者が先の場合></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が夫を看取ってあげたい。 ・一年くらい後に自分も死ぬたらよい。 ・夫を一人残してはかわいそう。
2. 機能的・規範的要因	生活(物理的側面)の不便さや, 規範的役割意識など, 2人の関係的文脈以外の要因によって選択された外発的なもの。	<ul style="list-style-type: none"> ・社会の常識として, 男が先。 ・経済力や社交性などから考えて妥当。 ・何となく世間一般をみて。 ・自分が残ると周りの者が困るから。 [※逆の場合も]
3. 客観推測的要因	自己と配偶者が置かれた様々な現実状況を比較し, それに基づいて客観的に(希望的観測も含まれる)順序選択を行ったもの。	<ul style="list-style-type: none"> ・病気もち。 ・年齢からして自分が先だろう。 [※逆の場合も] ・平均寿命からいって男が先だろう。

注) ・配偶者に先立たれると「自分が困る」 → 要因2として評定する
私我先立つと「配偶者が困る」 → 要因1として評定する

- ・「この人は何もできない」から, 私が先に死ぬわけにはいかない
→ 要因1として評定する
- ・「男の人は何もできない」から, 私が先に死ぬわけにはいかない
→ 要因2として評定する

(b) 明確な順序選択をしない根拠 (※SCT③で3. に該当した者のみ)

タイプ	分類基準	反応内容例
1. 無自覚型	夫婦での死ぬ順序について、これまで全く意識したことがないと思われる記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・考えたことがない。 ・わからない。
2. 悲観型	夫婦で死の訪れる時期は異なると推測しながらも、どちらかが先に死ぬ(生き残る)という問題を直視できていない記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・できれば一緒にいきたい。 ・どちらが早くても嫌だ。 ・二人一緒ならいいのだけど。 ・考えないようにしている。 ・順序など考えたくない。
3. 模索型	夫婦での死ぬ順序について、真剣に考える必要性を見出だし探求している、あるいは相手の意志や立場を思うあまり自分が望ましいとする順序選択の明示に抵抗を感じている記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・現在考え中。 ・どちらともいえない。 ・自分が先にいきたい気もするが、逆の思いもある。
4. 質的議論否定型	そもそも死の順序性をを議論することに意味を見いだしていない(問いの否定)、あるいは問いを受け入れていても、死の順序にはこだわらないとする記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・考えてもしかたがない。 ・天の定め。 ・自然にまかせる。 ・こだわらない。 ・どちらでもよい。 ・順序など考えるのはナンセンス。

表4 配偶者との死別に対する態度の評定マニュアル③
(死別場面での配偶者に対する言葉掛け)

- ⑤ 「私はこの世に残った夫に言葉を掛けるとすれば、 _____」

⑥ 「私はこの世を去った夫に言葉を掛けるとすれば、 _____」

タイプ	分類基準	反応内容例
1. 過去の配偶者賞賛	過去の結婚生活、中でも配偶者が自分に対して行ってきたことに対して、労をねぎらった	<ul style="list-style-type: none"> ・お世話になりました。ありがとうございました。 ・色々ありがとう。心からお礼を言う。 ・長い間ご苦労様。感謝の気持ちで一杯です。

	り、感謝の意を示した記述。	
2.過去の自己反省	過去の結婚生活、中でも自分が配偶者に対してとってきた態度や自分の生き方全般を振り返り、反省や謝罪の意を表している記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと優しくして接してあげれば良かった。 ・我儘ばかり言って申し訳なかった。 ・いたらない妻でしたね。許してね。
3.死別後の事象	死別後の、亡くなった配偶者あるいは残された配偶者を心配している記述や、安心感を与えたり勇気づけている記述など、配偶者のことを気づかう内容。	<ul style="list-style-type: none"> ・のびのび生きてください【※自分が先】。 ・私の分まで長生きしてください【※自分が先】。 ・子どもたちに迷惑を掛けないで、元気に暮らしてください【※自分が先】。 ・私のことは心配しないでゆっくりお休みください【※配偶者が先】。 ・私の健康を守ってほしい【※配偶者が先】。
4.死別の否認	死を想定するという問い（場面設定）に対して否認を示す記述と、死の想定を受け入れたものの、配偶者との死別に直面し、その事実を否認しようとしている記述とが含まれる。	<ul style="list-style-type: none"> ・考えていません。 ・もう少し長生きしてもらいたかった。【※逆の場合も】 ・一緒にいきたかった。
5.関係永続性	死別し存在する世界が異なっても、配偶者はずっと心の中に存在し続けるといった“連続的永続性”と、残された方が将来死ぬことで、先立った配偶者と再会できるとする“非連続的永続性”の記述が含まれる。	<ul style="list-style-type: none"> ・（死んでも）あなたといつも一緒です。 ・後からいくよ。【※逆の場合も】 ・天国で待っていてね。【※逆の場合も】

※要因が複数みられるケースもあり

（例：「色々お世話になりありがとうございます
した。私の分まで長生きしてください。」 ←要因1と要因3が存在）

意志・願望（例えば、「自分はこの人に看取られたい」、「1年くらいあとに自分も死ねたらと思う」）を意味する。一方「機能的・規範的要因」には、配偶者（自己）が生活する上での自己（配偶者）の機能的役割（例えば、「配偶者にいなくなると不便だから」、「自分なら一人で生きていける」）や規範・義務意識（例えば、「女が（夫を）介護すべきだから」、「社会の常識として」）などが含まれる。なお順序選択のみられない者は、「無自覚型」、「悲観型」、「摸索型」、「質的議論否定型」に分類している。

④想定された死別場面での配偶者に対する言葉掛け：SCT刺激項目「私はこの世に残った夫に言葉を掛けるとすれば、」と「私はこの世を去った夫に言葉を掛けるとすれば、」に対する反応をもとに分析した。記述内容を吟味した結果、表4に示すように、「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」、「死別前の配偶者に対する自己のあり方の後悔や反省の記述」、「死別により逢えない（逢えなくなった）配偶者を安心させるあるいは支援する姿勢がうかがわれる記述」、「死別の想定あるいは（想定された）死別の事実を否認している記述」、「内在化により絆は存在しつづけるあるいは看取った側が死ぬことで再び絆は結ばれるという関係の永続性を示す記述」に分類された。なお、この項目では複数回答の場合がある。

評定の信頼性は、3名の評定者の一致率によって検討した。その結果、2名以上が一致した割合は、関係性ステイタス93.9%、自己の死に対する態度96.7%、配偶者の死に対する態度98.3%、夫婦における死の順序100.0%、順序選択の根拠97.8%、残った配偶者への言葉掛け98.3%、去った配偶者への言葉掛け96.7%であった。

3. 結果と考察

(1)関係性ステイタスの人数分布

本研究の対象者のステイタスは、関係性達成型23名（28.8%）、献身的関係性型7名（8.8%）、妥協的關係性型12名（15.0%）、関係性拡散型9名（11.3%）、表面的関係性型26名（32.5%）、独立的関係性型3名（3.8%）となっていた。独立的関係性型は3名と人数が少なかったため、一般的傾向の分析には含めるが、ステイタス間の比較では分析対象から除外することとした。

(2)自己と配偶者の死に対する意識（表5～表7）

①一般的傾向

まず、自己の死に対する態度では、最も多くを占めていたのは質的議論否定型であった（全体の約3割）。以下、積極的受容型（17.5%）、悲観型（16.3%）

と続いていた。一方、配偶者の死に対する態度では、自己のそれとは異なり質的議論否定型の割合が少なくなっており（20.0%）、様々なタイプに分散していた。

ここで、これらの反応内容を死を受容できているか否かという視点から、自己と配偶者の死に対する態度の組み合わせに着目した。なお、本分析で非受容的記述とされたのは、これまでの人生で死の問題を積極的に考えることのなかった「無自覚型」と、突然に死の宣告を受けた場合、不適應の様態を示すことが予想される「悲観型」である。その結果、どちらの死に対しても非受容的記述の示さない者の割合が、他の組合せに比べて非常に高く、これだけで全体の半数近くを占めていた。

自己の死に対しては、積極的受容型と質的議論否定型の割合からみて、比較的自然体で受容する傾向がうかがわれる。対照的に、配偶者の死に対しては個人差が大きかった。特に無自覚型と悲観型の割合から、自分の死とは異なり配偶者の死は、現実のものとして受け入れることが困難であると推察される。自己と配偶者の死に対する態度の組み合わせでは、対象者の約半数が「ともに非受容的記述なし」に分類された。こうした態度の一貫性は、概して女性が自己の死について吟味する際、配偶者の死も視野に入れる傾向が強いことを示唆しているのかもしれない。

表5 各ステータスの、自己の死に対する基本的態度

	無自覚	悲観	模索	あきらめ	議論否定	積極受容	無回答
全 体 n=(80)	8 (10.0)	13 (16.3)	6 (7.5)	7 (8.8)	26 (32.5)	14 (17.5)	6 (7.5)
関係性達成型 n=(23)	3 (13.0)	2 (8.7)	1 (4.3)	2 (8.7)	7 (30.4)	7 (30.4)	1 (4.3)
表面的関係性型 n=(26)	4 (15.4)	6 (23.1)	1 (3.8)	3 (11.5)	7 (26.9)	3 (11.5)	2 (7.7)
献身的関係性型 n=(7)	1 (14.3)	1 (14.3)	2 (28.6)	1 (14.3)	2 (28.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
妥協的關係性型 n=(12)	0 (0.0)	2 (16.7)	2 (16.7)	0 (0.0)	3 (25.0)	3 (25.0)	2 (16.7)
関係性拡散型 n=(9)	0 (0.0)	1 (11.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (66.7)	1 (11.1)	1 (11.1)

表6 各ステイタスの、配偶者の死に対する基本的態度

	無自覚	悲観	模索	あきらめ	議論否定	積極受容	無回答
全 体 n=(80)	13 (16.3)	17 (21.3)	6 (7.5)	9 (11.3)	16 (20.0)	12 (15.0)	7 (8.8)
関係性達成型 n=(23)	5 (21.7)	5 (21.7)	4 (17.4)	2 (8.7)	0 (0.0)	6 (26.1)	1 (4.3)
表面的関係性型 n=(26)	5 (19.2)	8 (30.8)	1 (3.8)	3 (11.5)	5 (19.2)	1 (3.8)	3 (11.5)
献身的関係性型 n=(7)	1 (14.3)	2 (28.6)	0 (0.0)	2 (28.6)	1 (14.3)	1 (14.3)	0 (0.0)
妥協的關係性型 n=(12)	1 (8.3)	1 (8.3)	1 (8.3)	1 (8.3)	4 (33.3)	2 (16.7)	2 (16.7)
関係性拡散型 n=(9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (66.7)	2 (22.2)	1 (11.1)

表7 各ステイタスの、自己と配偶者の死に対する基本的態度の組合せ²⁾

	ともに非受容 的記述なし	自己の死のみ 非受容的記述	配偶者の死のみ 非受容的記述	ともに非受容 的記述あり	無回答
全 体 n=(80)	37 (46.3)	6 (7.5)	17 (21.3)	13 (16.3)	7 (8.8)
関係性達成型 n=(23)	10 (43.5)	2 (8.7)	7 (30.4)	3 (13.0)	1 (4.3)
表面的関係性型 n=(26)	9 (34.6)	1 (3.8)	6 (23.1)	7 (26.9)	3 (11.5)
献身的関係性型 n=(7)	3 (42.9)	1 (14.3)	2 (28.6)	1 (14.3)	0 (0.0)
妥協的關係性型 n=(12)	7 (58.3)	1 (8.3)	1 (8.3)	1 (8.3)	2 (16.7)
関係性拡散型 n=(9)	7 (77.8)	1 (11.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (11.1)

注. ここでは無自覚型と悲観型の反応内容を非受容的記述としている。

②ステイタス比較

自己の死に対する態度では、関係性達成型は死に対して動じないタイプ（積極的受容型と質的議論否定型）だけで6割を占めていた。特に、積極的受容型の割合は他のあらゆるステイタスよりも多くみられた（30.4%）。表面的関係性型は、質的議論否定型と悲観型で半数を占めていた。献身的関係性型と妥協的關係性型は様々なタイプに分散していた。関係性拡散型は、質的議論否定型に6割以上の者が該当していた。

配偶者の死に対しては、関係性達成型で最も多くみられたのは積極的受容型（26.1%）であった。次に無自覚型と悲観型がそれぞれ21.7%で続いていた。一方、表面的関係性型では、悲観型（30.8%）が最も多くみられた。以下、無自覚型と質的議論否定型が19.2%で並んでいた。献身的関係性型では、悲観型とあきらめ型がそれぞれ3割弱みられた。妥協的關係性型では積極的受容型と質的議論否定型で半数を占め、また関係性拡散型では記述したすべての者がこの2つのタイプのいずれかに属していた。

続いて態度の組合せに着目したところ、関係性達成型では「ともに非受容的記述なし」の者が最も多く、全体の4割を占めていた。次に「配偶者の死のみ非受容的記述あり」が続いていた（30.4%）。表面的関係性型は「ともに非受容的記述なし」の者が最も多く（34.6%）、続いて多かったのは「ともに非受容的記述あり」であった（26.9%）。献身的関係性型、妥協的關係性型、関係性拡散型も、最も多く分布していたのは「ともに非受容的記述なし」であった（それぞれ42.9%、58.3%、77.8%）。特に関係性拡散型の分布の偏りが顕著である。

関係性達成型は、他のステイタスに比べ配偶者の死に対して積極的受容型の割合が高く示されたが、一方で無自覚型や悲観型もそれぞれ2割程度みられた。このことは、配偶者の存在の人格的意味づけがたとえ達成できていても、そのことが即配偶者の死の積極的な受容を予測するわけではないことが推察される。むしろ、関係性達成型にみられた無自覚型と悲観型の記述は、人格的意味づけを確立した今だからこそ、死の問題を棚上げしたいという気持ちが反映されているとも考えられる。この結果は、関係性の成熟と死の受容の問題は慎重に論じられる必要があることを示唆しているといえる。ところで、関係性達成型には、模索型の者が17.4%存在していたことと、また質的議論否定型が一人もみられなかったことも忘れてはならない。このことは、関係性達成型にとって死の問題を吟味することは苦痛のともなうことでありながら、どのステイタスよりもそのことを真剣に考えている、現段階ではみられなくても少なくともその素地を有していることが推察できる。

それに対し、関係性の達成の必要性を認知しながらも、十分には完了できていないステイタス（献身的関係性型、妥協的關係性型、関係性拡散型）ほど、配偶者の死に対して受容する傾向がみられるという結果も注目に値する。特に、関係性拡散型は自己と配偶者の死に対する態度の組合せにおいて、8割近くの者が双方の死を受け入れていた。この結果を安易に喜ぶことは危険であろう。なぜなら、関係性達成型と関係性拡散型とでは、そもそも配偶者の存在意味が大きく異なり、関係性拡散型はその存在に対し否定的見解を抱きながら現実生活を生きているからである。また、関係性拡散型は自己と配偶者の人生評価が低いとの指摘もみられる（宇都宮，1996b）。したがって、死の受容の様態には様々なものがあると考えられるが、彼女たちの死を受け入れようとする背景には、生きることに見出だせない、あるいは現実生活から逃避する手段としての死をとらえている場合もあると推察され、配偶者との関係性を修正する必要性を示す結果であると理解できる。

さらに、関係性達成型と同様に、配偶者の存在あるいは結婚生活を肯定的に意味づけている点で共通している表面的関係性型は、実際の死別場面においてどのステイタスよりも不適應性が懸念される。なぜなら、配偶者の存在の人格的意味づけには、まずその必要性を気づかせる大前提として、配偶者を自分の一部あるいは自分を配偶者の一部として境界を不明瞭にするのではなく、自分とは異なる他者であるという事実をしっかりと受けとめることが求められる。自己と配偶者との明確な境界が確立していない状態のまま、配偶者を肯定的にとらえている表面的関係性型にとって、配偶者の死別はとりわけ悲劇的であるかもしれないからである。

(3)夫婦における死の順序性とその背景的要因（表8）

①一般的傾向

まず順序選択であるが、対象者は「配偶者が先」とする者が、6割を超えていた。つづいて順序の根拠であるが、これはいずれかの順序選択（「自分が先で配偶者は後」もしくは「配偶者が先で自分は後」）を行った者のみを対象としている。分析の結果、一般的傾向として内的要因すなわち人格的・情愛的要因をその根拠として挙げている者が多かった（53.8%）。病気もちや年齢差といった客観推測的要因を挙げる者は、1割に満たなかった。

対象者である女性は「配偶者が先で自分は後」とした者が多く、彼女らの大部分はその根拠として内的要因であれ外的要因であれ、自分が看取るためということ挙げている。このことは、女性が死別の問題を議論する場合、自分が残されたとき（介護期以降の人生）の辛さや不安を抱くより前に、看取り（介

護期) のテーマの方が切実な問題として受けとめていることが推察される。

②ステイタス比較

次に死の順序選択と根拠では、どのステイタスも配偶者が先というパターンを選択する者が多くみられたが、その傾向が最も強かったのは、妥協的關係性型である(83.3%)。対照的に、表面的關係性型と關係性拡散型は、他のステイタスに比べてあまり多くない(それぞれ57.7%, 55.5%)。この他に表面的關係性型に、明確な選択をしない者が比較のみられたことは注目に値する(23.1%)。その内訳は、質的議論否定型3名、無自覚型2名、模索型1名である。この傾向も、先に示された表面的關係性型の特徴に通じるものがある。

ところで、表面的關係性型と關係性拡散型では、配偶者が先とする死の順序パターンが比較的少ないと指摘したが、そうした順序パターンの根拠に着目したところ、表面的關係性型では内的要因が半数みられたのに対し、關係性拡散型ではいずれかの順序を示した7名の内わずか1名(14.3%)しかみられなかった。また自分が後を選択した割合が最も高かった妥協的關係性型も、内的要因を示す者は36.4%と、過半数に満たなかった。なお、死の順序の根拠に、内的要因の占める割合が最も高かったのは、關係性達成型で80.0%を占め、他のステイタスとの差が著しい。關係性達成型は、先の配偶者の死に対する記述もふ

表8 各ステイタスの、夫婦内の死の順序選択・順序根拠

	死の順序選択				死の順序根拠 ^{注)}		
	自分が先	配偶者が先	選択せず	不明	情愛的要因	規範的要因	客観的要因
全 体 n=(80)	13 (16.3)	52 (65.0)	13 (16.3)	2 (2.5)	35 (53.8)	25 (38.5)	5 (7.7)
關係性達成型 n=(23)	4 (17.4)	16 (69.6)	3 (13.0)	0 (0.0)	16 (80.0)	2 (10.0)	2 (10.0)
表面的關係性型 n=(26)	4 (15.4)	15 (57.7)	6 (23.1)	1 (3.8)	10 (52.6)	8 (42.1)	1 (5.3)
献身的關係性型 n=(7)	1 (14.3)	5 (71.4)	1 (14.3)	0 (0.0)	3 (50.0)	3 (50.0)	0 (0.0)
妥協的關係性型 n=(12)	1 (8.3)	10 (83.3)	1 (8.3)	0 (0.0)	4 (36.4)	6 (54.5)	1 (9.1)
關係性拡散型 n=(9)	2 (22.2)	5 (55.5)	1 (11.1)	1 (11.1)	1 (14.3)	5 (71.4)	1 (14.3)

注. 死の順序選択でどちらかの選択(自分が先もしくは配偶者が先)をした者の人数に占める割合(%)である。

まえると、配偶者の死に対して不安を抱いたり否認を示しながらも、内的な要因によって、自分が後とする死の順序性を主体的に希望していた。死別前のこうした姿勢と、喪失後の短期的および長期的適応との間には、どのような関連性があるのでしょうか。

ところで、先の一般的傾向において、女性が死別の問題を議論する場合、自分が残されたときの辛さや不安を抱くより前に、看取りのテーマの方が切実な問題として受けとめているかもしれないとの指摘をした。この分析から、同じ看取りのテーマを女性が有していても、その意志を支える背景要因はステイタスにより異なることが示唆された。

(4)想定された死別場面での配偶者に対する言葉掛け（表9）

①一般的傾向

残った配偶者に対しての言葉掛けは、「死別により逢えない（逢えなくなった）配偶者を安心させるあるいは支援する姿勢がうかがわれる記述」が最も多く（53.8%）、「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」がそれに続いていた（35.0%）。一方、去った配偶者に対しての言葉掛けでは、「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」に最も多く分布していた（42.5%）。次に多く見られたのは、「死別により逢えない（逢えなくなった）配偶者を安心させるあるいは支援する姿勢がうかがわれる記述」であった（36.3%）。

残った配偶者に対しての言葉掛けでは、死別後の事象を挙げる傾向が高かった。これは、一人残す夫のことが気掛かりであることを示していると考えられる。逆に去った配偶者への言葉掛けでは、死別後の事象よりも、過去に配偶者が自分にしてくれたことへの賞賛が上回っていた。この結果は、自分が先立つ場合とは異なり、夫の生活を心配する必要がないため、過去をふりかえることが可能になっているのかもしれない。

②ステイタス比較

残った配偶者に対しては、関係性達成型を除くすべてのステイタスで、「死別により逢えない（逢えなくなった）配偶者を安心させるあるいは支援する姿勢がうかがわれる記述」が最も多くみられた。それに対し、関係性達成型は「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」が最も多くみられ、この記述だけで過半数を占めていた（56.5%）。一方、去った配偶者に対しては、配偶者の存在を肯定的に意味づけているステイタスでは、「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」が、最も多い記述内容であった（それぞれ関係性達成型：47.8%、表面的関係性型：46.2%）。その他の注目すべき点として、関係性達成型の4人に1人が「内在化により絆は存在しつづけるあるいは看取った側が

表9 各ステータスの、死別場面での配偶者に対する言葉掛け^(注)

	残った配偶者への言葉掛け					去った配偶者への言葉掛け						
	過去の配偶者	過去の自己	死別後の専業	死別の否認	関係永続性	その他	過去の配偶者	過去の自己	死別後の専業	死別の否認	関係永続性	その他
全 体 n=(80)	28 (35.0)	0 (0.0)	43 (53.8)	3 (3.8)	7 (10.0)	9 (11.3)	34 (42.5)	3 (3.8)	29 (36.3)	8 (10.0)	10 (12.5)	7 (8.8)
関係性達成型 n=(23)	13 (56.5)	0 (0.0)	7 (30.4)	1 (4.3)	3 (13.0)	1 (4.3)	11 (47.8)	1 (4.3)	6 (26.1)	2 (8.7)	6 (26.1)	2 (8.7)
表面的関係性型 n=(26)	9 (34.6)	0 (0.0)	15 (57.7)	1 (3.8)	2 (7.7)	2 (7.7)	12 (46.2)	2 (7.7)	9 (34.6)	3 (11.5)	2 (7.7)	2 (7.7)
献身的関係性型 n=(7)	3 (42.9)	0 (0.0)	6 (85.7)	0 (0.0)	1 (14.3)	0 (0.0)	3 (42.9)	0 (0.0)	4 (57.1)	0 (0.0)	1 (14.3)	0 (0.0)
妥協的關係性型 n=(12)	2 (16.7)	0 (0.0)	7 (58.3)	1 (8.3)	0 (0.0)	3 (25.0)	4 (33.3)	0 (0.0)	4 (33.3)	2 (16.7)	0 (0.0)	2 (16.7)
関係性拡散型 n=(9)	1 (11.1)	0 (0.0)	6 (66.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (33.3)	3 (33.3)	0 (0.0)	5 (55.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (11.1)

注. 複数回答がみられたため、割合の総計は100(%)を超える。

死ぬことで再び絆は結ばれるという関係の永続性を示す記述」をしていることが挙げられる。

ここで、想定された両場面への反応を照らし合わせて総括するに、いかなるステイタスも、死別という究極的な別離にいたっては、否定的な言葉掛けをする者はほとんどみられなかった。ただし、関係性が十分でない者が穏やかな別れを実現させるためには、これまでの夫婦人生の問い直しは避けなければならないのかもしれない。それは、否定的感情を再び経験することになるからである。「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」が、妥協的關係性型と関係性拡散型に少ない要因には、そもそもそうした肯定的な記憶がないだけでなく、過去に振り返ろうとしない防衛機制が働き、未来への記述を志向するようになるのではないかと推測される。

対照的に、関係性達成型では、どちらの想定場面においても「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」が多くみられた。このことは、高齢期に十分な関係性に達した者は、死別が究極的な別離であるからこそ、あえて積極的に過去を振り返り、もう一度それを意味づける傾向があることを示唆しているのかもしれない。また関係性達成型の中には、「内在化により絆は存在しつづけるあるいは看取った側が死ぬことで再び絆は結ばれるという関係の永続性を示す記述」も何人かにみられた。このことから、過去の夫婦人生を再吟味するプロセスには、配偶者との関係性を永続的なものへと内在化することを含み、そのプロセスを通して関係性を統合させると考えられる。

4. 今後の課題

本研究では、高齢女性80名を対象に配偶者との死別に対する基本的態度について検討してきた。具体的な分析内容は、①自己と配偶者双方の死に対する意識、②夫婦における死の順序性とその背景的要因、③想定された死別場面での配偶者に対する言葉掛けであった。

ステイタス間の比較分析を通して、配偶者との死別への基本的態度は、関係性の質によって異なることが示唆された。いくつかのステイタスで、配偶者に先立たれた時、克服することが特に困難であると予想される反応がみられた。

その一つは、表面的関係性型である。このステイタスは、配偶者の死について主体的に探求する者が少なく、非受容的態度を示す者が多かった。円満な結婚生活を送っている者でも、自己と配偶者とが別個の存在であると自覚し、その上で人格レベルから相手を必要をしている関係性達成型と、存在意味について探求することなく配偶者との境界が不明瞭なままになっている表面的関係性型とでは、死別への準備性に違いがあることは非常に興味深い結果といえる。

一般に夫婦仲がよかった者ほど、死の衝撃は大きいとされているが、長期的適応において両者に差異がみられるか注目されるところである。

また、かつては人格的な関係性を望ましいとしながらも、その達成が不十分なままにしている妥協的關係性型と関係性拡散型も深刻であると思われる。この2つのステイタスは、配偶者の死をそれほど重大とはみなしていなかった。配偶者の存在が自己の人生に否定的な意味しかもっていない関係性拡散型の中には、配偶者の死を歓迎している者さえいるかもしれない。結婚生活が円満でないということで、一見死別への適応が容易に見える。しかし、配偶者を生前憎んでいた者ほど、より強い罪悪感に悩まされるとの報告があり(河合,1990)、不適応性が懸念される。これらの結果は、女性の一般的傾向の背後にある個人差をより慎重に取り扱う必要性を示している。

最後に、今後の課題を以下に示す。本研究の対象者は、高齢期の中でも比較的高齢前期の者が多かった。したがって、彼らの関係性や死にたいする基本的態度が、この先自己あるいは配偶者の身体的衰退や夫妻間の介護体験、ならびに近親者の死などを通じて変容を遂げるか分析することが第1の課題である。

さらに、関係性達成型には、他のステイタスに比べて「内在化により絆は存在しつづけるあるいは看取った側が死ぬことで再び絆は結ばれるという関係の永続性を示す記述」が多くみられた。たとえ物理的には存在していなくても、内在化した配偶者の存在が残された者の生きる支えとして肯定的に機能するのであれば、この問題について積極的に取り組んでいく必要があると考えられる。このことをふまえ、配偶者喪失後の心理的適応における内在化の効果について検討していくことを第2の課題としたい。

引用文献

- American Psychiatric Association (高橋三郎他 訳) 1988 DSM-III-R 精神障害の分類と診断の手続き 医学書院
- Deeken, A. 1995 Grief education and bereavement support in Japan. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 49, 129-133.
- 河合千恵子 1990 配偶者を喪う時 廣濟堂
- Molinari, V. & Reichlin, R. E. 1985 Life review reminiscence in elderly : A review of the literature. *International Journal of Aging and Human Development*, 20, 81-92.
- 岡村清子 1992 高齢期における配偶者との死別と孤独感—死別後経過年数別にみた関連要因— 老年社会科学, 14, 73-81.

- Robinson, L. C. & Blanton, P. W. 1993 Marital strengths in enduring marriages. *Family Relations*, 42, 38-45.
- 高橋久美子 1989 老年期における配偶者喪失—死別への準備と適応— 日本家政学会誌, 40, 575-585.
- 宇都宮博 1996a 夫婦の関係性ステイタスと高齢期夫婦の関係性発達の検討 日本教育心理学会 第38回総会発表論文集, 51.
- 宇都宮博 1996b 高齢期夫婦の関係性ステイタスと夫婦適応の関連性の検討 日本家政学会 第48回大会研究発表要旨集, 103.
- Weishauss, S. & Field, D. 1988 A half of marriage: Continuity or change? *Journal of Marriage and the Family*, 50, 763-774.